隻狼のヒーローアカデミア

シバサン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

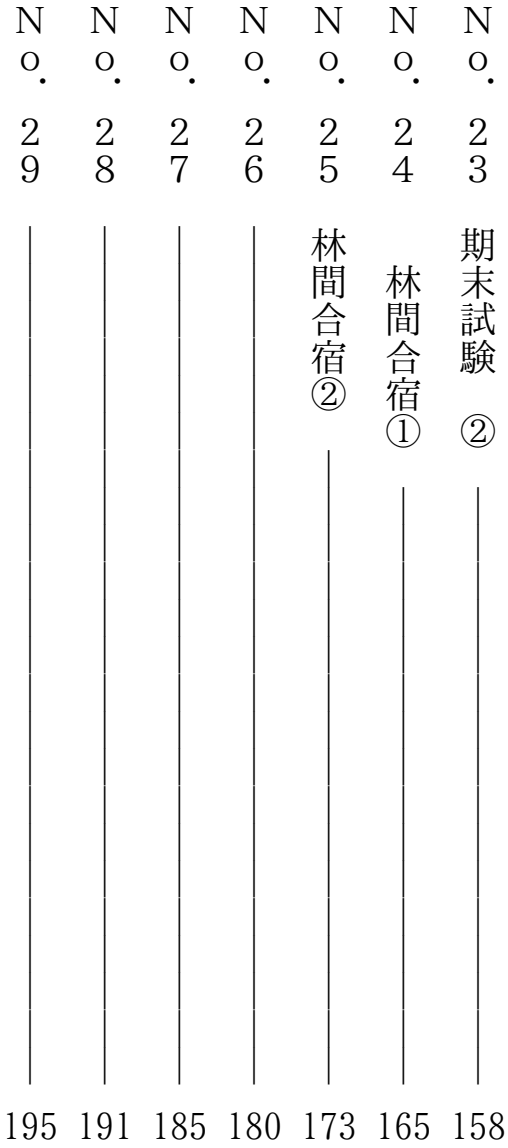
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

隻腕の狼（チワワ）、ヒーロー社会に忍ぶ。

目次

No.1 薄井 狼 …… 1
No.2 緑谷出久 …… 5
No.3 入試までの日常 …… 11
No.4 入試実技試験 …… 14
No.5 合否 …… 19
No.5.5 出会いの記憶、もうひとつのオリジン …… 23
No.6 個性把握テスト …… 27
No.7 戦闘訓練 …… 36
No.8 侵入者 …… 46
No.9 襲撃 …… 56
No.9.5 束の間の休息 …… 65
No.10 忍びの牙 …… 72
No.11 第1種目、障害物競走 …… 78
No.12 第2種目、騎馬戦 …… 84
No.13 最終種目、第一回戦 …… 92
No.14 最終種目、第二回戦 …… 99
No.15 最終種目、準決勝戦 …… 105
No.16 最終種目、決勝戦 …… 111
No.17 ヒーローネーム …… 118
No.18 職場体験に行こう① …… 125
No.19 職場体験に行こう② …… 132
No.20 職場体験明け① …… 139
No.21 職場体験明け② …… 144
No.22 期末試験 ① …… 150


No.23
期末試験 ②
No.24
林間合宿①
No.25
林間合宿②
No.26
No.27
No.28
No.29
158
165
173
180
185
191
195

Ｎｏ．１　薄井　狼

物心ついた頃、俺には3つの記憶が存在した。

ひとつは、前世とでも言うべきか、今はもう朧げにしか覚えていないが現代日本でごくごく普通の生活をしていた記憶。

ひとつは、さるお方の忍として戦国の世を駆け、人を獣を怪異を殺し、主を不死の呪いから解き放ち人へと返す為に自刃した記憶。

そして最後のひとつは、今生きている自分の記憶だ。

俺は現在「個性」と呼ばれる超能力を、ほぼ全ての人間が有する世界に生を受けている。前世の記憶によると『僕のヒーローアカデミア』という漫画の世界に該当する。読んだことはないが聞いたことはある、何の気なしに数回アニメを見たこともあったかもしれない。

それに気づいた当初は酷く困惑したものだが、それに気づくと同時に思い出したことがある。

詳しいことは覚えていないが当時とあるゲームにハマっていた俺は確かに、ＳＥＫＩＲＯというゲームの主人公である「狼」の力が欲しいと誰かに望んだのだ。

おそらく、ラノベなどで流行っている神様転生の特典とかいうものに当たるのだろう。

そしてその翌日にはＳＥＫＩＲＯの狼としての記憶が流れ込んできた。

あまりに濃厚過ぎる死の匂い、人の肉に刃を突き立てる感触、何度も味わう死の痛み、そして蘇る感覚……その日は何度も嘔吐し、頭痛と熱で何日も寝込んだことは未だに覚えている。

そして体調が快復した日、自分に個性が宿った事を自覚した。よく聞こえ、よく見え、よく感じ取れるようになったのだ。

国に義務付けられた個性検査ではふたつ個性を持つ珍しい体質だと医者から告げられたが、もう一つは未だ発現の予兆すら見せず、仔細は不明。身体能力の向上かとも考えたが、それにしてはこの世界基準で人間の範疇に収まっている。

しかし、隻狼の力が欲しいとは言ったが別に記憶まで寄越せとは

言っていない、無駄に丁寧な仕事をしやがる。
まぁ注文通りのことはしてくれたし、せっかく第二の人生を超能力を持って歩み始めたのだから、楽しまなければ損だな。と楽観的な考えのもとに狼の動きができるように体を鍛え、手に馴染みそうな棒切れを振り回したりしながら小学生時代を過ごし、中学生2年生になった俺はとある選択に迫られていた。
「むぅ……」
机を前に低い声で唸る男、眉間には深く皺が刻まれている。
制服に少し不釣り合いな、大人びたどこか掴みにくい雰囲気、そしていつにも増して深い皺。深刻そうな気配を纏う彼の様子を遠巻きに見ながらクラスメイトは教室から出て下校していく。
「……」
更に眉間の皺が深くなる。
彼はピクリとも動かず、不動の姿勢で机の上に置かれた「進路希望調査票」とプリントされた一枚の紙と睨み合いを続けていた。
「ど、どうしたの?.また深刻そうな顔してるけど……。」
一見近寄り難く思われる彼にも友人はいる。
小学生の中学年ごろだったか、その友人が体育で派手にすっ転び、鼻血を垂らして半べそをかいていたところを、保健室まで連れて行ったのが付き合いの始まりだった。
それ以来、理由はわからないが何故か彼によく話しかけてくるようになったのだ。
「……緑谷、か。」
緑谷出久(みどりやいずく)。
癖っ毛でモサモサした頭をしている地味で弱気な男子、周りからの評価は見た目通りの根暗なオタク。そこそこ長い付き合いのある彼は周りとは違った評価をしているが本人に言ったことはない。
彼は口下手なのだ。
「あっ、進路希望調査票……。朝、先生に早く出せって言われてたもんね。」
「あぁ……」

クラスメイトが続々と進路希望を提出する中、彼を含めた複数名は未だ進路を決めあぐねており、今朝のＨＲでは担任の教師からお小言を貰っていたのだ。

「薄井(うすい)くん成績いいし、志望校が多くて絞り切れない感じかな。それともどこも決まってない？」

「……明かせぬ。」

「そ、そっか。薄井くん秘密主義だもんね！」

「……すまぬ」

「う、ううん！じゃあ僕は先に帰るね、また明日。」

「あぁ……」

彼とて志望校が全く決まってないわけではない。

『僕のヒーローアカデミア』という作品をほんの少しだけ知っているが故、作品の内容に、いわば世界の流れのようなものに自分が介入していいものなのかがわからぬ、故に進路を決めあぐねている。

というのが彼の言い訳だ。

彼は『僕のヒーローアカデミア』を読んだことがなく、アニメもまともに見たこともない。故に作品の主人公がどの学校へ進学するのか朧げにしか覚えておらず、朧げな知識と勘でようやく志望校を絞り込んでいるところであった。

ふぅ、と一息つく。

思案を巡らせている最中は他のことが疎かになりがちで友人との会話もおざなりになってしまった。もうこの際友人である緑谷出久と同じところにしてしまおうか、そう考えたとき彼は思い至った。

根暗で弱気、そして何より地味さに隠されて彼と出会った日以降、忘れていたのだ。

僕のヒーローアカデミア(世界)の主人公は緑谷出久だと。

忍に劣らぬ隠蔽工作……かつて忍であった記憶を持つ彼こと薄井狼は己の友人に感心していた。

今から追いかけて希望校を聞き出すか？いやしかし、帰り道は逆だし、先程ぶっきらぼうに返してしまったのに追いかけてまで聞くのもな……。

悩んだ末に彼は明日、今日の態度を謝ると共に聞こうと決意し、帰路に着いた。

Ｎｏ．２　緑谷出久

明日、緑谷に謝って志望校を教えてもらおうと決意した翌日。
早めに学校に着いて緑谷を待っていようと考えていた彼は大きな足止めを食らっていた。
敵（ヴィラン）が通学路付近の大通りで暴れているのだ。
何が目的かはわからないが、人通りが多く建物も多く立ち並ぶこの通りで暴れるからには目立ちたいのだろう。
今や世界総人口の８割の人々が持つ個性（超能力）、己が身に宿ったその力を犯罪に用いる者のことを敵（ヴィラン）と呼ぶ。
そしてそれに抗するのは警察ではない。
かつて人々が描いた「架空（ユメ）」は「現実」へ、憧れは職業へと変わった。
正義の味方（ヒーロー）
個性犯罪を取り締まる他、民間人の避難誘導や災害救助など様々な慈善行を行う者たちだ。免許制の公務員だが固定給ではなく活躍に応じて国から収入を得ている。と緑谷から聞いた覚えがある。
初めてそれを聞いたときは「正義を語るにも免許が必要とは世知辛い世の中だ」と彼は感じたが、緑谷出久に「何事にも秩序は必要」と彼独特の超がつく早口と熱いヒーロー愛で諭されてからは口外しないようにしている。
健全な少年少女ならば人気のヒーローを見ればテンションは爆上がり、敵（ヴィラン）退治の後やパトロール中に見かければサインを求めることもあるだろう。
しかし先を急ぎたい彼からすれば敵（ヴィラン）も正義の味方（ヒーロー）も障害物でしかない。
事情を話せば遅刻の取り消しや公欠扱いにしてくれるのでいつもならば「ゆっくり登校できるし、まぁいいか」と呑気に考える彼だが今は事情が違う。即座に対象の鎮圧を行わず呑気に名乗りをあげる正義の味方（ヒーロー）を眺めている暇は無いのだ。
ただでさえ家を出るのが少し遅れてしまったというのに。

なかなか終わらないヒーローショーを遠巻きに眺めながら古びた腕時計で時間を確認する。到着する頃にはＨＲが始まる時間になってしまうだろう、朝からツイていないものだ。

教室に到着すると同時にＨＲ開始のチャイムが校舎に鳴り響く。

彼は泣く泣く自分の座席に座るが、緑谷出久と彼の座席は近いとは言えず、授業中に話しかけることも難しい。だが幸いにも今日は午前授業だ、話しかける機会はすぐ訪れるだろう。

「おーい聞いてるか！進路希望出してないのあとお前だけだぞ薄井？」

担任の声に頷くことで返す。

「薄井もヒーロー科志望だろ？成績いいんだから雄英でも士傑でも、なんでもいいから早いとこ出してくれよ」

ヒーロー科、ヒーローが職業として確立した際に作られたヒーロー免許を取るになるために必要なことを学ぶ学科だ。

偏差値７９　入試倍率３００倍の桁外れな最難関校、それが雄英高校だ。そしてそれに並ぶは士傑高校。「東の雄英、西の士傑」と評される通りに士傑高校もかなりの難関校である。

また頷くことでそれを返事とする。

「せんせえーー！いくら頭がよくてもそんな没個性の空気ヤロウじゃ雄英行けるわけねえよ!!」

後方から爆発音のようにデカくトゲトゲしい発言が聞こえた。

彼は爆豪勝己（ばくごうかつき）。

トゲトゲしい性格と同様に髪型もツンツンしている。

爆破という強個性を持つ天才児だが、他人に対する気遣いだとかやさしさはきっと誤って爆破させてしまった悲しい奴、というのが狼の中での彼の評価だ。

「あー、確か爆豪は……雄英志望だったな」

と担任が言う。

その言葉にクラス内がざわつき、調子づいた爆豪は自分の成績自慢から始まり、高額納税者に名を連ねるのだと大声で宣言した。

しっかりと高い目標を持ち周囲に大声で宣言できる豪胆さは見習うべきだろうか。

「あ、そういや緑谷も雄英志望だったな」

担任の一言に一瞬、世界が止まった気がした。

この担任はどうやら爆豪勝己という爆弾に火をつけるのが好きらしい。

そして全員が緑谷の方を振り向き、全員が「お前じゃムリだ！」といっせいに笑い出す。

「勉強できるだけじゃヒーロー科は入れねーんだぞ！」

「そっ、そんな規定もうないよ！前例がないだけで……」

オロオロしながらも言い返す緑谷、しかしその態度が最後の起爆剤となったのか。怒号と共に爆破の個性が緑谷を襲った。

「こらデクゥ!!!没個性どころか「無個性」のてめェが何で俺と同じ土俵に立てるんだ!!?」

だれ(緑)よりもヒーロー(谷)に憧れた人間(出)には個性が宿っていなかった。故(久)に彼は常に弱気で自分に自信が持てず、今の今まで宙ぶらりんの状態でいる。彼はヒーローを目指すには意思が弱く、ヒーローを諦め切れない程度には意思が強かった。

前には進めず、他の道を歩むこともできず、夢にしがみついている。

もう少し強いか弱ければここまで爆豪にイジメられることはなかっただろう。爆豪とは違う意味で悲しい奴だと、彼はそう感じている。

迫る爆豪に言い訳しながら後ずさる緑谷だが、結局は爆豪と周りの雰囲気に負け、俯き黙り込んでしまう。

「あ～……そろそろホームルーム終わるぞ。席につけ」

担任がそう告げるとぞろぞろと全員が席に戻る。

いつもより遠く聞こえるチャイムを聞きながら緑谷は席に戻った。

そして放課後、昨日のことを謝るべく彼は緑谷に話しかけた。

「緑谷」

「わあぁっ!!!って薄井くんか……ビックリした。いつもだけど、薄井

くんってすごく気配が薄いというか、あ、だ、ダジャレじゃないよ!?」
「わかっている。昨日は、すまなかった……」
「へ、昨日って……？」
「案じてくれたのに、あまり、応対ができずすまなかった。」
「そ、そんなこと？別に謝るほどじゃないって、薄井くんがあからさまに悩んでるの珍しかったから。僕の方こそ、真剣に考えてたみたいなのに邪魔しちゃってごめんね？」
「いや、かまわない……」
ふと、緑谷の机に乗っているノートが目に止まる。将来の為のヒーロー分析Ｎｏ．１３と表紙に書かれたノートだ。１３ということは、１から１２も存在するのだろう。ヒーローを半ば諦めている彼が夢にしがみ付く為の最後の縁（よすが）……
「あっ、こ、これは」
視線に気づいた緑谷がノートを隠そうとするが、横から彼に肩をぶつけながら割って入った爆豪がノートを取り上げてしまう。
「話はまだ済んでねーぞデク」
「あっ、か、かっちゃん……」
自然と爆豪の取り巻き達がノートの表紙を見る。やはりというか、朝と同じように緑谷は笑われてしまった。
「カツキ、何ソレ？将来の為の……マジか!?緑谷マジか～っ」
「い、いいだろ、返してよ！」
言葉では言うが、わなわなするだけで行動には移せずにいる。爆豪がノートを持っているのだ、直接取り返そうとすれば何をされるかわかったものではない。
そんな姿に痺れを切らしたのか、爆豪はノートを両手で挟み爆破しようとした。
「おい」
彼の呼びかけに一瞬肩をビクつかせた爆豪だがすぐ彼に振り返り、目尻を釣り上げて睨みを効かせる。
「あぁ!?ンだよ、いつから見てやがった空気ヤロウ!!」
「……そのへんにしておけ。」

「……チッ、いいか?俺はこの平凡な中学から、初めて、唯一の、雄英進学者っつー箔をつけてーのさ。トップヒーローは学生時代から逸話を残してるからな。つーわけで、一応さ。雄英受けるな、ナードくん。テメェもだぞ空気ヤロウ。」

彼の静止も延命措置にしか過ぎなかったようだ、ボム!っという音と同時にノートは黒く焦げ、ボロボロにされた挙句に窓の外に投げ捨てられてしまう。

「あーっ!?酷い……って薄井くん!!?」

流石に見逃せない、そう思ったときには体が動いていた。ノートと共に窓から身を乗り出し、ノートを掴むが、そのまま落下する……。

「こ、ここ3階……ッ!」

一目散に緑谷は1階へと駆けて行く。残された爆豪はというと、唖然としていた。俺が原因でアイツが飛び降りた?死んだ?怪我?俺が…?いや違う!アイツが勝手に飛び降りただけだ、俺は悪くない。俺は悪くない!俺は……!

「お、おいカツキ、流石にヤベェんじゃねぇの……?」

「し、知るか、俺は関係ねぇ!アイツが勝手に飛び降りただけだ!!そうだろうが、アァ!!?」

「わ、わかった。わかったって……」

そうして逃げるように教室から出て行く爆豪とその取り巻き。

落下した後、2階の柵に掴まりながら個性で強化された聴力でその会話を盗み聞きしていた彼は呆れた面持ちで1階に降り立った。

「あれで、ヒーロー志望か……聞いて呆れる……」

「薄井くん!!大丈夫!!?どこか怪我してない!?は、はやく保健室に」

初めて出会ったときと同じく、半べそをかいた緑谷が足をもつれさせながら走って来た。

「問題ない……、これを。」

「よかった……で、でも、なんで僕のノートなんかの為に……」

「大事なモノなのだろう。」

直接的ではない、とても遠回しだが、親にさえ肯定されなかった

緑谷出久（みどりやいずく）自分の夢を彼は肯定してくれたような気がした。

「～ッ！あ、ありが、とう……!!薄井くん…！」

緑谷の半べそはさらに酷くなってしまった。

だが、これでよかったはずだ、彼は正しいと思ったことを、為すべきと思ったことを為したのだから。

この後、彼と別れ家路に着いた緑谷がとある事件に巻き込まれるのだが、それはここで語るべき話ではないだろう。それは緑谷出久だけの原点（オリジン）なのだから。

Ｎｏ．３　入試までの日常

爆豪が緑谷のノートを爆破した翌日から、数ヶ月。

あの日以降の爆豪は今までの荒れ具合がまるで嘘のように鎮まり、借りて来た猫――ライオンの方が適当だろうか、とまではいかないが幾分か大人しくなった。さらに言えば緑谷に対するイジメをピタッとやめたのだ。緑谷をバカにする輩がいなくなったわけではないが、爆豪が関与することはなくなった。

周囲に聞き耳を立てて得た情報によると、個性犯罪に巻き込まれヴィランに人質にされていたそうで、その事件は通りすがったＮｏ．１ヒーローの「オールマイト」が解決したらしい。

最強無敵だと思っていた自分がそうではないと知り、態度を改めた……あの傲岸不遜天上天下唯我独尊を地で行く爆豪が？ありえない。おそらく、己の価値観を揺るがす大きな何かがあったのだろう。本人に聞いても話すはずもなく知るよしもない、気にするだけ無駄か。

そして変わったと言えばもうひとり、緑谷も変わった。

前に進むことも他の道を選ぶこともできず宙ぶらりんの状態から、少しずつ前に歩み出したのだろう。ブレていた芯が通ったように思える、心なしか顔つきも前より少しだけ情けなさが抜けたように見える、ほんの少しだが。それと、前よりも話しかけてくる頻度が多くなった。昼休みに共に昼食をとるようになり、他愛のない話やヒーローに関する話をしてくれる機会が増えたのだ。

「そういえば薄井くんの個性ってちゃんと聞いたことなかったんだけど、聞いてみてもいいかな。僕の予想だと隠密系の個性だと思うんだ！気配を薄くしたり人から見えにくくしたり」

自分が無個性だというのに、自ら個性の話を振ってくる程度には親交を深めることができたらしい。知られることでデメリットがある個性でもなし、この際教えてしまっても構わないだろう。

「……五感の強化だ」

「五感ってことは、視覚聴覚嗅覚味覚触覚全部ってこと!?すごい個性じゃないか！どれかひとつに特化してる個性はプロヒーローにも多

くいるけど五感全部は聞いたことないつまり遠方からの視察に聴覚による索敵さらには嗅覚で追跡までできる斥候に打って付けの個性だ災害救助にも役立つし室内で発生する個性犯罪なら現場にひとりいれば状況を大きく変えることだってできるかもしれないくらいだけど待てよ薄井くんの気配の薄さを活かすなら他のヒーローのサポートよりむしろ個人での活動の方が向いてるんじゃないか特に潜入工作や人質救出が求められる現場で活躍できそうだしどちらにせよ幅広い現場で活動できる――」

　個性を聞いただけで瞬時にここまでマシンガントークできる知識量と頭の回転は評価に値する、だが考え込んで周りが見えなくなるのは玉に瑕だ。彼も似た者同士なのだが。

「……緑谷、戻ってこい」

「あっ、ご、ごめんね薄井くん！つい……」

「気にするな」

「うん、ありがとう。そうそう、前から聞こうと思ってたんだけど、結局進路希望はどうしたの？前は相当悩んでたみたいだから」

「雄英だ」

「そっか、雄英か――って雄英!?」

「あぁ。それと、声が大きい……」

　雄英というワードに過剰反応する爆発物がこの教室には存在するのだ、今もチラチラとこちらに鋭い眼光を向けてくる爆発物が。

「ご、ごめん……いや、薄井くんならきっと受かると思うけど、ヒーローにあんまり興味なさそうだから少し意外だなって」

　困った。とても困った。玄関先にGがいたときと同じくらい困った。

『僕のヒーローアカデミア』の主人公であるお前が入学するから、などとは口が裂けても言えない。

　志望理由など理由書を書くときに考えればいいと思っていた為、まだそんなものは考えていなかったのだ。

　故にこう答えた。

「……明かせぬ……。そろそろ休憩時間も終わる、早く食べ

終えてしまえ」

「あ、ホントだ。急がなきゃ急がなきゃ……」

困ったら明かさなきゃいいのである。沈黙は金なりとはよく言ったモノだ。

こうして何気なく日常は過ぎ、雄英高校の入試へと近づいていく。

最近早朝の海浜公園に不審者がいると聞くがどうせホームレスか何かだろう、粗大ゴミで溢れたあの公園に行くもの好きなどそうそういないのだから。

Ｎｏ．４　入試実技試験

吐く息は白く、空気を吸い込めば冷たさで肺が痛むような冬日。
ついに雄英高校の入試当日、入試会場である雄英高校を前に彼は緊張する素振りもなく、人混みをスルスルと抜け出し実技試験の説明がされる多目的ホールへと足を運んだ。
受験番号で指定された席へ向かうとすぐ隣に爆豪、その隣に緑谷が座っていた。五十音順なので仕方ないと言えば仕方ないが、爆豪の隣に座ることになろうとは。

「あ、お、おおはよう薄井くん。そろそろ説明始まるよ」
「あぁ」
緑谷はだいぶ緊張しているようだ。
「チッ……結局テメェも雄英かよ」
「……あぁ」
爆豪は相変わらず機嫌が悪そうである。

「今日は俺のライヴにようこそー!!エヴァバディセイヘイ!!!!」
突如鳴り響く大声に会場はシーンと静まり返る。
気づけばホールの中央には金髪の派手な男性が立っていた、この声の主だろう。
「こいつあシヴィーッ!!!!受験生のリスナー!実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!アユーレディ!?
ＹＥＡＨＨ!!!!!」

中央のテンションの高さと周囲の対応の落差で氷ができてしまいそうだ、ふたつ隣に座っていても聞こえるほどブツブツと呟いている緑谷からの情報によるとホールの中央にいる人物はボイスヒーロー「プレゼントマイク」大声による広範囲の音波攻撃を得意とするヒーローのようだ。毎週ラジオをやっているらしい。
プレゼントマイクの説明によると、実技試験の内容は１０分間の模

擬市街地演習、指定の演習会場でそれぞれポイントが振られた３種類の仮想敵（ヴィラン）のロボットを行動不能にしポイントを稼ぎ、その点数で合否を決めるのだという。

武器などの持ち込みは自由、妨害などのアンチヒーロー行為はＮＧ。

試験内容と個性の相性が悪いのか、この時点で諦めムードを漂わせる生徒も何人かいた。

説明が一通り終わると

「質問よろしいでしょうか!?」

と真っ直ぐな挙手とともに眼鏡をかけた高身長の男子が声を上げた。

「プリントには４種の仮想敵が記載されております！誤載であれば日本最高峰の雄英において恥ずべき痴態!!我々は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです!!」

なんと真面目な……しかし真面目すぎる故か、少々キツい物言いをしてしまっている。あれでも緊張しているのだろうか、それともヒーローを目指す者は爆豪のように一癖も二癖もある人物しかいないのか。

「ついでにそこの縮毛の君！先程からボソボソと気がちる!!物見遊山のつもりなら雄英（ここ）から立ち去りたまえ！」

指を刺されて睨まれた緑谷は小さく謝るとすっかり萎縮してしまった。

そしてその質問にプレゼントマイクは、４種目の仮想敵は０Ｐのおじゃま虫のようなギミックだと説明する。

眼鏡の少年は腰を９０。折り曲げ大きな声で礼を述べると着席した。

きっとどこまでも真面目なのだろう。

他に質問がないのを確認するとプレゼントマイクが話し出す。

「最後にリスナー諸君へ我が校の「校訓」をプレゼントしよう！かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言った！真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者、と!!――――『Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ（更に向こう へ）』!!――――それ

では皆、良い受難を!!」
　空気がピリッと引き締まる中、学生たちは各々の演習会場へと向かい出す。流石はラジオパーソナリティ、焚き付けるのが上手い……。そんなことを考えつつ彼も席を離れ会場へ向かう。どうやら同じ学校同士で協力などさせないようになっているらしく、受験番号が連番にも関わらず彼のいる会場には緑谷と爆豪の姿はなかった。
　演習会場といっても見た目はひとつの街のように広い、より実践的な形で動ける者とそうでない者を篩(ふるい)にかけるのだろう。
　会場のゲートをまえに闘志を剥き出しに準備運動をする者、精神統一を図ろうと深呼吸をする者、緊張でガチガチに固まっている者、三者三様の様が見て取れる。
　狼は持ち込んだ異様に硬い木刀を片手に適度な脱力を保ちつつ、試験開始の合図を待つ。そしてそれは唐突に訪れた。
「ハイスタートー!」
　スピーカーから音が聞こえると同時に狼は迷わず駆け出す。
　一瞬遅れて彼を追うように駆け出す者、未だ状況を飲み込めずにいる者。雄英がどちらを求めているかなど言うまでもない。
「どうしたぁ?!実戦じゃカウントなんざねぇんだよ!!もう賽は投げられてんぞ?!!」
　スピーカーから聞こえるプレゼントマイクの声に反応し、ようやく全ての学生が駆け出した。

《標的補足!!ブッ殺ス!!》
　という声と共に１Ｐの仮想敵が狼に襲いかかる。
　アームによる攻撃を木刀で弾き、弱点だと判断した頭部のカメラに木刀を勢いよく突き立て素早く引き抜きまた駆け出す。
　体幹を崩し、相手の急所を突き、即座に殺める技術――忍殺。
　ＳＥＫＩＲＯの狼の記憶に何度も向き合い、心中で幾度となく強者と刃を交えた。心中といえど、その経験は確かに彼の糧となっている。
　１Ｐと２Ｐの仮想敵を数台倒したところで周囲の状況を確認する

為にビルとビルの壁を交互に蹴り、壁を登った。
この近辺は思ったより人が密集している。耳から拾う音を頼りに、人が少ないが仮想敵はいる、そんな場所を探りながら屋上を駆け、跳び、時にはよじ登り、仮想敵を倒しながら進んでいく。
――――ったた……ってやばいやばい！――――
強化された聴覚が拾った少女の声に一瞬立ち止まる……位置は遠くない。こんな時、主人公（緑谷出久）ならどうする……？
「っ……」
そう考えたときには既に行動に移していた。進路を変更し、声の元へ駆ける。
声の主は見つからないが仮想敵は視認できた。そこそこ硬く、一度撃破した後は狙うのを避けていた３Ｐの仮想敵。一撃で仕留めるには強力な攻撃が必要。そう判断するや否や彼は屋上の縁に足をかけ、どこかへ狙いを定め攻撃を行おうとしている地上の仮想敵へと跳ぶ。
落下しながら体勢を整え、彼だけが見える赤い印（弱点）へ木刀の狙いを定め、硬さに負けぬよう、柄頭を抑え込みながら仮想敵の機体へ木刀を突き立てる。
グドンッ!!と鈍い音を立てながら木刀は機体にめり込み、仮想敵ロボットは動かぬ鉄屑へと姿を変えた。無事に機能を停止したことを確認してからあたりを見渡すが、やはり誰もいない。
「うわーすごっ！助かったよ！うっかり転んだとこ見つかっちゃってさ～ハハハ！」
何もない空間から声がした。いや、何もない訳ではない、注意深く聞けば心音と足音、匂いを感じ取ることができた。つまり、ここにいるのは……
「透明人間……か」
「ピンポーン！助けてくれたところ悪いけど試験だから次行かなくちゃ、またね!!」
「……」
透明で誰からも見えないからといって、声から察するに女子が全裸で街中を走り回るのは如何なものか。そんな思考に囚われしばらく

茫然としていた狼はビルが崩れる音とズシン！ズシン！と巨大な何かが動く音で我を取り戻した。

音の方向を見ると、立ち並ぶビル群よりも巨大な仮想敵……０Ｐのおじゃまギミックが、圧倒的質量を持った脅威が姿を現していた。

Ｎｏ．５　合否

人間は自分より身長が数十センチ高いだけの人間にすら威圧感を感じる。しかしあの仮想敵（ヴィラン）ロボットはどうだ、１０階建てのビルに届かんとする高さ、６車線はある道路を狭そうに歩く大きさ、コンクリートで作られた建造物を容易く破壊する膂力。

人間には決して届かぬ質量、圧倒的な存在感を放つそれは明確な脅威として受験生たちの前に立ち塞がる。

なるほど、プレゼントマイクの言葉通りおじゃま虫のようだが、邪魔で済む程度ではない。防御系の個性を持たぬ者は破壊の余波ですら大きな被害を被ることになりそうだ。

もう少しポイントを稼いでおきたいところだが……前世の記憶が正しければ、たしか緑谷は０ポイントにも関わらず、理由は忘れてしまったがアイツを壊したおかげで入学できたのだ。いくら『僕のヒーローアカデミア』にわかと言えど、これくらいは知っている。

つまりアレを壊せばポイントが心許なくても合格へと一気に近づける……はずだ。

ＳＥＫＩＲＯの狼はかつて戦国の世で、とぐろを巻けば山に見間違いそうなほど巨大な白蛇を殺し、果てには神なる竜にすら挑み勝利を収めた。それに比べればあの程度、相手取ることに問題はない。

逃げる受験生とは逆方向に、彼らの隙間を縫いながら０ポイント敵のもとへ駆ける。足元に近づき、足首にあたる関節部を木刀で斬りつけるが、カンッと鈍い音を立てるだけで効果はあまり望めそうにない。ポイント付きの仮想敵に比べて硬すぎる、破壊してもらうことを前提に作っていないのだから当たり前といえば当たり前なのだが。

そして衝撃を与えたことでこちらを認識したようだ。

巨大な鉄の拳を上に構え振り下ろしてくる、動きは鈍重で容易に避けることができたが、アレをなんの備えも無しに身に受ければ即座に死が待っていることを予感させられる。

そしてちょうど良い道ができた、足から登っていては時間がかかる。腕を駆け上がらさせてもらおう。

振り下ろされた腕に跳び乗り、真っ直ぐ頭部を目掛け駆け登る。
が、腕を振り回す０ポイント敵に耐えきれず振り落とされてしまう。
「くっ……」
負ける道理はないが、勝ち筋も見えない。
せめて刀か斧があればダメージを与えられただろうが、手元にあるのは普段の訓練で使い古された小汚い木刀が一本だけ。
２つ宿っている己の個性はどちらも破壊を用途にできるものではない。慢心していた……ＳＥＫＩＲＯの狼の力とカンスト厄憑き苦難をクリアした自分のスキルがあれば負けることはないと、慢心していた。
０ポイント敵の攻撃を避けつつ思考を巡らせるが突破口は見えない。思い返せば物語の最序盤、刀を持っていない狼は戦闘を避けて進んでいた。体術だけでも敵を倒せる狼ですら装備が無ければ戦おうとしないのだ。考えを改めなくてはならない。
狼は刀（楔丸）を手にして初めて狼（忍）として牙を突き立てることができるのだと。
負けないと、勝てるはイコールではない。
「終了～!!!!」
スピーカーから試験終了を告げる声が響く。それと同時に仮想敵は動きを止め、物言わぬ金属の塊となった。
「……」
ふぅ、と息を吐き、木刀を左手に持ち直し試験会場を後にする。周囲の受験生がこちらを見ながらヒソヒソと何か話しているが、今は聞く気になれなかった。この敗北は重く受け止め、次に活かさねば。

試験から1週間後、郵便受けに雄英高校からの封筒が入っていた。
のだが……封筒が妙に薄い。合格しているなら入学手続きやその他諸々の書類も同封されているはずだ。
まさか、落ちたのか……？
恐る恐る封筒を開封すると、中はプリント数枚と円盤状の物体。とりあえず一番気になった円盤を取り出し机に置くと
《俺のラジオにようこそぉ!!エヴァバディセイヘイ!?》
耳をつんざく派手な声と共に円盤から映像が浮かび上がり、プレゼントマイクが投影された。
《……オーケーオーケー、ナイスなレスポンスサンキューな!!
そんじゃ、合否発表プラス実技の成績発表のコーナー!!心の準備はいいか？アーユーレディー!?ＹＥＡＨＨ!!!!》
雄英勤務のプロヒーローがわざわざ口頭で説明してくれるのは一種のサービスなのだが、あまりヒーローに詳しくない彼はもう少し静かにしてほしいと思っていた。後で円盤を緑谷にあげれば喜ぶだろうか……。
《ゴホン！受験生９６３０番、薄井狼！
筆記はこれといって問題無し。次に実技試験！獲得敵（ヴィランポイント）Ｐは３６Ｐ！一応合格ライン!!》
薄い封筒で驚かしやがって、しっかり合格してるではないか。
《しかぁし!!我々雄英教師陣が見ていたのは敵を倒す戦闘力のみにあらず！蹴落とすライバルでもある同じ受験者（リスナー）を助けることができるかどうか！命を賭けて他人を救う精神性！これらを加味して判断される救助活動（レスキューポイント）Ｐ３０Ｐ!!人を助けずして何がヒーローってな!!!》
声に加え身振り手振りまで激しくなっていくプレゼントマイク。
なるほど、緑谷が合格できたのは救助活動Ｐが理由か。誰もが逃げる中、命を賭して０Ｐ敵に立ち向かった事が評価されたのだろう。
《襲われてた受験生（リスナー）少女を助けたこと、そしてなにより！終盤では稼げたはずのポイントを捨ててまで周りに被害が出ないよう０Ｐ敵に立ち向かったその勇気!!思わずバイブス上がっちまったぜ!!そして敵Ｐと救助活動Ｐを足した合計６６Ｐ！総合成績第５位!!文句なし

の合格!!》

ヒーロー科の定員は４０名、その中の5番目ならばなかなか良い成績を収めることができたのではないだろうか。微かに笑みがこぼれそうになる。

《春に会えるのを楽しみに待ってるぜ！それでは、シーユーネクストタァイム!!次のラジオをお楽しみにぃ!!!……あ、書類関係は別で郵送されるからｎ》

……なんとも締まらぬ終わり方だ。

何はともあれ、これで無事に高校生活が始まる。

そしえ『僕のヒーローアカデミア』という作品は俺という異物を巻き込みながら動き出すのだろう。

Ｎｏ．５．５　出会いの記憶、もうひとつのオリジン

緑谷出久（僕）にとって彼（薄井狼）はヒーローのひとりだ。
免許の有無じゃなくて、人を助けられる人っていう意味でのヒーロー。
思い返せば彼との出会いは……なかなか情け無い出会い方だったと思う。
小学校3年生になったばかりの体育の時間、サッカーの授業。少しぼーっとしてしまっていた僕は前方から迫るボールに気づかず、それを顔面でキャッチ。さらに急なことに驚き転倒……地面と熱烈なキスをしてしまった。
「しっかり前みろやデク!!」
「ププッ、緑谷ダッセーの！」
「個性もなくて運動もできないんじゃヒーローなんて無理無理」
同じチームのかっちゃん（爆豪勝己）、僕の醜態を見ていた周りのみんな。痛みや悔しさ、恥ずかしさ……何より情けない自分がみじめで仕方なくって、涙が出てくる。そのまま俯いて立ち上がる事ができないでいた。

かっちゃんに目をつけられるのを怖がってか、心配してくれる人はいても手を差し伸べてくれる人はひとりもいない。
「おい」
だから、聞こえた声も僕に向けられたものじゃないと思って、のそのそと独りで立ち上がろうとして顔を上げた時はすごく驚いたのを覚えてる。
「おい」
「わああっ!?だ、だだ誰……!?」

近くにいる気配が全然しなかったものだから、ビックリして尻餅をついてしまった。
男子にしては少し長い髪、周りと比べ少し大人びた顔、身長は僕とそう変わらなかったのにとても落ち着いた雰囲気をしていて、はじめ

は上級生と勘違いしていたな。
　学年が上がってクラス替えがあったばかりとはいえ、一度も顔を見た覚えがなかったのも関係してたと思う。
「……大丈夫か」
「へ、え？ぼ、僕……？」
「お前以外に誰がいる」
　ぬっ、と押しつけるように彼は右手を前に出す。
「あ、う、うん、ありがとう……ございます」
　彼に手を引かれ、立たせてもらう。
　表情は険しいし、話し方はぶっきらぼうで、テレビ画面越しにいつも見ているヒーローとは全然違う。だけど、手を差し伸べてくれた事がどうしようもなく嬉しくて、その手はどうしようもなく暖かかったんだ。
「保健室へ行くぞ。……上は向くな、血の止まりが悪くなる」
「は、はひ……」
　そのまま保健室まで連れ添ってもらったが、タイミングが悪く保険医の先生がいない。それを確認すると置いてある救急箱を手に取り、慣れた手つきで擦りむいた傷の手当てをしてくれた。
　この人は、なんで無個性の僕にこんなによくしてくれるんだろう。
「……何故、誰もお前に手を貸さぬ」
「そ、それは……僕が、ドジで、情け無いヤツだから……」
　そして、無個性だから。無個性なのにヒーローを夢見ているから。
　もし話したら「お前には無理だ」と、他の人と同じようにバカにされてしまうだろうか。
「……先生には、説明しておく。落ち着いたら、戻れ」
　それでも、聞いておきたかった。なんで僕みたいなヤツを助けてくれたのか。
「っ、あ、あのっ！どうして僕を、助けてくれたんですか……？」
「……要らぬ世話だったか」
「ち、ちがっ、そうじゃ、なくて！僕、オールマイトが大好きで、だからヒーローになりたくてっ、で、でも……無個性、だから、みん

なからバカにされて、それで……」
　言って、しまった。この人もきっと、無理だって、諦めろって言うに決まってる……
「……ならば、諦めるのか」
「諦めっ、たくない！……けど、個性がなくちゃ」
　けど、薄井くんは僕の夢を決して否定しなかった。
　オールマイトに「ヒーローになれる」と言われた日に思い出したんだ。
　あの頃はまだ小さくてわからなかったけど、今ならわかる。
「……為すべきことがあるのならば、掟は自分で定める。…そういうものだ」
　それだけ言うと彼は行ってしまったけど。
　きっと、彼は彼なりに僕のことを励ましてくれていたんだ。
　自分のことを他人に決めさせるなって、
　やりたい事は自分で決めるんだって、
　僕の夢を、諦めるなって……！
　後日、教室の隅の席に座る彼を見つけ、僕から話しかけに行った事が交友関係の始まりだ。てっきり年上だと思ってたから、同じクラスだって気づいた時は出会った時と同じくらいビックリしてしまった。

「ン？ボーっとして大丈夫かい、緑谷少年。」
「あ、すみませんオールマイト。ちょっと、友達のことを思い出してて……」
「お、さてはその子にホの字だな、恋バナか!?ちょっとオジサンにも聞かせてよ、ナイショにするから」
「ち、違いますって！そもそも男の子ですから!!あとオールマイトはオジサンじゃないです」
「ＨＡＨＡＨＡ！それは失敬！さぁ、休憩は終わり。トレーニングの続きだ!!気張りたまえよ緑谷少年!!」
　雄英高校入学試験まであと数日、友人の言葉と尊敬する師の期待を胸に彼はトレーニングに励む。

もうあの頃のナヨナヨした彼は、もういないのだ。

Ｎｏ．６　個性把握テスト

高校生活初日。新生活に心躍らせ、ワクワクやドキドキを抑えつつ、友人はできるかなどの不安を胸に歩み出す。素敵な出会いや甘酸っぱい青春、それらに期待を膨らませながら曲がり角を曲がる。

まだ見慣れない校舎を歩きながら自分の教室へ向かう。そして始まる高校生活、扉を開きいざ行かん……！

などあるはずがない、決してそんなもの（世界線）は存在しないのだ。

なぜならこの世界はバトル漫画だからだ。

愉快痛快奇々怪々、波瀾万丈、友情努力勝利、泥臭く血汗と涙と血の血晶を作ることを余儀なくされる高校生活が始まるのだ。

少〇ジャンプのバトル漫画なのだから当たり前だ、怪我をして血を流して当然、運が悪ければ死。

そんな世界に転生したのだ、転生特典（チート）、恩恵を身に宿さぬのなら常に身の回りに気を配りながら生きることだけに集中すべきだ。

だが、転生した際に新たな力を手にしていたら、他の者とは違う特別な力や肉体を持っていたのならば話は別だ。

世界の流れ（原作）を知る者ならばそれを変えるため、推しキャラを死の運命から救うため、よりよい結末を迎えるために。

あるいは世界の流れ（原作）を壊すため、己の身に宿った特別な力をひけらかすため、世界を我が物とするために。

さまざまな志、さまざまな野望を元に行動するだろう。

そしてなんの因果か、彼もまた特別な力を身に宿し、世界の流れ（原作）に身を投じていた。

始業開始まであと２分ほどだろうか、だだっ広い校舎の中を彷徨っていた彼は遅れ気味で高さ５ｍはあるだろう１―Ａと書かれた扉の前、彼がこれから１年間通う予定の教室の前に到着した。

入り口付近では中学校で同じクラスだった緑谷出久、そしてクラスメイトであろう茶髪の女子が話している。

もう女子と仲良くなったのか、と感心したが緑谷のテンパリ具合からしてマトモに会話できていないようだ。

しかしそれより気になるのは廊下に放置されている寝袋、厚みからして中に人が入っている。今まで寝てたのならクラスメイトのスルースキルの高さが窺える、逆に今さっきここに来たというのなら中身は相当の変人だ。

そんなことを考えていると寝袋の中身と目が合った。

あまり手入れされていないであろうボサボサの長髪に無精髭、若干充血した双眸。どう見ても小汚い不審者なのだが、言葉にし難い強者特有の雰囲気を感じる。相手を欺く為の偽装か、ただの面倒くさがり屋なのか……とまぁ知らないフリをしてみたが、この人物だけは知っている。

プロヒーロー「イレイザーヘッド」本名は相澤消太（あいざわしょうた）。視認した相手の個性を一時的に使用不可にする個性「抹消」を身に宿すヒーロー。首巻きのように巻いている捕縛布を武器に増強系の個性でさえ相手取り仕留める技量、武器の捕縛布を使った三次元的な移動術。ヒーローに対して手厳しい態度やヒーローを目指す生徒に厳しいのは彼の優しさの裏返しであり、その理由は彼の過去に起因するらしい。

見た目も相まって、捕縛布を引っ掛けて移動する姿がなんとなく、ＳＥＫＩＲＯの狼に似てるなーと思い気になったので、この人だけは知っているのだ。前世で友人から聞いた。ちなみにその友人には漫画を読めと怒られたのでイレイザーヘッドの過去の出来事は知らない。

目が合った彼を無視した寝袋の中身は、始業時間ピッタリに声を発した。

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け。ここは……ヒーロー科だぞ」

１０秒でエナジーをチャージできるゼリー飲料を1秒足らずで飲み干すと、寝袋から這い出た。

クラスメイトは全員動揺している。どんな担任（プロヒーロー）の教師が来るのかと心待ちにしていたら小汚いオジサンがいたのだから、それも仕方ないだろう。

「ハイ、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠くね。あとおまえはもう少し時間に余裕を持って行動しろ、

遅れてやってくるようじゃヒーローは務まらん」
　指を差され注意される。今回は完全に自分に非があるのだ、素直に認め、頭を下げる。見た目はとてもヒーローとは思えないが中身は相当ヒーローに厳しい人間なのだ。
「すみませぬ……」
「ん、よろしい。担任の相澤消太（あいざわしょうた）だ。よろしくね。早速だが体操服着（コレ）てグラウンドに出ろ」
　それだけ言うと担任、相澤先生はスタスタと歩いて行ってしまった。彼の性格的に時間には遅れない方が身のためだろう。
「……緑谷」
「あ、薄井くん！薄井くんもやっぱり受かってたんだね、嬉しいよ！これからもよろしくね」
「あぁ……それよりも、急いだ方がいい。担任があの性格だ」
「確かに……遅れたらマズそうだね」
　机に足を乗せて偉そうに座っている爆豪がこちらを睨んでいるが無視を決め込むことにした。構っていては時間がいくらあっても足りない。

▼

「個性把握、テストォ!?」
　グラウンドに出た1―A組の生徒は担任から聞かされた言葉を復唱した。驚くのも無理はない、何もかもが急過ぎるのだ。
　ヒーローになるには入学式やガイダンスなどの悠長な行事に出る時間などない。故に参加しない。雄英は「自由」な校風が売り文句、それは生徒に限らず教員側も然り。故に参加させない。
　最難関校の雄英に合格したとはいえ少し前まで中学生だったのだ、そんな説明をされても理解が追いつかないだろう。
　そして相澤先生は爆豪にソフトボール投げ――中学校でも行われていた体力テストのアレだ――を「個性」を使用してやれと言う。
　爆豪は軽く肩をほぐしてから「死ねえ!!!」と、個性的な掛け声と共

に個性の爆風（爆破）を乗せた球を思いっきりブン投げた。
相澤先生の持つ電子機器には「７０５．２ｍ」と表示されていた。
普通にやっては出せぬ数値だ。
「まずは自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段（個性を使わなければ）」
個性を使用して体力テストを行う、それが個性把握テスト。
事前に通知しなかったのは自分の個性をどの種目に、どのように使えるのか即興で考えさせるためだろうか。
「なんだこれ!!すげー面白そう！」
「７０５ｍってマジかよ」
「個性思いっきり使えるんだ！流石ヒーロー科！」
「……面白そう、ね。」
誰が言ったか、その生徒に悪気はないし素直にそう思ったのだろう。しかし我らが担任はその言葉がお気に召さなかったようだ。
「ヒーローになる為の３年間、そんな腹づもりで過ごす気でいるのかい？」
彼らはもっと早く自覚すべきだったのだ。
自分たちは既に、試されていると。
ヒーローになる為の試験を課されているのだと。
「よし。トータル成績最下位の者は見込み無しとし「除籍処分」としよう」
声を上げ驚愕する者、不安に怯える者、不敵に笑みを浮かべる者、真剣な面持ちに変わる者。様々な反応をするがしかし、殆どの者は内心「やってやるぞ」と気合を入れ直していることだろう。
これしきで心折れ無様を晒す者は、そもそもこの場に立つことすら許されていない。
「生徒の如何は先生（おれたち）の自由。
ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ」
勿論非難の声はあがる、理不尽すぎる、と。
しかし、自然災害や敵（ヴィラン）、いつどこから来るかわからない理不尽（ピンチ）を覆すのがヒーローなのだと担任は言う。

「これから3年間、雄英は君たちに全力で苦難を与え続ける。Ｐｌｕｓ Ｕｌｔｒａ（更に向こう へ）さ、全力で乗り越えて来い」

▼

緑谷の様子がおかしい。顔に絶望感しか見えない。

あれでは通常の能力すら発揮することができないだろう。

確か個性は……オールマイトから譲り受けたはず。

０Ｐのデカブツを殴り壊したのだから、使えないはずがない。現時点では何か使えない理由でもあったのだったか？

試験会場は違ったうえに、緑谷から個性の話は特にされていない。俺が緑谷は個性を手にしたと知っているのは辻褄が合わない……見守るほかないか。

意を決した顔で緑谷がボール投げの円に足を踏み入れる。

腕を振りかぶり、投げる。右腕にとてつもない力の流れが発生するのを感じたが、それはボールが投げられる直前に霧散してしまった。

「なっ……今、確かに使おうって……」

緑谷は確かに個性を使おうとしたのだろう、しかし我らが担任はそれを許さない。

「個性を消した。つくづくあの入試は合理性に欠くよ、お前のような奴も入学できてしまう」

個性を消した、という言葉で緑谷は担任の正体に気づいたようだ、抹消ヒーロー「イレイザーヘッド」だと。

イレイザーヘッドはそのまま言葉を続ける。

制御できない個性で行動不能になり、誰かに助けてもらうのかと。ひとり助けて木偶の坊になるお前の力ではヒーローにはなれないと。

そうか、個性が強力すぎて自壊するのだったか……難儀なものだ。

このまま個性を使わなければ宣言通り除籍、使って行動不能になっても除籍、どちらに転んでも除籍は免れまい。

けれど、けれどだ、それを乗り越える――Ｐｌｕｓ Ｕｌｔｒａ（更に向こう へ）する――からこそ、緑谷出久は主人公と呼ばれるのだ。

「ＳＭＡＳＨ!!!」
オールマイトと同じ掛け声と共に投げられるボール。
普通ではない勢いで投げられたそれは明らかに個性を使用しての球威だ。
「先生……！まだ、動けます……ッ!!」
骨折と内出血で青紫色に酷く腫れた人差し指を無理やり握り込み、緑谷は言った。
緑谷が個性を使えたことに爆豪が突っかかりに行くが、時間が勿体無いと相澤先生に一蹴され大人しくなる。
指先だけに個性を集中させ、行動不能になるのを防いだのか……なるほど、やはり咄嗟の判断力や思考力は流石だ。幼い頃からヒーローを分析しているだけある。
しかし、痛みが響いてか、その後の緑谷の記録はどれもパッとしないものであった。

▼

５０ｍ走、握力測定、立ち幅跳び、反復横跳び、ボール投げ、長座体前屈、上体起こし、持久走の計８種目。
狼はどれも優秀な成績を残した。
個性無しにしては、という枕詞が着いてしまうが。
しかし非凡な成績を残した種目がひとつ、持久走だ。
５０ｍ走と変わらぬ速さで走り出した彼に、クラスメイト全員が思った。「トバしすぎだ、絶対に途中でバテる」と。
しかし現実は違った。一切バテずに１５００ｍを走り切り、終わった後も軽く肩で呼吸する程度。
移動に特化した個性には流石に勝つことは叶わなかったが、個性を使用している者と変わらぬ速さで駆け抜けたのだ。
「んじゃ、パパッと結果発表。口頭で説明するのは時間の無駄なので一括開示する」
相澤先生は手に持つ電子機器からスクリーンを表示する。

薄井狼の順位は6位。
そして最下位には緑谷出久の名前。
緑谷の顔はまるでこの世の終わりが訪れたかのように、絶望に染まっていた。
「ちなみに除籍はウソな。君らの最大限を引き出すための、合理的虚偽」
我らが担任の言葉に驚愕する者が幾人か、緑谷に至っては驚きすぎて存在が擦り切れそうな画風になっている。

こうして、入学初日は無事に?終了。
緑谷は相澤先生から保健室に行けと言われた為に、彼は教室でひとり待っていた。付き添ってもよかったが、もう子供でもない。
先に帰っても良かったのだが、なんとなく緑谷出久を待っていた。
数分もすると、教室の扉が開けられる。
「あ、薄井くん。待っててくれたの?ごめんね、待たせちゃって……」
「構わぬ。指は、問題ないのか」
「うん、保健室でリカバリーガールに治してもらったから。あ、リカバリーガールっていうのは、雄英の屋台骨のプロヒーローで人の治癒力を活性化させる個性を――」
緑谷のヒーロートークを聞きながら下校する。今までも何度か、帰り道が別れるまでこうして話を聞きながら帰った、狼にとって日常を感じさせる光景だった。
「緑谷くん!指は治ったのかい?」
「わ!飯田くん……!うん、リカバリーガールのおかげで」
「そうか、無事なようでよかった。しかし、相澤先生にはやられたよ。俺は「これが最高峰か!」とか思ってしまった、教師がウソで生徒を鼓舞するとは……」
たしか入試説明のときに注意してきたやつだ。もう打ち解けているとは、始業前の短い時間で何かあったのだろうか。
「お二人さーん!駅まで?待ってー!」
今朝、教室の入り口付近で緑谷と話していた茶髪の女子だ。個性把

握テストの際、ボール投げで無限という記録を出していたはず。
「君は無限女子！」
「麗日お茶子です！えっと、飯田天哉くんに、緑谷……デクくん、だよね！」
「デク!?」
と驚く緑谷、いきなり蔑称で呼ばれれば驚くだろう。しかも人畜無害そうな顔をしながら言われたのだ。
「え？だってテストのとき爆豪って人が「デクてめェー！」って」
緑谷はそそくさと本名とデクというあだ名について説明する。女子慣れしてなさすぎだろう。
「そうなんだ、ごめん！でもデクって「頑張れ!!」って感じで、なんか好きだ、私」
「デクです!!」
顔を真っ赤にして緑谷は即答した。女子慣れしてなさすぎだろう。
飯田、という男も驚いている。
「緑谷くん！浅いぞ！蔑称なんだろ!?」
「コペルニクス的転回……」
「こぺ……？」
麗日お茶子が首を捻る。
「物の見方や考え方が、正反対に変わることのたとえ……だったか」
「へぇ～、物知りだねぇ……って誰!!?」
「おおっ!!?き、君！いつからそこにいたんだ!?」
「薄井くんなら最初からいたけど……あ、ふたりとも紹介するね。同じ中学だった、薄井狼くんっていうんだ」
口下手な彼に気を利かせたのか、緑谷が彼をふたりに紹介する。
その判断は正解だろう。ひとりではきっと、彼はいつまでも名乗りを上げない。
「ハッ、君は持久走が速かった男子か!!なるほど、常時発動の隠密系の個性、なのか……？気づかなくて申し訳ない！同じ1年A組の仲間として、これからよろしく頼む、薄井くん」
「私麗日お茶子！よろしくね、薄井くん」

「……あぁ」

彼の日常に、友人がふたり増える日は遠くないだろう。

Ｎｏ．７　戦闘訓練

高校生活２日目、初日がかなり刺激的だったために今日も何かあるんじゃないかと身構えている生徒もいたが、座学の授業は至って普通の授業だったのでどこか拍子抜けな部分もある。

そして午後はヒーロー基礎学、ヒーロー科に来る生徒はこの科目を履修する為に来ていると言っても過言ではない。最も単位数が多く、最も重要な授業だ。

「わーたーしーがー！　普通にドアから来た!!」

２ｍを超える巨体に見合わぬ優しい動作で教室の扉を開けて登場するマントをたなびかせる筋骨隆々の人物。言わずと知れたＮｏ．１ヒーロー、オールマイトだ。拳ひとつで天候すらも変えてしまう力を持つ、存在そのものが犯罪の抑止力となる〝平和の象徴〟と言われている。「私が来た」とは彼の常套句であり、救う対象には絶大な安心を、逆に敵（ヴィラン）には絶望を与える言葉として有名だ。

ヒーローを志す者にとって、彼は目指すべき目標であり、超えられぬ壁でもあり、憧れでもある。

そんな存在が教鞭を執る、ヒーローについて教えてもらえるのだから、生徒たちが興奮するのも無理はない。

「ヒーロー基礎学はヒーローの素地を作るために様々な訓練を行う課目だ!!早速だが今日はコレ、戦闘訓練!!!」

ＢＡＴＴＬＥ、と書かれたパネルを取り出しそう告げるオールマイト。

戦闘訓練という言葉にまたもやテンションの上がりを隠せぬ生徒たち。災害救助をメインに活動するヒーローもいるが、やはり一番目立つのは敵退治。そのための訓練をするというのだから、興奮するのも仕方のないことだろう。担当がイレイザーヘッド（我らが担任）だったらまた違った反応をするのだろうが。

「それに伴って、こちら！」

教室の扉とは反対側の壁が稼働し、中からアタッシュケースが収納された棚が出てくる。自身の個性と要望に合わせて作られた戦闘服（コスチューム）。

自分はヒーローなのだと自覚するには、格好から入るのも大事なことだと、オールマイトは言う。

▼

黒い着物に黒い袴、上半身には鎖帷子を着込み、袴の裾は鉄板が仕込まれた脚絆で止め、動きを阻害しないようにされている。

そして柿渋色の羽織に、黄白色の首巻き。肩口付近まで伸びている髪は前髪含め一房に纏められ、後頭部の上部に縛られている。

腰には鉤爪のついた縄、円盤状の入れ物に収められた手裏剣、重く無骨な刃を持つ手斧に予備の短刀。そして一振りの日本刀、安全面から刃引きされているため斬ることは叶わないが、突き刺すにはある程度問題ないだろう。

うむ、若いことと忍義手がない事を除けば隻狼そのもの……いや、腕を斬られる前の狼と言った方が正しいか。

緑谷は……完全にオールマイトリスペクトだ。オールマイトの象徴であるV字の前髪と笑った口元をコスチュームに取り入れている。

「さぁ始めようか、有精卵共！戦闘訓練のお時間だ!!」

オールマイトの説明によると今回の訓練は、屋内での対人戦闘訓練。凶悪敵は屋内での出現率が高い、それを汲んでの屋内訓練。敵（ヴィラン）組とヒーロー組に分かれて2対2で行うようだ。自分に何が足りないか、まずはそれを知るための実戦だという。

状況設定は、敵は核兵器をアジトに隠しており、ヒーローはそれを処理するために動いている。

ヒーローの勝利条件は敵の確保または核兵器の回収。

敵の勝利条件はヒーローの確保または核兵器を守ること。

制限時間が課されているため迅速な行動が求められる。

カンニングペーパーをチラ見しながらの説明でなければ格好ついただろうに。

「コンビ及び対戦相手は、くじで決める！」

「適当なのですか!?」

と、白いロボットアニメのアーマーのようなコスチュームを身に纏った飯田が質問する。

現場では居合わせたヒーローと急にチームを組むことが多いからじゃないかと緑谷が言うと飯田は納得したようだ。

多分オールマイトもそこまで考えてないだろう。

くじの結果、薄井狼はI(アイ)チーム、ペアは……

「お前……入試のときの、透明人間か」

「あーっ！あのとき助けてくれた小さめの男の子!!あのときはありがとね、お互い受かってよかったよ～。名前聞きそびれちゃったし、なかなか見当たらなかったからさ」

透明人間という個性の割に随分と明るく元気な印象を受ける。いや、常に透明だからこそ、か……

「……あぁ」

「っと、自己紹介しなきゃね。私葉隠透(はがくれとおる)、君は？」

「……薄井」

「うんうん」

「……」

「……？」

おそらく首を傾げているであろう葉隠。なぜ首を傾げるのだろうか。

「……なんだ」

「いや下の名前!!クラスメイトなんだから教えてくれてもいいじゃんかよ～！」

そういうことか、苗字だけでも十分だろうに。

「……狼だ」

「じゃあ……狼くん！改めて、あのときはありがと。これからよろしくねっ！」

そうこうしてる間に第一戦が始まった。

モニタールームから教師(オールマイト)の解説を聞きつつ、訓練の様子を見るようだ。

ヒーロー側は緑谷と麗日、敵側は爆豪と飯田。一応全員知った顔だ

が……特に緑谷と爆豪の組み合わせは不安しかない。現に爆豪は私怨丸出しで独断専行で緑谷に奇襲、状況設定など眼中にあらず緑谷を叩きのめすことしか頭にないようだ。

結果から言うと、ヒーローチームの勝利。

しかし、緑谷は個性で腕をぶっ壊し、麗日は個性の反動でグロッキー。勝負に負けて試合に勝った、という言葉がピッタリだ。

オールマイトの講評ではＭＶＰは飯田。状況設定に基づいて行動できていた点が高く評価されたようだ。

「では次！ヒーローチーム轟少年＆障子少年　ＶＳ　敵チーム薄井少年＆葉隠少女！敵チームは先に入ってセッティング、ヒーローチームは５分後にスタートだ！」

▼

「どうするどうする？狼くん作戦ある？」

昨日の個性把握テストを見た限り、轟は氷を生み出し操る個性、障子の方は腕が複数本生えている異形の個性。

障子の方は１対１に持ち込めば対象可能、轟は個性の出力が不明な以上不確定要素が多い。

「……相手の個性は、わかるか」

一応、葉隠にも尋ねてみる。

「えーと、轟くんは氷の個性で、障子くんは腕がブワーって生えてるくらいしかわからないかな」

収穫は無し。仮に核と共に部屋に立て篭もったとしても氷で冷やされればこちらの動きは鈍る、そして相手は二人とも攻撃に転用できる個性。

迎え撃つのは得策ではない。

「……奇襲する。正面戦闘は不利だ」

「おぉ、ヴィランっぽい！じゃあ核は最上階。私たちは外で奇襲？」

「いや……挟み撃ちだ。仕留め損なっても、ある程度は補える」

「よし、じゃあそれで行こう！最初に入り口近くでちょっと相手の気を引きつけるから、その隙に奇襲よろしくね」
「あぁ」
彼が屋上へ到着するとすぐに訓練開始のブザーが鳴る。
すぐさま身をかがめ、ヒーローチームの様子を伺う。
あれは……しまった、障子の体から腕以外にも耳のようなものが生えている。ならばおそらく探知も可能……直に位置もバレる。
ヒーローチームは入り口に向かい歩いてくる……一瞬足を止めた。
葉隠が陽動を行なったか。ならば、今……！
軽く跳躍し屋上から飛び降りる。
先に狙うのは……氷の個性だ。不確定要素はなるべく早く排除するべきである。
「ッ、轟!!」
障子が轟を庇い、目標が障子にズレる。
心の中で舌打ちしつつ、足で障子の首を挟み、落下の勢いを回転に変え、巻き込みつつ床に投げる。本来ならこのまま刀を心の臓に突き立て、命を奪う。だが今は殺しはできない。代わりに掌底を顔面に叩き込み、確保テープ――これを巻けば確保判定になる――を素早く巻きつける。
それらの動作は数秒も満たぬ間に行われた。
「チッ……」
「参る……」
ほんの少し驚いたような顔をしている轟に向かい合う。
即座にステップで距離を詰め、刀で斬りかかるがバックステップで避けられる。轟が右腕を後方に構えた瞬間、

危

反射的に体が跳んだ。

幾度となく感じてきた強い殺気。かつて葦名の地で幾度も受け、幾度も見切ってきた即死級の攻撃。

轟の右腕の動きに沿って、容易に人を……いや、建物ですら凍らせてしまえるであろうサイズの氷塊が先程まで自分がいた場所に存在していた。奇襲は正解だった、防衛戦を選べば建物ごと凍らされて何もできずに負けていた可能性が高いだろう。

「今のを避けるか。なかなかやるな」

今のを何度でも打てるとしたら、なかなか厄介だ。

ならば、打たせる前に仕留める。

相手の攻撃は出が速い。ならばそれを上回る速度で、狙うは右腕をほんの少し後ろに引く瞬間。使う技はひとつしかない。

狼は手に握る刀を納刀し腰を落とすと、脱力し、精神を研ぎ澄ませる。

「なんだ、降参か」

「……戯言を」

「そうかよ、ならこれで終わ――ッ!?」

奥義・葦名十文字。

疾く斬ることを一意に極めた、葦名流の奥義。

納刀から繰り出される横一閃、そして縦一閃の居合。

故に、十文字という。

狼のそれは十文字には未だ遠く、かの剣聖に遠く及ばぬ。

だがしかし、今この場ではそれで事足りる。わずかだが、十分に隙は生まれた。

再び納刀、相手の左手側に回り込むよう体を滑らせ、側面から左の肘打ち、続けて右掌底を叩き込み、そのまま鉄山靠――中国拳法の背中を使った体当たり――で轟を建物の入り口付近へ吹き飛ばす。

拝み連拳・破魔の型。死なずを探求する寺院、仙峯寺に伝わる拳法のひとつだ。

「つぐっ、クソ……！」

すぐさま起き上がり反撃に氷を放とうとするが、それよりも早く牽制として手裏剣を投擲する。轟は咄嗟に氷で迎撃するが、個性の出力

はあまり出ない。
　焦っていた、個性の発動スピードと出力を武器にしていた轟焦凍（しょうと）は焦っていた。最大出力は1度躱されているうえに、2度目は初動を潰され、吹き飛ばされた。その後すぐに飛び道具が襲いかかり、息つく暇もない。
　手裏剣の投擲と同時に距離を詰めた狼の斬撃を避ける為に轟はバックステップを踏む。
　すぐに狼の追撃を警戒するが、それは来ない。なら次こそ一網打尽に……！
《敵（ヴィラン）チーム、ＷＩＩＩＩＮ!!》
「は？俺はまだ……っ！そうか、もうひとり……」
　彼は少し遅れて自分に巻きつけられた確保テープに気付いた。目の前の相手に気を取られ、もうひとり、透明な存在が頭から抜けていたのだ。
「いえーい！大勝利だよ狼くん、ハイターッチ!!」
「……あぁ」
　狼は慣れない動作で手を上げると、パチン、と軽い衝撃が右手に伝わる。
　初めて体験する感触にむず痒さを感じながらも、モニタールームへと戻った。なお気絶している障子は小型のロボットに保健室まで搬送されていた。
▼
「では講評の時間だ！今回のＭＶＰはモチロン薄井少年、だよね!!」
　奇襲から障子を無力化するまでのスピード、純粋な戦闘力、立てた作戦をそれ通りに遂行する能力などが主に評価された。
　ただオールマイトは
「もう少し言葉数を増やさないと作戦が上手く伝わらない時もある。

そこは要改善だぜ、シャイボーイ!!あと屋上から飛び降りた時は先生ヒヤヒヤしちゃったぞ！」

とのこと。

狼の強靭な足腰の前にあの程度の高さ何の問題もないのだが。

その後も戦闘訓練はつつがなく行われた。

緑谷が腕をぶっ壊したこと以外に大きな怪我はなく、特にアクシデントもなく授業終了の時間が近づいていた。

「みんなお疲れさん！初めての訓練にしちゃ上出来だったぜ！」

オールマイトは緑谷に講評を聞かせに行く、と伝えると急いでその場をさってしまった。

「よう薄井！おつかれ!!お前のバトルすっげーアツかったぜ！」

「最初のでっかい氷よく避けたねー！」

「1戦目に続いて2戦目まであんなの見せられて気合入りまくっちまったよ！」

自分の装備に不具合が生じていないか確認し、帰ろうとしていたところに声をかけられる。

逆立った赤色髪型が特徴的な少年、明るいピンク色の髪と肌、反転した目の色に頭部に触角のようなものを生やした少女、身長が高く体格もよい唇が厚めの少年。

それぞれ、硬化、酸、条件付き増強系の個性を持っていたはずだ。

「俺あ切島鋭児郎(きりしまえいじろう)。この後みんなで訓練の反省会やるってなったんだけど、お前も来てくれよ！」

「私芦戸三奈(あしどみな)！いろいろ教えてよーー！」

「俺！砂藤！」

「あ、あぁ……」

勢いに押されて返事をしてしまう。

しかし、なにか用事があるわけでもなし。時間を潰すにはいいかもしれない。

「よっし、じゃあ着替えたら教室な！」

▼

コスチューム（忍の装束）から制服に着替え、髪を下ろす。刀袋に刀を仕舞い、それを肩にかけて教室に戻る。

その後はもう大変だった。

入った途端にクラスのほぼ全員が集まり急に始まる自己紹介。そして質問攻め。

「どんな個性なの！」

「どうやって鍛えたらあんな動きできんだ!?」

「格闘は中国拳法っぽかったけど、どこの技なんだ？あんな居合術も見たことない」

「なんで既に女子と仲良さげなんだよォーッ」

「落下からの奇襲も見事だったわ、ケロ」

「手裏剣使ってたし忍者なの？」

ｅｔｃ　ｅｔｃ……

……とりあえず個性は五感を強化するものだと教えた。

『増強系じゃないの!?!?』

とクラスメイトたちが驚愕の声を上げるが、回答を続ける。

「技は……故郷に伝わるものだ。葦名流と、仙峯寺拳法……仔細は、明かせぬ」

「葦名流に、仙峯寺拳法……武術にはそれなりに詳しいと思ったたけど、どっちも聞いたことないな」

太くしなやかな尻尾が生えた男子生徒、尾白猿夫（おじろましらお）が言う。体も鍛えられており、武に詳しいだけでなく精通しているだろうことも伺える。

「……明かせぬ」

「わ、わかってるって、無理に聞こうとしないさ。代わりに今度組手でもしないか？見たことない技だから気になるんだ、それくらいならいいだろ？」

「……いずれ、機会があるだろう」

やんわりと誘いを断り、未だに続く質問に適当に答え、時には明かさず、時間を潰していく。

戻ってきた緑谷と障子を交え――緑谷は戻ってきてすぐに駆け出し、また戻って来たが――訓練の反省会兼交流会は進む。

下校時間が迫ると教室にやって来た相澤先生に早く帰れと注意され、反省会はお開きとなった。

Ｎｏ．８　侵入者

戦闘訓練の翌日、校門にはカメラやマイクを携えたマスコミが群がっていた。彼は小柄な体格と持ち前の目立たなさ、忍びの技術を使って気配を殺し気づかれることなくマスコミの群れを抜ける。

オールマイトが雄英の教師になった影響だろうが朝から高校の前にいい歳した大人が群がり、登校の邪魔をする。こんな有様だからマスゴミと揶揄されるのだ。捕まった生徒はご愁傷様と言う他ない。

▼

そして朝のＨＲ、爆豪と緑谷は先日の戦闘訓練での行動にお小言を貰っていた。

「さて、ＨＲの本題だ。急で悪いが今日は君らに――」

クラスが少しざわつく。初日に行われた急な個性把握テストのように、急な臨時テストが行われるのではないかと考えているのだろう。

相澤先生ならやりかねない、クラス全員がそう理解している。

「学級委員長を決めてもらう」

「「学校っぽいの来たー!!!」」

とクラスの雰囲気が元に戻り、自分が学級委員長を務めたいと、みんなこぞって手を挙げる。手を挙げていないのは、轟と狼だけだ。

しかし、全員がやりたいと言い出しては決めようがない。選ぶとすれば、このような場を鎮め、進行できるような者が向いているのだろう。と彼は考える。

「静粛にしたまえ!!」

クラスに飯田の声が響く。多を牽引する重大な役割、〝やりたいから〟では務まらない。周囲からの信頼があってこそ務まる仕事なのだ。故に投票で決めるべきだと彼は主張する。

「手ェそびえ立ってんじゃねーか！何故発案した!!」
とクラスの誰かがツッコミを入れる。クラスを纏めるべく案を出しはしたが、彼も学級委員長を務めたいのだ、眼鏡をしているし。
先生から「時間内に決まればなんでもいいよ」との許可も降り、投票は行われた。
結果。緑谷に3票、物を創造する個性を持つ八百万（やおよろずもも）百に2票、轟と狼は0票、その他はみんな1票という結果になった。
「僕　3票ー!?!!」
と緑谷は驚いている。大方投票したのは仲の良い麗日と飯田、そして自分自身で合計3票だろう。
だが緑谷以上に衝撃を受けている者もいた。
「僕に1票入っているだとッ!?!!誰かはわからないが、感謝しなければ……!!」
飯田は自分でやりたがっていたのに他人に票を入れたのか、意外と言うよりはむしろ納得だ。自分の欲望ではなく、誰が相応しいかで選んだのだろう、どこまでも真面目な男である。
そして委員長は緑谷、副委員長は八百万に決まった。

▼

昼休み。
彼は昼食を摂らないことが多い。金銭の節約というのもあるが、別に1日2食で事足りるのだ。
普段会話をする緑谷たちは学食で昼食を摂るためいない、よって昼休みは暇な時間になる。
「あれ、狼くんどしたの、お弁当忘れた?」
宙に浮かぶ制服、葉隠だ。
「いや……昼食は食わぬことが多い」
「えぇー?ご飯はちゃんと食べなきゃダメだって！背え伸びないぞ！」
「……構わぬ」

「今ちょっと迷った！ほら～、食堂行こ！透ちゃんが何か奢ってしんぜようではないか」
「……借りは、作れぬ」
「すごい頑固！じゃあ、入試の時に助けてくれた借りを返す、ってことでどう？」
葉隠は折れそうにない。
これ以上彼女を拘束しては彼女が昼食を摂る時間がなくなってしまう。しかし、借りを作るためにやったわけではないのだ。行って、水でも飲んで大人しくしておこう。
「……わかった。行こう」
そう告げ、席を立とうとしたとき。
大きな音で警報が鳴り響いた。
《セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんはすみやかに屋外へ避難してください》
セキュリティが突破された……侵入者か？雄英のセキュリティは万全、しかも上位の実力を持つプロヒーローが多数在籍しているこの場所に侵入してくるなど愚の骨頂、心配はないだろうが警戒はしなければならない。
「え、えっ？なにこの放送!?」
葉隠を始め教室に残っていたクラスメイトが動揺するのが目に見える。逆にこの状況で落ち着ける1年生は少ないだろう。
状況把握に努めようと耳に手を当て、個性を聴覚に集中して発動させる。
――校舎内に誰か侵入してきたって――いてえ！――押すな押すな――オールマイトを出して――非番だっての！――まだか、黒――お待ちくだ――カリキュラムは――大丈ー夫！――
1番パニックになってるのは人が多く集まっていた食堂付近……外からはプレゼントマイクの声も聞こえた。侵入者はおそらくマスコミ。
しかし、同階から聞こえた声は一体……。声の元は職員室方向……

職員はマスコミ対応のために出払っている。盗人か？
　刀袋を手に取り、いつでも刀を抜けるように構えながら職員室方向へ駆ける。
「え、狼くん、どこ行くの!?」
「……なぜ、ついて来る。戻れ」
「だって！緊急事態っぽいし、ひとりで行動しちゃダメだよ！」
「……戻れ」
「狼くんも一緒にならね！」
「……」
　眉間に皺を寄せながらも足は緩めずに進む。
　職員室の扉は、少し開いていた。
　扉の隙間から中を覗く。
「チッ、まだ見つからねぇのかよ……」
「落ち着いてください、死柄木弔（しがらきとむら）。焦っては見つかるものも見つかりません」
　大量の手を体に身につけた、白髪の不気味な男――死柄木弔と呼ばれていた――と、黒いモヤのようなもので姿が不明瞭な者。明らかに、不審者だ。
「お、狼くん、あれって……」
　バレないように小声で葉隠が話しかけて来る。
　おそらく外のマスコミは陽動、本命はこちらだろうと伝える。
「先生に伝えに行け。俺は……監視を続ける」
「えっ、で、でも……」
「早く行け、どちらも留まっては意味がない」
「う……うん。絶対戦っちゃダメだからね」
　そういうと葉隠はゆっくりと走り去る。
　……さて、殺るか。何を盗もうとしているかは知らないが、明らかに敵（ヴィラン）だ。致命傷のひとつやふたつ、覚悟して来ているだろう。刀で殺さぬように背後から忍殺すればよいのだ。
　逃げられないよう手足の腱を切っておきたいが短刀がないので仕方ない。

刀を抜き、音を立てないようひっそりと職員室内に侵入する。
細心の注意を払い、気配を殺し、足音を殺し、殺意すら殺し、己が内に留め置く。
背後からの忍殺が可能な間合いに到達した。
機動力を奪ってから、意識を刈り取る。
背後から黒いモヤを纏った男の肩を掴み、膝裏に蹴りを入れ、床に膝をつかせる。ふくらはぎと思わしき場所に刀を突き刺すが、感触が硬すぎる、床に刺したか。即座にモヤの男の胴体部に蹴りを入れ距離を取る。
「なっ、ぐうっ…！」
「は？お前……いつ入ってきた」
モヤを纏った男は胴体部以外に実体がないのか……？ともあれ、しくじった。
「……」
「だんまりかよ、まぁいいや……見られたからには、死んでくれよな」
体に手を付けた男、死柄木弔が右手を構える。

危

掴まれれば、命を落とす。そう判断した狼は咄嗟に横に跳び、男の掴みを避ける。なかなかに、素早い動きだ。
「チッ、避けるなよ……。楽に死なせてやれねぇぞ。おい黒霧、手伝え」
「了解しました。悪いが、死んでもらいますよ」
黒いモヤの男が作り出した黒いモヤに、死柄木が腕を入れる。

危

またも感じる死の気配。前に避け、背後を斬りつける。
「いッ……てぇな。ヒーローが人を斬りやがって」
「お気をつけください死柄木弔。あの生徒、相当勘が鋭いようです」

狼の居た位置には小さな黒いモヤ、そこから死柄木の手が伸びている。黒霧と呼ばれる男の個性は空間転移か。

空間転移で強制的に背後を取り、即死級の手を当てる。確かに初見殺しだが、当たらなければ意味はない。

敵は2人、同時に相手取らねば隙を突かれる。

ならば、と狼は一瞬腰を沈めると回転しながら斬りつけ跳び、もう一度斬りつける。

旋風斬り。

回転しながら周囲を斬りつける、鋭い斬撃

多勢に囲まれたとて、この忍び技があれば切り抜けられる

範囲攻撃に適した技だ。

初撃は避けられたが、第二撃は当たった。

僅かな隙を見逃さず、刀を振るう。

一度斬られ、痛いが刀が斬れるものではないとわかったのか両手をクロスして防御してくる。

敵の危険攻撃を避け、斬りつけ、それ避けられ、防御されたりを繰り返す。幾度か攻防を繰り返し、敵の防御を崩すべく狼は刀を上段に構える。それを隙と捉えた死柄木は狼を掴もうと迫るが、それよりも速く刀が縦一文字に力強く振り下ろされる。

葦名流　一文字。

力強い踏み込みと共に、無骨に、正面から叩き斬る

ただそれだけに一意を専心した技

その専心ゆえに、葦名流は強い

「クソが…！」

一文字を肩に受けつつも、逆の手で反撃を試みる死柄木。

しかし、反撃が来るならば、もう一度叩き斬るのみ。

葦名流　一文字・二連

葦名の一文字は、二連で完全となるのだ

その二連目は完全に死柄木を捉え、狂いなく左腕に叩き込まれた。

少なくとも、骨にヒビは入っているだろう。

「死柄木弔！それ以上の負傷は支障をきたします。時間もありませ

ん、ここは撤退しましょう」
「クソ…！クソクソクソ!!こんなガキひとりに逃げ帰るだって…!?」
外から走る足音が複数聞こえて来る。教師（プロヒーロー）が直ぐにでも到着する。
「目的は達成しました、今は耐えるのです！」
「……ゲームオーバーかよ……チビガキ、この借りは必ず返してやる……」
黒霧が人が通れるほど大きなモヤを出現させる。
させてなるものか、と距離を詰めながら旋風斬りを放つ……が、空を斬る。
「逃げ足の速い……」

逃げられた直後、職員室の扉が勢いよく開かれる。
イレイザーヘッドとプレゼントマイクだ。
「無事か、薄井!!」
「……問題、ありませぬ」
「敵が侵入したってのは聞いた、何があったんだよ！」
「山田先生……監視を続けましたが、見つかり、やむなく戦闘を」
プレゼントマイク、本名は山田ひざし。
山田はらめぇ！と聞こえるが気にしない。
「それでこの惨状、って訳か……マイク、校長に報告してくる。他の教師にも通達して他の生徒にバレないよう後始末頼む」
「オーケー、任せなイレイザー」
職員室で刀を振り回せば、荒れる。
机は散らばり、椅子はひしゃげ、プリントは散乱していた。
「薄井、言いたいことは山ほどあるが、まずは後回しだ。とりあえず……よく生き残った。教室に戻ってろ、それと起きたことは生徒に話すな」
それだけ言うとスタスタと歩いて行ってしまう前に、一言謝罪をする。
「申し訳ありませぬ……」

「侵入されたのは俺たち教師側の責任だ、気にするな。それと謝罪は反省文で聞く」
慈悲はないようだ。
その後、教室に戻ると普通に授業は始まった。
そして放課後、ＨＲが終わると相澤先生に呼び出される。
反省文を書かねばならないようだし、敵のことも聞かれるのだろう。
「職員会議にお前も出席してもらう。遭遇した本人の口から聞く方が合理的だ」
「……承知しました」
そう来たか。
確かに、実際に戦闘した者の口から聞くのが１番だろうが、職員会議にまで呼ぶものか。

▼

「まずは我々教師一同、君に謝罪しなければならないのさ！誠に申し訳ない！」
会議が始まると開口一番に根津校長先生――スーツを着たネズミの姿をしている――から謝罪を伝えられた。
「敵に侵入されたのは我々教師陣の失態、君がいなければ他の生徒にも被害が及んでいたかもしれない。生徒を守るのは我々教師の義務！それを君にやらせてしまった、重ねて申し訳ない！そしてありがとう、こう言わなきゃならないのさ！」
「いえ……」
「では、本題に入ろう。薄井狼君、覚えている範囲でいいから敵の特徴や個性を教えてほしいのさ」
「はっ……」
敵の見た目や特徴、個性について説明する。
ひとりは白髪で、手首に体中を掴ませている男。名前を死柄木弔。

個性は不明だが、執拗に掴む攻撃を狙ってきた為、手で接触して初めて発動する個性だと思われること。
　もうひとりは全身に黒いモヤを纏ったような男。黒霧と呼ばれており、実体がある部位が限られている。個性は空間転移系の能力であり、それで撤退したことから侵入の手口も同じだと考えられること等を伝える。
「ワープなんて個性、ただでさえものすごく希少なのによりにもよって敵側にいるなんてね……」
「そうなると、いつ襲撃されてもおかしくはねえって事だな」
「セキュリティの強化、警備のヒーローの数も増やさなければならないね！」
　教師同士の話し合いが続く、やることは終わったため完全に暇になってしまった。帰ってはいけないのだろうか。
「……薄井、お前から見て敵はどうだった」
　相澤先生が質問する。
「どう、とは……」
「敵2名と交戦したんだろう」
「……さしたる脅威ではない。そう、判断します。速さに対応できるならば、2~3名の教員で、問題なく勝てるかと」
「とのことです。コイツは戦闘訓練で推薦入学者を圧倒した実績もありますし、当たらずとも見当違いなことは言わんでしょう」
　相澤先生の発言で、今後の対処は警備とセキュリティの強化、校外学習では教員の数を増やす、の2点にまとまった。
　ようやく会議から解放され、帰路に着く頃には陽はもう沈み切ろうとしていた。
「狼くんっ！」
「……葉隠か。まだ、帰っていなかったのか」
「その、大丈夫だった?狼くんひとり残して行っちゃったのが、ずっと気がかりで……」
　随分と落ち込んでいるように見える。あの場で、先生を呼びに行ったことを敵から逃げたように感じているのだろうか。だとすれば勘

違いも甚だしい。
「葉隠」
「ひゃいっ」
いつもより語気が強い狼の声に驚いたのか、少し変な声で返事が返ってくる。
「……よく、先生方を呼んでくれた。お前には……借りができた」
「そ、そうかな、へへへ……じゃあこの借りはちゃんと返してね！約束だぞう！」
「あぁ……善処する」
「それ返さないときの言い方じゃーん!!このこの～」
「やめろ……髪をいじるな……」
遅い時間とはいえ、まだ学校に人はちらほらいる。
狼は何故だか恨めしそうな視線を感じながら、葉隠透と駅までの道を歩いた。

Ｎｏ．９　襲撃

教師と一部の生徒しか知らない敵（ヴィラン）侵入事件から数日後のヒーロー基礎学の時間。

「今日のヒーロー基礎学だが……俺とオールマイト、そしてもうひとりの３人体制で見ることになった」

先日の事件を見越しての警戒態勢だろう。

上位の実力を持つヒーローふたりに、平和の象徴、実質最強とも言えるナンバーワンヒーローのオールマイトがいれば十分な警戒といえる。

何をやるのかという生徒の質問に先生は、人命救助（レスキュー）訓練だと答える。

大変そうだと言う者もいれば、それこそがヒーローの本分だと意気込む者もいるが、相澤先生の鶴の一声で静かになる。

活動を限定するコスチュームもあるだろう、とのことで着用は判断に任せるようだ。

「訓練場は少し離れた場所にあるからバスで行く。以上、準備開始」

戦闘訓練でコスチュームがボロボロになった緑谷以外は全員コスチュームを着用したようだ。もちろん狼も。

バスに乗る際にスムーズに座れるよう番号順に並ぼうと飯田が提案するが、対面で座るようなタイプだった為それは意味をなさなず、はじめての委員長らしい仕事は失敗に終わってしまった。

バスの中では軽い雑談が行われている。

相澤先生は注意するものかと思ったが多少は見逃してくれるようだ。

緑谷の個性がオールマイトに似ているという話から始まり、個性がプロで通用するかなど、如何にもヒーロー科らしい会話だと言える。

「派手で強えっつったらやっぱ轟と爆豪だな。薄井は強いけど地味だし」

「爆豪ちゃんはキレてばっかりだから人気でなさそ」

「ンだとコラ！出すわ!!」

「ホラ」
　爆豪ですらイジる対象にされるとは、さすが狭き雄英の門をくぐり抜けた猛者達、といったところか。
　クソを下水で煮込んだような性格とすら言ってのける者もそうだが、まだ短期間の付き合いでそう言われる爆豪も相当だ。
「薄井はなー、もうちょい愛想良くしたら人気出そうじゃね？無愛想な顔してるし」
「確かに、ギャップってやつ？試しに薄井笑ってみてよ！にーって」
「……」
「１ミリも表情筋が動かないわね」
「薄井くんも努力はしてるんじゃないかな……ほら、ちょっとだけ顔強張ってるし」
　彼だって努力はしたのだ。しかし普段だって殆ど動かない表情筋を急に無理やり動かせというのも無理がある。
　そして騒ぎすぎたのか相澤先生から注意された。
「もう着くぞ。いい加減にしとけよ」
「「ハイッ!!」」

▼

「あらゆる事故や災害を想定し、僕が作った演習場です。その名もＵＳＪ（ウソの災害や事故ルーム）！」
　と、宇宙服のようなコスチュームを見に纏ったヒーロー。スペースヒーロー「１３号」が説明する。大丈夫なのか、コンプライアンス。
　緑谷の説明によると主に災害救助で活躍している紳士的なヒーローなのだとか。そして個性は「ブラックホール」という何でも吸い込み塵にしてしまえる強個性。
　オールマイトが見当たらないが授業は始まるようだ。
「えー、始まる前にお小言を一つ二つ、三つ……四つ……」
　個性は人を救うこともできれば、容易に人を殺めることもできる力であることを忘れてはいけない。個性把握テストで自身の可能性を

知り、対人訓練で人に向ける危うさを知ったのならば、次は助けるためにどう使うのかを知る必要がある。
個性は人を傷つける為ではなく、人を助ける為にあるのだと心得て帰って欲しい。
内容を要約するとこうだった。人命救助を主に活動している彼女だからこそ重みのある言葉だろう。
「以上！ご静聴ありがとうございました」
そう言いペコリと一礼する13号。
その言葉に感銘を受けた生徒たちは拍手を送る。
「む……」
突然感じた違和感。
それは、黒いモヤとなり広場に現れる。
相澤先生も気づいたようだ。
「ひと塊になって動くな!!13号！生徒を守れ!!」
生徒たちはまだ、その空気に、悪意に気づかない。
かつて記憶の中で、嫌でも慣れ親しんだ……戦(いくさ)の空気。
「動くな！あれは――敵(ヴィラン)だ!!」
さるお方と交わした言の葉を、思い出す。
――戦では、関わる者の願いやら企てやらが渦を巻きおる。迷えば、その渦に飲まれ……――
――戦に、敗れる――
――カカカッ、そうじゃ。肝に銘じて、おくがいい。隻狼よ。

――迷えば、敗れるぞ――

「迷えば、敗れる……」
気付けば無意識に抜刀していた。
相澤先生は既に大勢の敵の中に飛び込み戦闘を開始している。
多対一こそ得意分野だったと緑谷が分析しているが、個性の性質上それはありえないだろう。卓越した技量を待つため多対一もできる、というだけ。

生徒は13号と共に避難を始めるが、黒霧――先日潜入してきた、空間転移の個性を持つ敵――が前に立ち塞がる。
相澤先生（イレイザーヘッド）の個性は目視する事で発動する。一瞬、まばたきの隙に移動してきたか。
「初めまして……ではない者もひとりいますね。我々は敵（ヴィラン）連合。僭越ながらこの度、雄英高校に入らせて頂いたのは平和の象徴、オールマイトに息絶えて頂きたいと思ってのことでして」
爆豪と切島が前に飛び出し、黒霧を攻撃する。
しかし、本体部ではなく周囲のモヤに当たったのかダメージはないようだ。
「ダメだ！どきなさい、ふたりとも！」
13号の射線上に、ふたりが入ってしまっている。
正義感からの行動だが、あだとなってしまった。
「危ない危ない……生徒とはいえど金の卵。散らして、嬲り殺す」
黒霧の個性が、生徒たちを覆うように広がる。
逃れる事も可能だ。しかし……何故か、隣にいた葉隠を中央へ押しだすように体が動いた。覆うように使うのなら、中央にいるほど安全な筈だ。
何故体が動いた、一度交戦した自分ならば、一対一ならあのヴィランは難なく仕留められる、だのに何故……葉隠は戦闘能力が低いから、だろうか。
「えっ、狼く――」

▼

視界が黒いモヤに包まれ、景色が一瞬で変わった。
はらわたが浮くような、落下の感覚。目の前には、水面。
そのまま水中へと落下する。水難エリアか。
「来た来た来た！恨みはないけど、死んでくれや！」
敵連合と名乗る集団が連れてきたであろう敵が水中に待機していた。

サメのように鋭利な歯を覗かせ、こちらに突進してくる。
水中では動けないとでも思っているのだろうか、間抜けである。
狼は水中をひらりと舞うように横へ避け、横から脇腹を刀で突く。
致命傷を避けるように突いたが、痛みで動けはしないだろう。
少し離れた位置には他にも敵がいるが、ほとんどが水面に顔を出しておりこちらに注目していない。
水生(みぶ)の呼吸術、水生の息とも呼ばれる水中で呼吸する秘術、それに合わせて忍びの体術により水中を難なく移動することのできる狼を水難エリアに転移させたのは愚策であった。
しかし、普通の人間は水中で呼吸はできないし、動きは大きく制限される。彼が特殊なだけなのだ。
このエリアには船が浮いている、他に転送されたのならあの上にいるはず……
動きを悟られぬよう、敵から離れ水面に顔を出す。
船の上には緑谷、そして……カエルの個性の蛙吹(あすい)と、くっ付くブドウを頭に生やす個性の峰田(みねた)だったか。
3人で作戦会議でもしているのだろうか、今のうちに数を削っておこう。
再び潜水し、水中の敵の背後に近づく。
ひとり、またひとりと、背後から口を塞いで短刀で腹部を突き刺す。
3人行動不能にし、水面に顔を出している敵をひとり処理し、流石にバレた。
素早く腰につけた鉤縄を船の柵に飛ばし、船上へ上がる。
「う、薄井くん!?」
「うわあぁぁぁぁぁ!!!?びぃ、びびびビビらすんじゃねえよ薄井!!?居たなら言えよこのヤロオ!!!?」
「薄井ちゃん、いつの間に来ていたのかしら。気づかなかったわ」
「……4人削ったが、バレた」
驚く緑谷と悲鳴をあげる峰田、冷静な蛙吹。三者三様の反応を見せるが無視して結果だけを伝える。
「知らない間にそんなに……やっぱり薄井くんはすごい……」

「ケロ、人数を減らせたのはいいことだけど、まだ大勢いるわ」
「うわあああ！もうオイラはダメなんだ、ここで死ぬんだあああ!!」
人数が減った報告に少し希望を見出したような顔をした峰田だが、蛙吹が告げる残酷な現実に打ちのめされ、錯乱したのか頭に生えている個性を船の外に大量に投げる。
「……」
「そんな顔で見るなよ薄井ィ!!ついこの間まで中学生だったんだぞ!?入学してすぐ殺されそうになって怖くない方がおかしいだろーがよ!!!」
泣きながら猛抗議する峰田。しかし泣いても現状を打破することはできない。何か考えるべきだ。
「……勝つには、これしかない……!!」
小さく震えながらも、語気は強い。策を思いつき、腹を括ったようだ。
「……策が、あるのだろう。緑谷」
「うん、上手くいくかはわからないけど。これしかない、と思う」
「聞かせてちょうだい、緑谷ちゃん」
緑谷の策はこうだ。
まず緑谷が敵の注意を引き、船の外に跳びながら水面にＳＭＡＳＨ。
それに合わせて蛙吹が峰田を抱えて跳び、峰田は個性を水面に大量に投げ入れる。
水面に衝撃を与えたら広がって中心に収束するのを利用し、峰田の個性で敵をくっ付け、一網打尽にする。
討ち漏らしがいたら、狼が処理をする。
というものだった。
「もし敵を全員拘束出来なかったら、薄井くんに相当負担をかけてしまうけど……頼めるかな」
「あぁ……任された」
そして、博打のような作戦は上手くいった。
水中に待機させていた伏兵も狼が処理していたため、奇襲される心

配もない。緑谷がまた左の中指と親指を骨折したが、被害はそれだけだ。

緑谷はブツブツと超早口で作戦の反省点を洗い出しているが、今することではない。

「緑谷」

「緑谷ちゃんやめて、それ怖いわ」

「ご、ごめん……！」

「お、おい……次はどうすんだよ、オイラもう戦いたくないぜ……」

「そうだね……とりあえず、助けを呼ぶのが最優先だよ」

「……水辺に沿って、広場を避け、出口に向かうぞ」

「うん、それが最善だ」

周囲の安全を確認し、水際に隠れつつ広場の様子を伺う。

広場では未だに相澤先生が大勢の敵を引きつけ、戦闘を続けている。少し疲労の色も伺える。緑谷も様子が気になるようだ。

「先生はもちろん制圧するつもりだろうけど……やっぱり、僕らを守る為に無理を通して飛び込んだんだと思うんだ」

「え……？まさか緑谷、バカバカバカ……お前」

「ケロ……」

「邪魔になるようなことは考えてないよ。ただ、隙を見て、少しでも先生の負担を減らせればって……」

「緑谷……」

少し語気を強め、やめろという意を込め名前を呼ぶ。

「やっ、そういうわけじゃ……ただ、先生の負担を少しでも」

「他に為すべきことを、為せ」

それだけ告げると狼は水辺に沿って進み出した。

「あ、おい待てって薄井！」

峰田は薄井について行くが、緑谷と蛙吹の2人は動けないままでいた。逃げるのが最善と頭で分かってはいるが、先生を助けるべきだという正義感との葛藤があるのだろう。

水辺を少し進んだところで、違和感を感じる。

戦闘音が止んだ……？広場に視線をやると狼は即座に水辺から這い上がり、気配を殺しつつ、駆ける。
広場では、脳味噌が剥き出しになった黒い肌の怪物……それが、相澤先生を床に拘束し、両腕をへし折っていた。
その側には、死柄木弔。奴の護衛があの怪物か。
怪物が先生の頭を無慈悲に地面へと叩きつける。
あのままでは……アイツを殺さなければ、先生が殺されるだろう。
広場の街灯へ鉤縄を飛ばし、高く跳び上がる。
迷えば、敗れる……ならば――――
黒い怪物に見える、赤く光る印。それに目掛け
――――迷いは――――
逆手に構えた刀を、肩から心臓にかけて突き立て、貫いた。
殺すならば、せめて苦しまぬよう、一撃で殺す。
それが忍殺であり、ある種の慈悲でもある。
刀を握ったまま、背を越えるように前へ回り込み、背負い投げるように刀を抜く。怪人は、力なく後方へ倒れる。
「薄井、お前……ッ！」
「あーあーあー……せっかくの脳無が台無しじゃねえか。お前ホントにヒーロー志望かよ、こうも躊躇なく殺せるか？普通」
何も言わぬまま、刀の切先を死柄木に向け、顔の横あたりに構える。
「だんまりかい、まぁいいや。先日の件といいお前いい加減鬱陶しいんだよ。だから……今度こそ、死んでくれ」
死柄木に斬撃を浴びようと一歩踏み出すが、死柄木は両手をポケットに突っ込んだままだ、回避の素振りすら見せない。

危

「やれ、脳無」
後ろを振り返りつつ回避を試みるが、一手遅かった。
突如万力で腕を潰されたかのような激痛が左腕に走る、その数瞬後には普通感じることのない遠心力を体に感じ。背面に衝撃が走る。

それを最後に視界は暗転した。

Ｎｏ．９．５　束の間の休息

ぼんやりとだが視界が明るくなっていく……

気絶、していたようだ。戦場で気絶して、まだ生きているとは運がいい。

まだ視界は定まらない、頭痛、吐き気、腹部には激しい痛み、左前腕部に関しては感覚がほぼない、呼吸をするだけで激痛が走る、体に力は入らない。

痛みを噛み殺し、体に鞭を打ち、起き上がる。刀は、ない。

周囲を見渡す。狭く白い個室、僅かに振動を感じる。救急車の中だろうか。肌がヒリつくような戦の空気は、もうない。

見通しが甘かった、あの怪物――脳無とか言っていたか――不死の類の個性なのか……？確かに、心の臓を貫いた筈だ。それで死なぬのならば……。

「……迷え、ば、敗、れる……」

あの時、自分はどうだった。迷いは……本当に、なかったのだろうか。本当に、迷わず刃を突き立てていたのだろうか。

精神が中途半端では、刀は鈍る。揺るがぬ意思がなければ、迷う。

そして、敗れる。己は、どうだったのだ……

「ち、ちょっと君！起き上がらないで横になってて！すごい重症なんだから!!」

救急隊員と思われる人物にそう言われる。戦いが終わっているのに無理する必要はない、大人しく従っておく。

目を瞑り、脳無の速さを思い返す。次、相対したならば、必ず……

そして今一度意識を手放した。

▼

――久しいな、御子よ。叔父上の墓前以来か――

すすき野原の中央に一人の男がいた。

仕立ての良い甲冑に身を包み、その背には葦名氏の家紋を背負っている。鋭い眼光と、凛とした佇まい。
知っている。この男を、俺は知っている。

――弦一郎殿……――

自分の後方から、そう名前を呼ぶ声が聞こえた。
そうだ、俺は……御子様と共に、葦名を脱さねばならぬ。それが我が主の望みなれば。

――私は……――

歩を進め訴えかけようとする主を左手で制し、腰の刀に手を添える。

――…済まぬ――

――お任せを――

鯉口を切り、抜刀する。
相対する弦一郎も、同じく刀を抜く。

――邪魔立てするか、御子の忍よ――
「葦名弦一郎、参る」
互いに前へ走り出す。
刀を振るい、あるいはそれを弾く。
幾度目かの剣戟を弾いた刹那、狼が大きくよろめく。弾き損ねたのだ。
体が思うように動かない、相手の動きが読めない。幾度となく戦ったはずの相手だが、弦一郎（弦ちゃん）と初めて戦った時のように動きがおぼつかない。まるで、他人の初見プレイを見ているときのような……

眼前に迫る刃を避けきれず左腕に鋭い痛みが走る。堪らず腕を押さえ、地面に膝をつき、倒れ込む。
「忍とて、この程度か。御子は、もらっていくぞ」
その声を最後に、意識は途切れた。

▼

再び目を覚ますと、規則的な機械音が聞こえる。白い天井に、カーテン……病室にいるようだ。痛みはあるが、処置は施されたようでだいぶ楽になっている。だが左前腕の感覚は、やはり無い。
そして、あの夢は一体……個性が発現したときに狼の記憶を得たが、それはあくまで記録のようなものだ。あそこまでの現実感はなかった。個性が関係しているのだろうか。
そのことについて考えていると、見回りに来た看護婦が彼が起きている事に気づき、ナースコールが押される。
その後は後遺症がないかなどの検査が行われた。
医者に説明された症状は、腹部に強い衝撃を受けた事による内臓損傷、肋骨の骨折、それが肺に刺さり外傷性の気胸。
特に内臓の損傷が酷く、生きていたのが不思議だと言われた。
体力の回復も早く、大まかな傷は雄英の保健教諭、治癒力を活性化させる個性をもつリカバリーガールが治してくれたそうだ。
だがしかし、左腕は脳無に握られた際に潰され、骨まで粉々、肉と骨がぐちゃぐちゃに混ざり合っていた腕の残骸がＵＳＪ内で見つかったそうだ。放り投げられたときに千切れたのだろう。
……不謹慎だが、これで晴れて隻狼となったわけか。
狼はやはり、片腕を失う運命にあるらしい。
今のうちに義手の要望でもまとめておこうか？

▼

翌日、昼過ぎに病室に相澤先生のみならず、根津校長先生とオール

マイトまでやってきた。
「こんにちは、薄井少年。私がお見舞いに来た！何が好きとかわからないから無難に果物持ってきたけど……」
「やぁ薄井くん、校長さ！」
「おはよう薄井。だいぶ回復してるようでなによりだ」
病院だからか声を抑え気味に話すオールマイトとその肩にのる根津校長先生。指で摘んで胸の前に持ち上げている果物が入ったバケットは彼の巨躯になんとも似合わない。
相澤先生は包帯でぐるぐる巻きにされており、まるで妖のような風貌になってしまっている。
「相澤先生……根津校長……それに、オールマイト……」
3人が揃って、狼に向かい深く頭を下げた。
「誠に申し訳ない。僕たちは君に取り返しのつかない怪我を負わせてしまったのさ。」
「いえ……全て、私の実力不足が招いた失態……。自業自得でございますれば」
「それは違う、違うぞ薄井少年。本来なら私は最初からあの場にいるはずだったんだ。私がいれば、後輩が怪我をすることも、生徒たちに怖い思いをさせることも、君が怪我を負うこともなかった……！」
「そもそも、お前から事前に敵（ヴィラン）の侵入があったと聞いていたんだ、もっと警備を強化すべきだった。俺たちの慢心が招いた結果だよ。そのせいで、結果的に生きていたとはいえ……お前に敵を殺させてしまった」
「……私が、独断で行ったことです」
「それでも、前途ある若者の片腕を奪わせてしまった。その事実は変わらないのさ。お詫びというわけではないけれど、入院費や治療費、義手の製作費などその他諸々の補償はきちんとさせてもらうのさ！」
自分にも非がある分素直に受け取り難い、しかし金銭的な余裕が少ないのは事実……背に腹はかえられぬか。
「……ありがたく、頂戴、致します……」
3人とも頭を上げる。

大人3人に頭を下げらっぱなしでいるのは、どことなく気まずい。
「でだ、聞いとかなきゃならんことがある」
「……なんでしょうか」
「まずひとつ、ヒーローを続ける気はあるか」
相澤先生がそう聞いた。
入学してすぐに敵（ヴィラン）に襲われ、あまつさえ片腕を失ったのだ。普通なら、心折れても仕方のないことである。
「……許されるのならば、そう考えております」
「そうか、それを聞いて安心したよ。じゃあふたつ目」
相澤先生が視線を鋭くして問うてくる。
個性を発動している時のような、赤く光る鋭い視線。葦名で相対した強者にも通ずるのではないかと思うほどの気迫。無意識に警戒し、拳を強張らせていた。

「どんな義手が欲しい」

……そんな面持ちで聞くか、普通。殺したことについて問い詰められるかと思ったではないか、もはや毎度のことだが生徒をからかって反応を楽しんでいる節がある。
「作るんなら早い方がいい、なぜなら……雄英体育祭が迫っている」
雄英体育祭。体育祭といいつつもその規模はもはやオリンピック並み。個性の出現と共に公平性が失われ廃れていったスポーツ競技文化に取って変わり、今では生中継で全国放送されるほどの日本の一大イベントとなっている。
もちろんその様子はプロヒーローも観戦しており、成績によっては有名ヒーローからスカウトを受けることもある。
「本来なら出るべきじゃないが……直接将来につながる3回しかないチャンスだ、逃すのは合理的じゃない」
「出るにしても、絶対無理はしちゃダメだぞ、薄井少年」
「……はい、考えておきます」
義手については後日、雄英と提携しているサポートアイテム製作会

社を呼んで採寸、直接要望を聞いて製作に取り掛かってくれるようだ。

それまでに要望をまとめておくのがお前の宿題だ、と相澤先生から伝えられた。

「それじゃあ、後もつかえてることだし、私たちはこのへんで。お大事に！薄井少年」

オールマイトがそういうと、先生方は病室から退室する。

後がつかえているとは、一体……

「薄井くん！」

「薄井くん、もう起きてて大丈夫なの!?」

「無事か薄井君！大怪我をしたと相澤先生から聞いたぞ！」

「元気そうで安心したわ、薄井ちゃん」

「薄井ィ！お前、お前なぁ！急に飛び出して死んじまったかと思ったじゃねぇかよお前なぁ！」

「狼くん……無事でよかったあ～！」

病室にクラスメイトがやってきた。

普段から交流のある緑谷、麗日、飯田。ＵＳＪで戦場を共にした蛙吹と峰田。同じく交流のある葉隠。

「……すまぬ。心配をかけた」

「狼……くん、その、左手……」

「……元に戻る状態では、なかったそうだ」

「そんな……！刀を扱うというのに隻腕では……」

飯田の言葉に病室内が一気に暗い雰囲気になる。当の本人は全く気にしていないのだが周りはそうはいかないようだ

「ケロ……でも、義足でもヒーローをやってる人もいるわ」

「そ、そうだよ。エクトプラズム先生は両足を失ったけど、それでも義足でヒーローに復帰した不屈のヒーロー。前例はいるし、ヒーローをやるのは不可能じゃない。それに薄井くんは器用だし義手に様々な機能を取り入れることでむしろ前より多彩な動きができるようになったり、ヒーローとしての強みが――」

「デクくん、長い長い」

緑谷は相変わらずのようだ、むしろ気を使わせてしまっているのだろうか。
「……何はともあれ、本当に、生きててくれて嬉しいよ！狼くん」
「……あぁ」

「おい緑谷、なんであのふたりいい感じの雰囲気なんだよ。なんでモテてんだよ、同じチビなのになんでオイラはモテないんだよぉ！」
と小声で峰田が血涙を流しながら緑谷に訴える。
「入試の時に助けた、って聞いたけど」
「落ち着きたまえ峰田君！友人の恋路は応援するものだぞ！」
「高身長イケメンに何が分かりやがる!!」
「僻みが酷い……」
「病室で騒いじゃダメよ、みんな」
「ち、ちょっとみんな!?そんなんじゃないってば、狼くんとは、その、友達！友達だから！ねっ!?」
いつにも増して言葉の勢いと圧が凄い。
「これはこれは……ちょっと女子のグループチャットで拡散しなきゃ」
「応援するわよ、透ちゃん」
「だ・か・ら！ちがーうって言ってるでしょー!!」
この間、男子組は終始気まずそうに苦笑いしており、峰田は狼を敵認定した。同じチビでも、モテるなら敵なのである。
この後、引率のため外で待機していた相澤先生にめちゃくちゃ怒られたのは言うまでもない。

Ｎｏ．１０　忍びの牙

狼が退院できたのはＵＳＪ襲撃から5日後。うち3日間ほど眠りこけていたので体感では2日ほどの入院生活、病院食は不味いイメージがあったがなかなかどうして、旨い。悪い入院生活ではなかった。

そして久しぶりの登校日、片腕での身支度に少し手間取ったが遅刻するほど手間取ることもなく無事通学することができた。

片手を失くして登校してきた彼にクラスメイトは大層心配したが普段と変わらなすぎるその振る舞いに、その心配は霧散した。

問題があるとすれば左手で紙を抑えることができず筆記しにくい、程度だろうか。

「薄井、今日の放課後サポートアイテム会社の方が来てくださる、放課後にサポート科1階の工房な。パワーローダーさんもいるはずだから、詳しい話はそっちで聞いて」

「承知しました」

帰り際のＨＲでまだ包帯でぐるぐるに巻かれている相澤先生からそう伝えられた。なるべく早く作る、とは言っていたが2～3日で話が進むとは思わなかった。流石は雄英といったところか。

「んじゃ気をつけて帰るように。さよーなら」

「「さようなら！」」

緑谷たちと共に教室を後にする。心なしか他の生徒の帰り足が速い気がする。雄英体育祭まであと1週間と少し、少しでも長く自主鍛錬の時間を作りたいのだろう。

「薄井くん。サポート会社って、もしかして義手の話？」

「あぁ……体育祭に間に合うようにと」

「出れるのか！体育祭！」

「そのつもりだ」

「うへえ、ライバルが増えてまう……」

「……すまぬ」

「あっ、そ、そんなつもりで言ったんじゃないからね!?」

普段と同じように、緑谷と飯田と麗日の3人と共に歩き、校舎を降

る。
　思えば友人らしい友人など緑谷以外には初めてか、級友と肩を並べて歩くなど、想像もしていなかった。
「どんな義手にするとかもう考えてるの？よければ聞かせてよ」
「あぁ……紙にまとめてある」
　手に持つクリアファイルを緑谷に手渡す。中には入院中に書いた要望とデザインをまとめた用紙が挟んでである。記憶を頼りに、忍びの器用さを全力で用いて描いた義手。人間のそれを模した偽骨に、鉤縄を仕込んだものがベースだ。また新たに欲しい忍具も他の用紙にまとめてある。
　緑谷（ヒーローオタク）の目に、忍義手はどう映るのだろうか。
「なるほど、今ある装備を義手の機能として取り入れるのか。機能は移動にも使える鉤縄をベースに他のサポートアイテムを取り外しできるようにして柔軟な対応ができるように設計されているし今までよりスムーズにアイテムを使えるようになりそうだぞ。他に纏められてるアイテムも薄井くんの弱点を補うようなものから強みをさらに伸ばせるものまで……流石だよ薄井くん！たった数日でここまで考えられるなんて」
「絵うまっ!!爆豪くんに隠れてるけど薄井くんももしかして才能マン……？」
「ふたりとも！もう一階に着いてしまっているぞ、あまり薄井君を待たせてしまってはいけない」
　いつもなら駅までこの調子でヒーロー雑談や他愛もない話が続く。だが、今日は1階までで終わりだ。
「あっホントだ、ごめん薄井くん。また明日！」
「また明日～！」
「また明日会おう！」
　手を振り返し、3人と別れる。
　さて、1階のサポート科の工房……ここか。
　他の部屋とは雰囲気が違う頑丈そうな鉄の扉。ドア枠付近にはＤｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ　Ｓｔｕｄｉｏ――開発工房と札に書いてあ

るし、間違いないだろう。
　3回ほどノックし扉を開ける。
「失礼します……」
「ん、君が薄井君か。入りな、話はイレイザーヘッドから聞いてる」
　ショベルカーのショベルに恐竜を組み合わせたような装甲を頭部に装着した男性が声をかけてくる。狼と同じで、随分小柄だ。
「フンッ……災難じゃったな、若いの」
　もう一人、柿色の作業着を着た年寄りの男が声をかけてくる。
　サポートアイテム会社の人間だろう。どことなく、記憶の中の恩人に似ている気がする。
「いえ……我が身の不徳の致すところ……」
「ハッ、生意気なガキじゃ。……まぁいい、要望を見せな」
　クリアファイルごと要望をまとめた用紙を渡す。
　男は受け取るとパソコンを取り出してなにか作業を始めた。
「すまんね。提携先に勤めてる俺の知り合いなんだ、偏屈なヤツだけど腕は確かだよ。じゃあサイズとか計測するから上脱いどいて」
　その後、腕の大きさなどを測ってもらい、柿色の作業着を着た男と義手の要望について細かく話し合い、今日の作業は終わった。
「こっから先は儂らの仕事じゃ、大人しく待ってな。それからお前さん……子供があんまり無茶をするもんじゃない。大人の面子ってもんを、少しは考えてやんな」
「……あぁ」
　男はそう告げると振り返りもせずに工房を去っていった。
「大急ぎで作るとは言ってたけど、正直体育祭に間に合うかは五分五分。さらに間に合ったとしても義手に慣れるまでの時間があるかもわからないよ」
「……承知のうえです」
「過度に期待せず待ってな。早さを重視してクオリティの低いものを寄越されても逆に足を引っ張ることになるからね。作るのは手だけど足を引っ張るってな、くけけけ！」
「……」

▼

そして、雄英体育祭前日。

狼として生を受けてから十数年。彼はついに、隻狼（せきろう）として新たな牙を生やそうとしている。

狼は忍びの掟を守るため、御子様を救い出すために、義手を己の牙として研ぎ澄ました。ならば……俺は、何のために牙を得たのだろうか。

「動作に異常はないか？」

左腕につけられた義手に目をやる。

前腕の断面を覆うように装着された土台、その上には人間の尺骨を模した偽骨、その先には球体関節の手。偽骨の横には使っていたものよりも小型化された鉤縄が装着されているが、今は取り外している。色は金属の鈍色を基調とし、黒色と黒茶色がアクセントカラーに使われており、全体的にツヤ消し加工がされている為、義手に光沢はない。

本来の忍義手よりも金属感が強く、無骨さは少なくなったが無機質さを感じさせる。

義手を握り込み、再び開く。手首を回し、指を一本ずつ折り、また一本ずつ伸ばす。

問題なく動く。流石は現代の科学力。しかし戦国時代にこれとほぼ変わらないものがあったことの方が驚きだ。しかし思い返せばエレベーターもあったのだ、葦名には何があっても不思議ではないということか。

「問題、ありませぬ」

「それはなにより、動かし方も大丈夫そうだな。サポートアイテムを取り外してれば、普段からソイツをつけてても法律には触れないから安心しな」

「……はい。ありがとう、ございます」

義手の取扱説明書を鞄に仕舞い、礼を伝え、工房を後にする。

外はまだ明るく、帰ってからでも義手を使って体を動かすことはで

きそうだ。

▼

雄英体育祭、本番当日。

1―A控え室。

初めての体育祭、しかも全国放送でプロヒーローまで見に来るとあり緊張している者も多いようだ。

服装は全員雄英の体操着。公平を期す為にコスチュームは着用禁止、ヒーロー科はサポートアイテムの使用は原則禁止となっている。

つまり此度は鉤縄も刀も使えない為、戦闘に若干の不安がある。

「おぉ、義手かっこいいね！狼くん」

「……あぁ」

「皆！準備はできてるか!?もうじき入場だ!!」

飯田がクラス委員長としてそう告げる。毎回こうしてチャイムより早いチャイムになってくれる飯田が近くにいれば1―Aは時間に遅れることはなさそうだ。

「緑谷」

「轟くん……何？」

「客観的に見ても、実力は俺の方が上だと思う」

急に誰が見ても当たり前であろうことを述べる轟。

緑谷の腕が10本ほどあれば話は変わるが、現状轟の方が強いと断言できるだろう。

「おまえ、オールマイトに目ぇかけられてるよな。別にそこを詮索するつもりはねえが……お前には勝つぞ」

クラスでも屈指の強者が宣戦布告、自然と周りの注目を集めている。

「薄井、お前にもだ。戦闘訓練での借りはここで返す」

開幕直前にケンカ腰の轟を不安に思ったのか、切島が止めに入るが、仲良しごっこをしに来てるわけではないと、一蹴されてしまう。

「轟くんが、何を思って僕にそう言ってるのかは、わかんないし、そ

りゃ僕の実力なんて大半の人に敵わないと思う……」

でも、と緑谷は続ける。時折見せる、腹を括ったとき、本気の顔だ。

「皆、他の科の人も、本気でトップを狙ってる……僕だって、遅れをとるわけにはいかないんだ。だから……僕も本気で、獲りに行く!!」

ふたりのやりとりに、クラス全員の士気が高まったようだ。

皆が真剣な面持ちで入場ゲートへと足を運ぶ。

雄英体育祭……年に一度の、大チャンス。

誰もが自分の願い、想いを胸に戦いの舞台へと進んでいく。

これもまた、戦(いくさ)なのだ。

Ｎｏ．１１　第１種目、障害物競走

雄英高校体育祭。

年に一度行われる、国内屈指の大人気イベント。

かつて人々はスポーツの観戦に熱狂したが、今はこの体育祭に取って代わられている。

例年１番人気なのは、実力も知識も揃った３年生ステージ。

プロと遜色ない実力の猛者達の戦い、二転三転する戦況、見ていて最も参考になるステージでもあるだろう。

なぜ学年毎に開催日を分けなかったのだと文句を言いたくもなる。

だが、今年は１年生にも大きな注目が集まっていた。

１年Ａ組――敵（ヴィラン）の襲撃を受けるも、それを見事乗り切った期待の新星。

経験を積み実力を高めている２～３年生ならまだしも、入学したての訓練も受けていない子供が乗り切ったとあれば話題性には事欠かないだろう。

プレゼントマイクの実況に合わせ、観客席の歓声を身に受けながら入場ゲートを潜る。

それに続いて同じくヒーロー科Ｂ組、普通科Ｃ・Ｄ・Ｅ組、サポート科、経営科と会場へ入場していく。

今年の１年生の主審は１８禁ヒーロー「ミッドナイト」、痴女のような格好をしているが実力は本物のヒーロー、らしい。

１８禁なのに高校にいていいものなのか、との声が聞こえたが静かにしなさいと一喝されている。

「選手代表！１―Ａ、爆豪勝己!!」

ミッドナイトがそう宣言する。クソを下水で煮込んだような性格と揶揄される彼だが入試を１位で通過する実力を持つ、選手代表としては妥当だ。

「せんせー」

選手宣誓。爆豪なら宣誓ではなく宣戦布告しそうなものだが、はたして……

「俺が一位になる。せめて跳ねの良い踏み台になってくれ」
と、更に親指で首を切るジェスチャーで他の生徒を煽っていく。
生徒からは大ブーイング、同じ1—Aのクラスメイトは大体が「コイツならやりかねないけど本当にやったよコイツ」と唖然とした顔をしていた。
そしてはじまる第一種目——本戦に上がる為の予選だ——の説明が始まる。今年の種目は「障害物競走」のようだ。
計11クラスの総当たりレース、コースはスタジアムの外周約4km、コースを守りさえすれば何をしてもいいとのことだ。
つまり自分以外の走者も障害物。妨害に協力何でもござれ、何をしても勝者が正義、敗者は惨めに地に伏していろ……と言うことか。
「さぁ位置に着きまくりなさい！」
と言ってもスタート地点のゲートが人数に対して狭すぎる。
狼の体格では押し潰されかねない、後方で構えることにした。
「スタートーー!!!」
生徒が一斉に走り出す。狼は助走をつけて跳び上がる。
「イテッ！」
「テメ、ヒーロー科!?」
「ヒーロー科が人踏みつけて恥ずかしくねぇのか！」
コースを守れば何をしてもよい、説明を聞いていなかったのだろうか。
道が塞がれるのなら、その上、空を行けばよい。
地に足着けぬ忍びの動き、前方では轟が妨害として足元を凍結させ大勢の生徒を動けなくしていたが、生徒の頭上を跳ねる狼には何の関係もない。
《さぁいきなり障害物だ！まずは手始め！第一関門、ロボ・インフェルノ!!》
プレゼントマイクがそう実況する。実況はプレゼントマイク、解説はプレゼントマイクに連れてこられた相澤先生が行うようだ。
入試の仮想敵（ヴィラン）、比較的小型の1ポイントから超巨大、お邪魔虫と説明された0ポイントまで、所狭しと大量に配置されている。

入試では破壊や拘束が目的だったが、今回はあくまでも障害物、戦闘行為は愚策だろう。

轟が凍らせた巨大な0ポイント敵が倒れてくるが、その前に走り抜ける。

小型の1ポイント敵が進路を邪魔するが、前方に跳び上がり、踏みつけ、それを勢いに変え再び前方へと跳ぶ。

第一関門を抜ける頃にまたプレゼントマイクの実況が聞こえた。

《第一関門チョロイってよ!!なら第二関門はどうさ!?落ちればアウト、それが嫌なら這いずりな!!ザ・フォール!!!》

第二関門が見えた。そこの見えない大穴の中に小島がランダムに建てられており、その間が縄で繋げられている。綱渡りか。

かつて対馬の冥人(くろうど)は細い縄の上を難なく歩き、敵を奇襲したという。ならば忍びにできぬ道理はなし、少しも速度を緩めないまま縄に足をかける。

《さあ先頭は難なくイチ抜け!続くは爆豪!下はダンゴ状態!!そして早くも最終関門、その実態は――》

次のエリアが実況されるころ、ようやく爆豪の後方に追いつく。

《一面地雷原、怒りのアフガンだ!!地雷の位置はよく見りゃわかるようになってんぞ、目と脚を酷使しろ!!》

地雷を踏まないようにしているのだろう、轟のスピードが若干緩くなる。しかし爆破で大ジャンプできる爆豪が有利か、先頭が爆豪に入れ替わる。

《ここで先頭がかわったーッ!後続もスパートかけてきた!だが引っ張り合いながらも、先頭2人がリードかあ!?!!》

《3人な》

と相澤先生がプレゼントマイクの言葉を訂正する。

《え?3人……ってオイオイオイ!?A組薄井!?いつの間にか先頭に追いついてるじゃねぇか!!しかも地雷原全力疾走!シヴィーゼコイツァ!!》

地雷の位置はよく見ればわかる、常人でそうなのだから

狼からすれば、よく見ずともわかるのだ。

「やっぱ来やがったか、空気ヤロウ!!」
　爆豪が爆破を放つ、それを体を前につんのめらせて避け、左腕を回すようにしながら前方に着く。それを回転の勢いとして利用し、前方に回転しながら腕で跳ぶ。
《なんだあの動きはァー!!まるでジャパニーズニンジャー!!と、ここで後方で大爆発!?!!何だあの威力!?!!　偶然か故意か――同じくA組緑谷、爆風で猛追ーー!!!!》
　仮想敵の装甲をボードのようにして、緑谷が後方からかなりの勢いで飛び出す。
《っつーか、抜いたあああぁぁ!!!元先頭の3人!足の引っ張り合いを止め緑谷を追う!!》
「デクぁ!!!俺の前を、行くんじゃねぇッ!!」
「後ろ気にしてる場合じゃねえ……!」
　爆豪は爆破で更に勢いを増し、轟は地面を凍結させ、地雷を無効化し走り出す。狼に加速の術はない、少しでもスピードを緩めれば負ける。
　空中の緑谷が失速する、ここのまま落ちるようなら、それまでのこと。
　だが……
　チラリと、真横に滞空している緑谷に視線をやる。
　コイツは――まだ、諦めた顔をしていない。
　空中で一回転し、持っている装甲を地面に叩きつける。
　マズイ、その位置は――
《緑谷、間髪入れず後続妨害!!なんと地雷原クリア!!》
　狼はクラスメイトの女子と比べても背が低く、その分体重も軽い。
　横に回避するが、真横で爆発した複数の地雷の風圧に耐えれず、吹き飛ばされてしまう。回避したことで慣性が働き、むしろ逆効果になってしまった。
「ぬうっ……!」
　受け身を取りすぐに起き上がり走り出すが、緑谷が一着でゴールしたとの実況が聞こえる。吹き飛ばされている間に、大勢に抜かれてし

まった。

▼

結果、薄井狼２０位。

予選は通過できたが、後半の順位を鑑みると惜しい結果と言えるだろう。狼も珍しく、なんとも言えない表情で自分の順位が表示されている画面を見ていた。

「……上背が、足りぬ……のか……」

「薄井ちゃん、派手に吹っ飛んでたものね。後ろから見えたけど、中々芸術的だったわ」

「……」

「予選通過は４２名！落ちちゃった人もまだ見せ場はあるから安心しなさい！さぁ、次はいよいよ本戦よ!!」

ミッドナイトが「第二種目はコレよ！」とスクリーンを指差す。

そこには「騎馬戦」と映し出されていた。

参加者は2～4人のチームで騎馬を作ること。

普通の騎馬戦と違うのは、第一種目の順位に応じてポイントが割り振られるところ、だそうだ。

割り振られるポイントは下の順位から5ポイントずつ上昇していく。

式は……（４３―自分の順位）×５、最下位は1×５で5ポイントで1位の緑谷は４２×５で２１０ポイント。２０位は１１５ポイントか。

「1位に与えられるポイントは１０００万!!」

……緑谷が冷や汗をかき始めた。

これもＰｌｕｓＵｌｔｒａ（更に向こうへ）、上を行く者には更なる苦難を……ということか。

ポイントをコツコツ集めることも、１０００万で一発逆転を狙うこともできる……各チームの戦略が問われるところだ。

説明が続く。
制限時間は１５分、終了時に持っているポイントが持ち点となる。
ハチマキは首から上につけること。そしてハチマキを取られても、騎馬が崩れても失格にはならない、ここも普通とは違う点だ。
例え序盤にポイントをかき集めても、バテてきた終盤に掻っ攫われる可能性もある。
さらに悪質な崩し目的の攻撃以外は何をしてもいいらしい。
そして第３種目に進めるのは、上位４チームのみ。
「それじゃこれより１５分間！チーム決めの交渉タイムスタートよ！」
さて、どうするか……体格的に騎馬は不向き、かと言って強力な個性を持つ騎手が相手では刀か忍具が無ければ太刀打ちできない。
騎手が複数人いるような騎馬で索敵を担うのが最適だが……
「狼くん！私と組も～！」
「薄井くん！僕と組んで！」
交渉タイムが始まって少ししたあたりで、声をかけられた。
ふたりから、同時に。
「へ？」
「ありや？」
「……」
どうすれば、よいのだ。

Ｎｏ．１２　第２種目、騎馬戦

馬上で十文字槍を振るう相手と刃を交え、鎬を削りあったことはある。心中で幾度となく戦ってきた今では苦戦することはないが、彼もまた強敵であった。

だが此度は騎馬対騎馬の争い、刀は使えず忍具もない。どのように立ち回ればよいのか未知数だ。

「私のが先に声かけたからね！」

「そ、そんなこと言ったら僕だって同じだよ！」

だが騎馬戦よりも先に、この小さな争いをどうにかしなければならない。

緑谷と葉隠による狼の取り合い。

お互い既に他の仲間は決まっているようだ。

緑谷チームには麗日と、常闇――影の妖を身に宿す、格好良い個性を持つ、頭部がカラスのような男子だ――。索敵要員が欲しい、と言ったところか。

対して葉隠チームには砂藤と耳郎。砂糖（白い粉）を食べてパワーアップという外聞がよろしくない個性をもつ巨躯の男子と、耳たぶの先がイヤホンジャックになっているイヤホン要らずの便利個性の女子。耳郎はイヤホンジャックを地面などに刺すことで音による索敵もできたはずだが、足を止めねばならない為この競技には向いていない。こちらも索敵要員を探しているのだろう。

取り合いをしている緑谷と葉隠はいたって真面目なのだろうが、それを見ている両チームメイトは呆れた顔をしたり微笑ましいモノを見るような顔をしている。どうでもいいからこの状況をどうにかして欲しい。

その意を込めて麗日に視線を送る。

「ハハハ……」

苦笑いで濁されてしまった。ならば砂藤。

……手を横に振りムリだと伝えられる。

四面楚歌とはこのことか。

「男子2人に女子1人で男子を取り合う三角関係……そういう青臭いのはスゴく好みッ!!だけどもう時間だからジャンケンで決めなさい、ジャンケン」

そんな様子を見兼ねた主審のミッドナイトがそう告げる。

「……行くよ、葉隠さん!」

「来い!緑谷くん!」

「「最初はグー……ジャン、ケンッ!」」

▼

《さァ、上げて鬨の声!!血で血を洗う雄英の合戦が今!狼煙を上げる!!!》

「薄井くん!麗日さん!常闇くん!よろしく!!」

ジャンケンに勝利したのは緑谷。

狼を先頭に緑谷、麗日で馬を作り、騎手は常闇。

作戦は逃げ切り。前方を狼が警戒、後方は常闇の個性「黒影(ダークシャドウ)」が警戒しつつ、中距離での防御を兼任。麗日の個性「無重力(ゼログラビティ)」で軽くすれば狼の機動力は損なわれず、ここぞという時に回避が可能。司令塔は咄嗟の判断力に優れる緑谷。完全防御と逃走に重きを置いた布陣だ。

《3!2!1!　騎馬戦、ＳＴＡＲＴ!!!》

開幕の合図が告げられる。

それと同時にこちらを攻めにくる騎馬が2騎、Ｂ組の騎馬と葉隠の騎馬だ。

「実質それの争奪戦だ!!」

「はっはっは!!ジャンケンの恨みを晴らさせてもらうよ緑谷くん!!」

「いきなりの襲来とはな。追われし者の宿命(さだめ)……選択しろ、緑谷」

「もちろん、逃げの一手!」

指示に従い足を動かすが、動きが鈍い。まるで泥沼を歩いている時のように足が重い。下を見ると、地面が沈んでいた。

「地面が沈んでる!Ｂ組の人の個性か!麗日さん、常闇くん!!」

麗日が全体を個性で軽くして、常闇のダークシャドウが硬いままの地面を掴み、騎馬を引っ張り上げる。
「麗日さんは個性そのまま！薄井くんは着地したら思いっきりジャンプ!!」
着地と同時に腰を深く落とし、前方に思いっきり跳ぶ。
軽くなっている分普段の倍は高く跳躍することができた。
葉隠の騎馬から耳郎がイヤホンジャックで攻撃してくるが、黒影（ダークシャドウ）がそれを防ぐ。
「いいぞ黒影（ダークシャドウ）、常に俺たちの死角を見張れ」
『アイヨ！』
!?この個性、喋るのか……いいな。
「ハハハ！奪い合い？違うぜ、これは……一方的な略奪よお!!」
着地したところに障子の騎馬が駆けてくる。
「障子くん！あれ、1人!?騎馬戦だよ!?」
「一旦距離を取れ！とにかく複数相手に立ち止まってはいかん！」
緑谷が一人で駆けてくる障子に驚くが、常闇が指示を出す。
あれは……肩から生えた個性の飛膜のようなもので覆い、背中の騎手を隠しているのか。
「足元に気を付けろ……中に、峰田と蛙吹が隠れている」
先頭にいる故に、既に峰田の個性を踏んでしまった狼は器用に靴を脱ぎ去っていた。
「うわっ！ほんとだ！もぎもぎ踏むとこやった……」
こと騎馬戦に置いて峰田の個性は凶悪極まりない。
一度踏めばその場にとどまらざるを得ない、靴を脱いで脱出しても素足に慣れていなければ今後の機動力が削がれる。尤も、狼は靴を脱いでも関係ないのだが。
蛙吹が中から舌を伸ばしハチマキを狙うが、常闇はそれを避ける。事前に知っていれば避けることは容易い。
混戦を避ける為もう一度跳躍し、宙を駆ける。
「……左だ、防げ」
下から爆破の音が聞こえた。十中八九爆豪だ。

「調子乗ってんじゃねぇぞクソが!!」
爆豪の爆破を黒影（ダークシャドウ）が余裕を持って防ぐ。
空中の爆豪を鉤縄に似た個性の持ち主が回収する。
騎馬を離れても地に足をつけなければＯＫらしい。
……騎手を務め、敵の騎馬を転々としながら略奪するのもアリだったというわけか。だが今更だ。
《さァ残り時間半分を切ったぞ!!》
プレゼントマイクの実況がそう伝える。
それと同時……前に立ちはだかるは、轟の騎馬。
「そろそろ……奪（と）るぞ」
前方に飯田、左右には電気を纏い、放つ個性の上鳴（かみなり）と、モノを創造する個性の八百万。
攻撃力、機動力、防御力共に申し分ない組み合わせだろう。
「もう少々終盤で相対するのではと踏んでいたが……」
「時間はもう半分、足は止めないよ！仕掛けてくるのは……一組だけじゃない！」
轟の騎馬の後方からは４つの騎馬が迫っている。
それを上鳴の個性で足止め、からの轟の氷結で完全に動きを封じてしまう。
そしてその氷結でこちらの騎馬と轟の騎馬を囲むように、逃げ道を塞がれる。
麗日が個性を使用、跳躍の溜め、飯田がいるとなるとこの動作だけでも隙を与えることになる。
空中に逃れられたとして八百万が飛び道具を創造する可能性もある。
空中へは逃れられない。
常闇が牽制としてダークシャドウで攻撃を仕掛けるが、八百万が鉄板を創造し、それを防ぐ。
「創造が厄介すぎる！」
「いや……それ以上に上鳴だ。あの程度の装甲、太陽光ならば破れていた」

競技開始前に聞いた、常闇の黒影（ダークシャドウ）の弱点。
闇が深い場所であるほど攻撃力は上がるが制御が困難に、逆に明るい場所では攻撃力は下がるが制御可能になる。
つまり、上鳴の放電による電光とは滅法相性が悪いのだ。
心なしか黒影（ダークシャドウ）も及び腰になっている。
「攻撃力低下……それ、向こうには知られてないよね？」
「恐らくな」
「……知られてないなら、牽制にはなる、大丈夫。なんとしても、１００万は持ち続ける！」
作戦は、常に距離を保ちつつ、轟の左側をキープする。
轟の氷結は右側からしか打てない。左側に位置取り、右手の射線上に飯田が来るようにすることで氷結を封じ、放電は黒影（ダークシャドウ）に頑張ってもらう。それを繰り返し、なんとか１０００万ポイントを守り切っていた。
《残り時間約1分！轟、フィールドをサシ仕様にし……そして、あっちゅーまに１０００万ポイント奪取!!
とか思ってたよ、5分前までは!!常闇チームなんとこの狭い空間を5分間逃げ切っている!!》
あと1分、されど1分……個性というモノが存在する以上、結果はまだわからない。
――皆、残り1分弱……この後俺は使えなくなる、頼んだぞ――
―
飯田の足についたエンジンが急激に激しい音を上げ始める。一体、何を……ッ
「避けろっ……!!」
「トルクオーバー！レシプロバースト!!」
飯田による超加速。
彼は瞬間的な加速はできないという思い込み、その隙を突かれた。
狼だけならば難なく避けることはできただろう。しかしこれは騎馬戦、先頭が避けたことで体を逸らすことは出来たが、ハチマキを奪われてしまう。

「は……？」
《な――何が起きた!?速っ、速ーーい!!飯田　そんな超加速があるなら予選で見せろよーッ!!》
唖然とする緑谷、麗日、常闇。
あのポイント以外に、持ち点は無い……。
《ライン際の攻防の末、逆転!!轟が１０００万!!そして常闇、急転直下の０ポイントーッ!!》
「突っ込むよ!!」
緑谷が叫ぶ。それより速く、先頭の狼は走り出す。
「緑谷っ!?上鳴がいる以上攻めでは不利だ、他を狙う方が堅実では……」
ポイントの散り方が把握できていない以上、轟を狙うしか無い。
それに飯田はしばらく個性を使えない。ここしかないのだ。
それを伝える。
「よっしゃ！取り返そう、絶対!!」
「フッ……承知した。黒影（ダークシャドウ）！我ら闇の眷属、深淵の如きその力、今こそ示す時だ!!」
『任セナ！フミカゲ!!』
真っ直ぐに、敵に突撃し、騎手同士の激しい攻防が始まる。
しかし、轟との近接戦では常闇が一歩劣る。黒影（ダークシャドウ）は上鳴の対処をしているため、使えない。
個性を使用しない戦闘に慣れていないのだ。
「……麗日、個性を使え」
こちらでサポートする他ない。
蔦のような髪をした騎馬が蔦でポイントを掠め取っているのを見た。注意がされない以上騎馬が騎手を攻撃しても問題ない。
「え?でも……っよくわからんけど、わかった！」
体が軽くなると同時に軽く跳躍する。少しでもいい、轟の隙を作るのだ。
常闇との攻防で前に出ていた轟の腕を、左足で上から蹴り下げ、右足で肩を踏みつけつつ轟の後方へ逃げるように跳ぶ。

「奪(と)れ、常闇……！」
「承知!!」
常闇がダークシャドウを伸ばし、ハチマキを奪い取ったのを確認する。
「とった！とったあぁ!!」
緑谷が歓喜の声を上げる。
《残り17秒！こちらも怒りの奪還!!》
「いや、緑谷……してやられた！」
《そろそろ時間だ！カウントいくぜ、エヴァバディセイヘイ!!》
10
常闇が奪い取ったハチマキを見てそう言った。
手に握るのは、70ポイント。
ハチマキを裏返してポイントをわからなくしていた轟、最後に奪った1000万が1番上かと思いきや、順番を変えられていたようだ。
70Pでは、次の競技に歩を進めることはできない。
9
8
「まだだ！」
7
周囲の氷の一部を溶かした爆豪の騎馬が乱入してくる。
6
上鳴の放電で近寄ることができない。
5
放電が収まった瞬間、再び跳躍し、轟に迫る。
4
蹴りで轟の腕を押し下げるが八百万に押し出され、黒影(ダークシャドウ)の手はハチマキを掠るだけに終わる。
3
2

着地する。

1

常闇が黒影（ダークシャドウ）を飛ばす、しかし届かない……

《ＴＩＭＥ　ＵＰ！》

競技終了を告げる声が響く。

常闇が奪えたポイントは、７０ポイントのみだ。

《早速上位４チーム見てみよか！》

緑谷は悲痛な面持ちで下を向いている。

《1位、轟チーム！2位、爆豪チーム！3位、鉄て……アレェ！心操チーム!?いつの間に逆転してたんだよ、オイオイ!!》

「デクくん」

「……ごめん、本当に……」

緑谷が顔を上げると、麗日がワナワナしながら狼を指差している。

常闇はフッと笑い腕を組む。

「!?も、もしかして、それ……!!」

「１０００万での進出、ではないが……それでも、だ」

足を上げ、指に挟んだままのハチマキを見せる。

峰田の個性で靴を脱がされたのが幸いした。

そして1回目の跳躍でハチマキを奪った黒影（ダークシャドウ）にだけ注意を向けていたのだろう。２回目の跳躍では、こちらに対する注意が散漫だった。

「忍びの如し早業……」

「蹴りを入れた際に、盗っておいた。……これで、足りるか」

《４位、常闇チーム!!》

滝のような涙を噴出しながら崩れ落ちる緑谷、ポイントは十分だったようだ。

《以上４組が最終種目へ……進出だあぁーーッ!!》

Ｎｏ．１３　最終種目、第一回戦

無事に第３種目への進出が決まり、昼休憩。
スタジアムの外に設置されている無料の給水所でお茶を淹れ、出店や屋台などがある大通りから外れた人の少ない休憩所、そこからさらに外れた場所にある木陰で涼みつつ、木の根元に腰掛けながらそれを啜っていた。
「……」
無表情で、何を考えているかわからない。少々近寄り難い雰囲気を感じる。
彼が考えているのは先の騎馬戦にて共に戦った常闇踏陰（とこやみふみかげ）の、自我を持つ影の妖（あやかし）のような個性「黒影（ダークシャドウ）」のことだ。
なかなかに格好良かったし、便利そうな個性だった。
しかし体と一体化しているのならプライベートもクソもなさそうである。なにか食事は取るのだろうか。
そもそも身体能力である個性に自我があるとはどういうことなのだ。デフォルメされたカラスのような頭部が常闇の個性で、黒影（ダークシャドウ）は別の個性と言われた方が納得できる。
例えば――元々双子だったが、片方が死産し、その個性が偶然身に宿ったとか。
……いや、妄想とはいえ不謹慎だし失礼だな。やめておこう。
体育祭とは全く関係ないことを考えながら、何やかんやで昼休憩の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。
スタジアムに戻るとしよう。

▼

昼休憩終了後。次の種目を発表する前に、予選落ちした生徒も楽しめるようにと、レクリエーション種目が用意されているようだ。
次の最終種目に残れなかったヒーロー科でも、ここで目立ってプロヒーローの目に止まれ、との計らいもあるのかもしれないし、無いの

かもしれない。
レクリエーションがあるのは分かったが、妙な点がひとつ。
何故か同じクラスのA組の女子が全員チアリーダーのコスプレをしてスタジアム内に立っているのだ。
……話を盗み聞くに、峰田と上鳴に騙されたようだ。
騙されたことに落ち込む者、少し露出のある格好に恥ずかしがる者、はてには楽しんでしまえ！と言う者もいる。
そして、しれっとされる最終種目の説明。
トーナメント形式で行われる1対1のガチンコバトル、組み合わせはくじ引きで決める。その後にレクリエーションを挟んで始まるようだ。
1位のチームからくじ引きをする、と言うところで名乗り出た者が2人。尻尾を持つだけの個性の尾白と、もうひとり——B組なので名前はわからない——だ。
その2人は出場を辞退したいと言う。
騎馬戦の記憶がボンヤリとしかなく、皆が力を尽くして手に入れた最終種目の座を、そんな状態で手に入れることはできないのだと。
それに対してクラスメイトは、本戦で成果を出せばいいと助言するが、それはプライドが許さない、自分自身が嫌なのだと言う。あと何でチアリーダーの格好をしてるのかとも。
主審のミッドナイトはその話を
「そういう青臭い話は好みッ!!」
と2人の棄権を簡単に認めた。
代わりにB組の誰かが2人繰り上がったようだ。
そしてスクリーンにトーナメントの組み合わせが発表される。狼の一回戦は第5試合、対戦相手は芦戸。
確か、酸を放出する個性だったか。こちらは相手に触れただけでダメージを負う、あまり肉弾戦はしたくない相手だ。義手に酸が掛かれば、何か不良が起こる可能性もある。
対戦相手が決まり、レクリエーション種目が始まる。
種目は借り物競走、大玉転がし、三角ベース……最終種目に向けて

準備することもなく、暇なので観戦していたが、なかなか楽しそうなものだった。来年からは参加も検討しよう。

その間、A組の女子はチアリーダー姿のまま、八百万と耳郎以外は応援を楽しんでいた。2人は嫌なら着替えれば良かっただろうに、なんだかんだ楽しんでいるのだろうか。

そんなことを考えながら全体をぼーっと眺めていると、ふと宙に浮かぶチアリーダー衣装――葉隠と目が合った気がした。透明なのだから、目が合うはずなど無いだろうに。

そして時は過ぎ、トーナメント戦が始まる。

第1試合は緑谷と普通科の心操。ヒーロー科の緑谷が瞬殺するかと思いきや、心操の個性「洗脳」の術中にハマってしまい窮地に陥る。

しかし、緑谷の個性が暴発?し、指一本を犠牲に洗脳を解く。

そのまま心操を背負い投げ、場外判定で勝利。

何とも危ない試合運びであった。

しかし、洗脳か……発動条件は心操の呼びかけに応えるだけ。強個性だが、惜しむらくは体の貧弱さ。そこさえ乗り越えれば、十分戦力になるだろう。

次の第2試合は轟と瀬呂のA組対決。瀬呂は肘にセロハンテープが付いておりそれを伸ばしたりできる個性。

一見して瀬呂に勝ち目は無さそうだが、勝ち目が無い訳ではない。

轟の氷結の弱点は何かに沿って氷が進むこと、つまりある程度の高さまで宙に浮かせれば氷は使えない。

よって、個性で拘束し、投げ飛ばした瞬間にテープを切れば瀬呂にも勝ち目はある……だが、その時間で轟が個性を発動できないとは思えない。

そしてその通りになった。

スタジアムを越える高さの氷塊、会場は瀬呂に対するドンマイコールに包まれた。

第3試合は上鳴とB組の塩崎。塩崎は髪が蔓になっており、それを自在に操る個性。

上鳴は試合前にナンパをし、挙げ句の果てには「勝負は一瞬で終わ

る」と宣った。宣言通り勝負は一瞬で終わった、上鳴の敗北で。
蔓で拘束されるだけなら放電で倒せたのだろうが、蔓を切り離されたことにより電気は届かず、完封。
なんと、情け無い……。
さらに第４試合、飯田とサポート科の発目。控室から見ていたが、第３試合とは別の意味で、この試合も酷かった。一言で言えば実演販売。
発目は飯田を言葉巧みに丸め込み、自分が作ったサポートアイテムを装着させたのだろう。そしてその性能を会場に向けて解説。１０分ほどそれを続けた後、もう思い残すことはないと発目は自ら場外へ出た。
哀れなり飯田、強く生きてくれ。
そして第五試合。
試合場に入場すると、プレゼントマイクの実況が聞こえる。
《メインカラーはピンク！そして個性はショッキング!!溶かしすぎてショックな映像見せんなよ!!ヒーロー科、芦戸三奈(あしどみな)!!》
正面に立つ芦戸は、笑顔で肩を回したりして気合を入れているように見える。
《対(バーサス)!!　アクロバットな動きは正にニンジャ！スゴイけど何故か目立たない男!!薄井だけに影も薄いのか!?同じくヒーロー科、薄井狼(うすいおおかみ)!!!》
適度に脱力しつつ、棒立ちの狼。
「正直、薄井相手じゃ自信ないけど、片腕ないからって容赦しないよ！」
「……構わぬ」
《レディィィイ！ＳＴＡＲＴ!!!》
「相変わらず、渋いねえッ！」
芦戸が手のひらに溜めた酸を投げつけてくる。
体勢を低くし前にステップしながら避け、低い体勢のまま足払いを掛ける。芦田はそれを後方にジャンプすることでそれを避けつつ、更に酸を放つ。

低く狙われた酸を前方に高く跳びながら避ける、そのまま地面と水平に回転しつつ落下に合わせ叩きつけるような蹴りを放つ。
ステップで横に避けられるがそのまま回し蹴り、跳び後ろ回し蹴りを放つ。
仙峯脚――悟りの峯を目指す者はこの技を極めんとしたという。
まずは蹴ることから、修行は始まるのだ。
《薄井による蹴り技が続く！芦戸は防戦一方か!?》
着地と同時に腰を沈め、鳩尾目掛け横蹴りを放つがギリギリ防がれる。靴の側面が、芦田の纏う酸で少し溶けた。
「痛ッ～！体ちっちゃいのに、どこにそんな力あるの!?」
「知らぬ」
淡白に答えると、威力よりも速さに重きを置いて再び仙峯脚を放つ。
威力が弱いため簡単に防御されるが、近づくための牽制には十分。至近距離で中段回し蹴りのフェイントをしかけ、防御が下がったところで上段の回し蹴りを頭部に当てる。
フラついたところを、場外へ吹き飛ばすため背撃を放つ。それを受けた芦戸は大きく後ろに後ずさった。
追撃の為、それを追いかける。
《速い！そして巧い!!あれで増強系じゃないってマジか!?》
《しかも本業は剣術だからな》
《ウソォん!?1年にしちゃ仕上がり過ぎだろ!!》
「くっ……そぉ!!」
芦戸は場外判定のライン寸前で踏み止まり、近寄らせないように一歩前に踏み出して酸を前方に撒き散らす。
それをバックステップで回避し、酸を踏まぬよう跳躍しつつ芦戸に肉薄する。
防御姿勢を取るが、腕ごと狼に踏みつけられ大きくよろめく。
着地し、肩を強く押しながら片足を払うと、芦戸は場外を示すラインを超えた先で尻餅をついた。
「芦戸さん場外！薄井くん2回戦進出!!」

主審のミッドナイトがそう告げる。
刀がなければ、まぁ、こんなところだろう。一撃必殺がない以上手数で攻めるしかなくなる。
「あっちゃ～、手も足も出なかったや」
「……敵に当てるならば……面でなく、点で狙うと良い。立てるか」
桶の中の水を放るのではなく、水鉄砲のように飛ばせれば、飛距離と速さは大きく変わるだろう。そうなれば、戦い方もまた変わる。
尻餅をついたままの芦戸に手を差し出す。
「ん、ありがと。面じゃなくて点で酸を飛ばす、か……考えてみ――わわっ！」
芦戸はその手を取りながら立ち上がるも、酸で溶け出していた地面に足を取られ、狼を巻き込み押し倒すような形で転倒してしまう。
顔のあたりに何か柔――考えない方がいい、と思考と個性を無理やり停止させる。
峰田が見たら目を血走らせながら羨ましいと恨み言を叫びそうな状況だ、実際叫んでいる。
「ってて～！油断した……大丈夫？薄井」
「……あぁ」
今度は逆に芦戸の手を取り立ち上がる。
なんとも締まらない終わり方で一回戦を終えて、観客席に戻った。

▼

観客席に戻って早々、紫色の丸が迫る。
「テメェ薄井テメエェェ!!なんでだよテメェなんでなんだよぉぉ!!!オイラと代わってくれよ!!どんな感触だったんだよ羨ましいんだよ!!チビのくせに、チビのくせに!!」
「……お前もチビだろう」
「そういうことじゃねぇんだよ!!せめて感想聞かせろ感想を!!」
「……言えぬ」

A組の女子含め他の面々もいるのだ、言うべきではない。
そもそも、アレは事故なのだ。
「ハァッ!?言えないほど良かったっていうのか……!?」
何故そうなるのだ、A組男子も聞き耳を立てていないでコイツをどうにかしてくれ。
「……明かせぬ」
「朴念仁のくせに初心なフリしやがって……ギャップか?ギャップなのか?オイラにもギャップが必要なのか……?」
その後も峰田の尋問は続き、第6、第7試合と2連続で試合をちゃんと見ることが出来なかった。
そして第8試合、麗日と爆豪の組み合わせだ。
爆豪は女子だからといって手加減するような性格ではない、天地がひっくり返ろうがそれはありえない。仏に誓える。
そして試合開始と同時に始まる容赦ない大爆破。
麗日は触れることさえできれば大きなアドバンテージを得ることができるが、それを許す爆豪ではない。
爆破で出来たステージの破片を大量に宙に浮かし、それを落下させ爆豪に一杯食わせるがそれすら爆破で防がれる。
そして麗日がスタミナ切れで倒れ、爆豪の勝利となった。
これで第一回戦は全て終了。
続いて、第二回戦が始まる。

Ｎｏ．１４　最終種目、第二回戦

第二回戦の第1試合は緑谷と轟の対決。

轟の氷結を相手に、緑谷は指の骨を犠牲になんとか立ち回っていた。

轟が氷結を7回放ち、緑谷が指を5本壊し、左腕にヒビを入れ、壊した指をもう一度壊した頃、ようやく緑谷が轟にボディブローを入れる。

氷結を連続使用すると体温の低下で身体能力が下がり、個性の勢いも弱まると見越した緑谷の分析力が轟を相手に通じたということだ。

だが……犠牲に対して見返りが少なすぎる。

仮に勝ったとしても次の試合に出場することは不可能だろうに。

そして試合の終盤、緑谷の言葉に感化されたのか、轟が今まで封印していた彼の左半身に宿る「炎熱」の個性を放った。氷結の個性で冷やされた空気が炎熱で瞬間的に膨張、その爆風で緑谷は場外となった。

付き合いは長いが、未だにここぞという時の緑谷の行動は読めない。

何がなんでも勝ちたかっただろうに、わざわざ敵に塩を送り自らの勝機を断つとは。

先程の熱膨張でステージが崩壊したのでしばらく補修に時間を取られるとのことなので、麗日、飯田、蛙吹、峰田と共に緑谷の様子を見に行くが、看護教諭のリカバリーガールにすぐ追い出されてしまう。

そして第2試合、飯田と上鳴を完封した塩崎との試合だ。

拘束されることを警戒した飯田が速攻。塩崎も抵抗するが速さに負け場外。あっという間に終わってしまった。

次に第3試合、狼と常闇の勝負。

騎馬戦で組んだこともありお互いの実力はある程度把握している。

最後のハチマキの取り合いで常闇は轟に対して攻め切れずにいた。

個性の黒影（ダークシャドウ）は強力だが、本体はそれほどでもない。ならば間合いの

さらに内側へと潜り込めば良いのだ。
「騎馬戦では勝利の為に手の内を明かしたが……お前は暗闇を照らす光を持たない。我らの勝機、未だ失われてはいないぞ」
「……」
《一回戦では相手を完封！闇より来れシャドウモンスター!!ヒーロー科、常闇踏影!!》
対(バーサス)
《小さい体にビッグなパワー！ギャップが激シヴィーッ!!ヒーロー科、薄井狼!!》
《さぁ行くぜ第2試合！レディィイSTART!!!》
開始の合図と共に狼と黒影(ダークシャドウ)が前へ出る。
黒影(ダークシャドウ)の頭部に掌底を打ち込むが効いている様子はなく、引っ掻くような攻撃を仕掛けてくる。
回し蹴りを放ち、それを迎え撃つが力負けしてしまう。
物理攻撃はおそらく無効。忍具がない為、他の攻撃手段はない。
黒影(ダークシャドウ)の連続攻撃から逃れる為、後方に跳び距離を取る。
「我が黒影(ダークシャドウ)は無敵。この鉄壁の防御を崩すことは叶わんぞ、薄井……いや、その目……まさに野生の獣の如し眼光、名は体を表すとはこのことか。……隻腕の狼よ！」
「……地を這うカラスが、敵うと思うか」
「窮鼠猫を噛む……相手を弱者と侮れば、痛手を負うは強者の運命(さだめ)」
「戯言を……」
「フッ、戯言かどうか……試してみるがいいッ！黒影(ダークシャドウ)!!」
再び黒影(ダークシャドウ)が狼に襲い掛かる。
攻撃を回避しつつ、策を練る。
ただ迎え撃つのではダメだ、こちらの足が力負けしてしまう。
――思えば、脚を武器とする者と相対したとき、その者はどうしていたか。刀を持つ己に対し……足で、弾きをしていた。
心中で幾度となく刃を交えた、幻術を使う老齢のくのいち。彼女を前にして、己の刀は足技にて容易く弾かれた。
あぁ、そうか――弾きが出来るのは刀だけという思い込みが、前提

として間違っていたのだ。
そうだ、これはシステムに縛られたゲームではない、狼が出来ることだけが、俺が出来ることではないのだ。
爪のような影が迫る、体を捻り、敵の動きに合わせ、掌を蹴り上げ、弾く。
作中に刀を使わぬ敵は大勢いた、ただ狼はそれを真似る必要がなかっただけなのだ。彼の武器が、刀である故に。
こちらが攻めに転じない様子を見て、黒影（ダークシャドウ）の連撃が続く。攻撃は強く、そして速い。しかし、動きは単調だ。
いくつか弾き漏らすが、連撃をひとまず凌ぎきる。
《おぉーっと！一回戦では怒涛の攻めを見せた薄井が今度は防戦一方!!手も足も出なァーい!!》
『フ、フミカゲ、ナンカ変ダゼ！コイツノガード！』
「構わん、奴に攻めさせるな！そのまま押し切れ!!」
再び連続で拳や爪が襲い掛かる。
――仙峯寺の僧は、弾きこそしなかったが無手で刀を防御してみせた。それを真似れば、同じ無手同士、弾くことは敵う筈だ。
迫る拳に合わせ、交差させた腕を回すようにしながら、黒影（ダークシャドウ）の拳を弾き、続く爪も同じように弾く。
「今だ、穿て！黒影（ダークシャドウ）!!」

危

弾きの衝撃で後方に押され、場外判定を示す線はもう狼のすぐ後ろだ。勝負を急いたか、隙と見たか、常闇の指示に従い黒影（ダークシャドウ）は爪による突きを放つ。
突き攻撃に対し、普通ならば左右に避けるか、後ろに下がってしまうだろう。
だがしかし、忍びの目ならば、突きの動きを捉え、得物を踏みつけ、そこから反撃に転じられる。
誤れば死地に至るだろう。

だが、見切ればすぐに倒せるではないか。
忍びは、そう考えるのだ。
『うげッ！』
「ヌウッ！何があった、黒影（ダークシャドウ）!?」
臆さず前に踏み込み、片足を上げ黒影（ダークシャドウ）の爪を踏み付ける。ついに、黒影（ダークシャドウ）の体幹が崩れる。
それに合わせ常闇の体幹も揺れる。
黒影（ダークシャドウ）を跳び越え、常闇に肉薄する。
《デ、デンジャラァース!!自ら敵の攻撃に接近し攻撃のチャンスに変えやがったァー!!やっぱニンジャだろアイツ!!》
跳躍したまま回し蹴りを頭部に叩き込み、着地し腰を落とす。
「御免……！」
最後のトドメに、鳩尾に肘鉄を抉るように突き出す。
「……見事。隻腕の、狼よ……」
意識を失い、崩れ落ちる常闇の体を支える。
「常闇くん行動不能、薄井くん第三試合進出!!」
――無手弾き――
弾きは刀があればこそ
だが、忍びの師には
無手でありながら刀を弾く者がいた
ならばそれを、真似ればよい

▼

観客席に戻ると葉隠が「こっちこっち！」と言いながらこちらに手を振っていた。
片手には袋を持っており、隣の芦戸が袋に手を突っ込みながら口をモゴモゴと動かしていることから、中身は食べ物だということがわかる。
「おつかれー、隣空けといたよ！」

隣の空席をぺしぺしと叩きながら着席を促される。
断る理由もない為、隣に座らせてもらおう。
「あぁ……それは、いったい何だ」
「コレ?ドーナツの丸いヤツ。経営科が売ってた」
口の中の物を飲み込んだ芦戸がそう答え、袋から一つ取り出して見せ、半分ほど食む。葦名の地に伝わる丸薬を思い出す大きさの、狐色に揚げられた砂糖がまぶしてある球状の食べ物のようだ。
しかし前世の記憶が朧げな今、もはや未知の食べ物である。
確認するように復唱してしまう。
「どーなつ」
「ありゃ、狼くん、もしかして食べたことない?」
「……おそらく、ない」
「えー!?こんな美味しいのにもったいないって~。ほら、食べな食べな!はい、あーん」
袋から新しくドーナツを取り出した芦戸が、口を開けろとそれを近づけてくる。そのまま食べていいものなのかと迷っているうちに
「あー、んっ!」
「ちょ、葉隠、指!指噛んでる!痛いって!!」
突然芦戸の指ごとドーナツが消失してしまったように映る。葉隠が食べてしまったのだろう。なかなか奇妙な図だった。
「もー、急に怒ってどしたのさ。薄井の分なくなっちゃったじゃん」
「……構わぬ」
「怒ってないもん、食べたかっただけだし!後で私が奢るし!」
「ちぇ~」
……試合を見よう。
第4試合は爆豪　対　切島。
爆破と硬化、硬化に綻びが生じる前に爆豪を倒せれば切島にも勝機があるだろう。しかし爆豪は切島の猛攻を凌ぎ、硬化が弱くなった頃会いに爆破。それを起点に爆破の連打を受け、切島は倒れる。
これで、狼が第3回戦で戦う相手は爆豪に決まった。
戦えないことはないが、決め手に欠ける。

弾きで攻撃は防げても爆破は防げない。空中へ跳んではかえって吹き飛ばされる。かと言って持久戦に持ち込んでは耐久力の問題で先に倒れるのは俺だ。最大火力で爆破されれば、爆風で場外へ飛ばされて瞬殺される可能性すらある。

後の先を取り続けるしかないとは、難儀なものだ。

選手の控室に向かい、試合が始まるのを待つことにした。

無手で勝てる確率はおそらく五分五分、隙を晒してくれることを願おう。

Ｎｏ．１５　最終種目、準決勝戦

選手控室内。
轟と飯田の試合をモニターで観戦していると、控室の扉が勢いよく雑に蹴り開かれる。
「……部屋を間違えている」
「違えわクソが！」
爆豪がやって来た。コイツが自分からやって来るなど初めてのことだ。
部屋を間違えたのではないとなると、試合前に何の用があるのだろうか。
「俺との試合、刀とアイテム使えや」
「……何故だ」
「本気じゃねぇてめえを倒しても何の意味もねえ。本気のてめえを叩き潰して、その上で俺は完膚なきまでの１位を取る！」
「……許可を――」
取らねばならないし、そんな時間はないだろう。そう言おうとした。
「てめえがンなこと言うのくらいわかっとるわ！」
爆豪がサポートアイテム使用の申請書を机に叩きつける。
後は名前を書くだけの状態だ。
この為にわざわざ先生のところまで行って、直談判し、申請書をもらってきたのか。
その気遣いを１％でも他のことに使えればもう少しマシな性格だったろうに。
「……」
「さっさと名前書けや」
「……断る」
「書けや!!!」
「断る」
「書け!!!!」

「断る」
「書かなきゃ殺す!!!」
「断る」
「ンでだ!!!てめえも半分野郎と同じで舐めプしてんのか!?」
胸ぐらを乱暴に掴まれ、無理やり立たされる。
苛立ちがほとんどだが、どこか焦っているような面持ちで爆豪は怒りを露わにしている。血管がはち切れそうな勢いである。
それに対し狼は相変わらず眉間に皺が寄った真顔。
例えるなら噴火寸前の活火山と、凪いだ海面だろうか。
「……舐めプとは、なんだ」
「俺を舐めてんのかって聞いてんだよクソが!!」
「侮ってはおらぬ。……故に、無手でどう倒すべきか、考えていた」
「だァかァらァ!!それが舐めてるっつってんだよ!!!刀使えっつってんだろうが!!!」
「自ら勝機を手放すか」
「ンなもん鷲掴みにしてやるわクソが!!」
「ならば刀は「使えっつってんだろうが!!殺すぞ!!!」
なんなのだコイツは、暴君にも程がある。
見つけるや否や殺しにかかってくる葦名兵の方が幾分かマシだ。
同じく理不尽な目に遭う者を減らす為にも、一度へし折った方が世の為なのではないか？
「……断る」
「断んな!!」
相手にするのも面倒くさくなってきた、何より怖い。
なぜ胸ぐらを掴まれながら至近距離で怒鳴られなければいけないのだ。
「……放せ」
「てめえが書くまで放さねえ」
「このままでは、書けぬぞ」
驚くほど大きな舌打ちをしてから乱暴に突き放され、ようやく解放された。渋々ペンを手に取り、薄井狼と名前を綴る。

そして申請用紙に名前を書き終えた瞬間、爆豪にひったくられた。
「ケッ、無駄な手間取らせやがって」
狼は決心した。
必ず、かの邪智暴虐の爆豪を除かねばならぬと。

▼

帯を腰に巻き、刀を腰に差す。
抜刀し、手に馴染ませるように数回振った後、納刀。
体操着の左袖を捲り、義手を露出させる。
３つの忍具を順に切り替え、動作に不備がないか確認する。
確認を終え、試合場へと向かう。

《苛烈な攻めに鉄壁の守り！次は何を見せてくれるんだ!?もう影が薄いなんて言えないぜ!!ヒーロー科、薄井狼!!》
対（バーサス）
《意外とクレバーな危険物！果たして薄井に爆破は通じるのか!?私、気になります!!ヒーロー科、爆豪勝己!!》
《今回の試合、両者合意の上でサポートアイテムを装着しております！爆豪は手榴弾のような籠手を、薄井は刀と忍者道具を！今まで以上にアツイ戦いになりそうだぜ!!なぁイレイザー！》
《薄井の技量と爆豪のセンス、どっちが上回るかってとこか》
刀を抜き、構える。
腰を落とし右足に力を溜める。刀を持つ右手を後ろに引き絞り、狙いを定めるように左手を前に構える。
《レディ……ＳＴＡＲＴ!!》
開始の合図と共に狼が射られた矢の如く飛び出し、一瞬で距離を詰めながら突きを繰り出す。
「っぶねえなクソが！」
その突きは爆豪ではなく、その籠手に刺さる。寸前のところで反応したのは流石と言うべきか。普通は反射的に仰け反ったり振り払っ

たりするだろうに、籠手が刺さったのとは逆の手で下から振り上げるような爆破が迫る。

だが、こちらの突きもこれで終わるのなら忍びの技とは呼ばれない。爆豪を踏み台に、迫る爆破の勢いを利用し、籠手を破壊しながら高く飛び上がる。

奥義・大忍び刺し――義父が使った忍び技の奥義。敵を穿ち、再び舞い上がる様は、梟の狩りの如し。

空中で体を水平に捻り、落下しながら叩きつけるような蹴りを落とす。爆豪はそれを前方に爆破を放つことで距離を取り回避。

追撃する為、義手の重みで回転の勢いを生み出し、前方に跳びつつ瞬時に距離を詰め袈裟に斬る。

寄鷹斬り――葦名に仕える忍び、寄鷹衆の技である。

「ちょこまかとピョンピョン動きやがるなァ!!ウサギかテメェ!!」

刃引きしている為、斬れることはないが相当な痛みがあるはずだ。

爆豪はそれに耐え、上から右の大振りで爆破を繰り出す。

義手を鳴らし、忍具を手に取る。

義手と共に発注した新たな忍具、仕込み傘「金城鉄壁」――特殊な金属で作られた鉄扇を傘のように開き、爆破を防ぎながら腕を弾く。

傘を半ばまで閉じ鉄扇とする。刀と鉄扇を交差させるように放ち、斬る。

「イッ……テェなあ空気ヤロウ!!!」

またしても耐える爆豪。

服の下から僅かに血が滲み出ているのがわかる、あれが痛いで済むのか。

爆破の連打を撃ってくるが、こちらもダメージ覚悟で全て刀で弾く。

そして連打の最後に一際大きな爆破。

自分から距離を取っても意味がないと察したか、最大火力の爆破を地面に放ち爆風とそれに伴う瓦礫でこちらを吹き飛ばす。

空中で体勢を整え、着地。義手を鳴らし、忍具を仕込み傘から、仕込み槍に切り替える。

槍の内部に隠された柄を伸ばしながら、爆豪を目掛けて突く。
「チッ。見え見えだわ、当たるかよ!!」
流石に躱されるが、狙いは突くことにあらず。
手首を返し、槍の先端部に取り付けられた〝返し〟を開く。返しを爆豪に引っ掛け、槍を格納しながら爆豪を引き寄せる。
「ッ!クソ無駄なんだよ!!」
爆豪は引き寄せられながらも掌をこちらに向け爆破する。忍具を収納する隙をつかれ爆破を喰らうが、そのまま体を捻り、舞うように連撃を繰り出す。
奥義・浮舟渡り――流れるような動きと手数で敵を圧倒する、葦名流の剣技。外から来た者が伝えた技、ゆえに葦名流の異端にあたる。
《薄井の猛攻が止まらなぁーい!!速い!硬い!そして器用!さらに流麗な剣技!!今まで並外れたタフネスを見せつけてきた爆豪がついに大きくよろめいたァー!!!》
左肩で体当たりを喰らわせ、上体を反らせる。
ガラ空きの胴体、鳩尾に右の肘鉄を抉り込ませる。
外傷ではなく、体の内へ衝撃を伝える為の肘打ち。
常闇との戦いにて会得した、殺さぬ忍殺。
「……ッフー、ガアァ……ク、ソが……」
両膝を折り、口から吐き出した吐瀉物で床を汚しながらも、未だ爆豪の闘志は潰えていない。
震える体に鞭を打って、爆豪が立ち上がる。
「……立つか。ならば、幾度でも沈めるまで」
この後爆豪が仕掛けてくるとすれば、おそらく一撃必殺の大技。
出血と、おそらく肋骨の骨折。長期戦はできまい。
「ッ……ハァ……ハァ……殺すッ」
爆豪が両掌を下に向け爆風で上に飛び上がるが、それより先に跳び上がる。地に足を着けぬは、忍びの戦う技。
中空にて隙を晒す者を討ち落とす、対空忍殺。
《爆豪まだ折れない!!不屈の精神で立ち上がり、飛び上がが――》
飛びかかった狼は爆豪の胸ぐらを掴み爆豪を下に押しのけ、半回転

しながら鳩尾にカカトを抉り込ませる。
《――れずに落ちたーッ！爆豪、今度こそダウンか!!?》
受け身を取る素振りすら見せず、爆豪は落下した。
音もなく着地した狼は、警戒を解かず残心を続ける。同じ轍は踏まぬ。
「……ま、だだ……まだ、テメェ、の……本気――」
再び立ち上がる爆豪。
果て無き執念と、執着……それはどこから来る。
何故、そこまで己を鼓舞できる。何がそこまでお前を動かす。
何が――
「……何がそこまで、お前を支える」
かつての宿敵……彼もまた、今の自分と同じ疑問を、狼に抱いていた。
今ならば、その心持ちが理解できる気がした。
「俺は……オール、マイト……を――」
半ばまで立ち上がった爆豪だが、力尽き地に伏せる。
主審のミッドナイトが近づき、爆豪の様子を確認した。
「爆豪くん気絶！薄井くんの勝利!!」
《決勝は轟　対　薄井に決定だあ!!》
救護ロボットに運ばれていく爆豪を見送りつつ、納刀。
……試合には勝利したが、心にモヤが残る。
未だ為すべきことが確と定まらない己と、目標しか見えていない爆豪――考えは上手く纏まらない。
小休憩の後、決勝戦が待っている。
相手は氷結に加え炎熱の個性まで使うようになった轟。
勝ち目は薄いが、瀬呂のように観客席からドンマイコールされるのだけは避けたい。
まずは……忍具をケースに戻さなければ。

Ｎｏ．１６　最終種目、決勝戦

試合開始まであと１０分ほど。ギリギリまで観客席に座っていては示しがつかないので、選手の控室に入る。

「む……」

中に入ると轟が座りながら何か考え込んでいた。

どうやら、入る部屋を間違えてしまったようだ。

「……薄井か」

「……すまぬ。部屋を間違えたようだ」

部屋を出て行こうとするが、轟に声をかけられて足を止める。

「なぁ……体育祭の開会式の前に、お前にリベンジするって言ったよな」

「……あぁ」

「戦闘訓練でお前にボコボコにされたとき、俺の決意を――左側を使わないで勝つって誓いを、お前に踏みにじられた気がして……お前を倒そうって、躍起になってた」

「……そうか」

「だけど……抱えてたもん緑谷にブッ壊されて、お前を倒したいのかどうかも、わからなくなっちまった」

「……それで、どうしたいのだ」

「わからねえ。ただ、お前には言っといた方がいい気がした。……悪い、時間取らせたな」

「……為すべきことを、見失うな。轟」

己も、為すべきことを定めねばならない。

そうしなければ……いつか、限界が来て、心折れてしまうだろう。

「……それって、どういう――」

それだけ伝え、轟の控室を後にする。

結局轟がなぜ話しかけてきたのか、人心の機微に疎い狼に察することはできなかった。だが、轟に新しく大きな迷いが生じていたのはわかった。

迷えば敗れる、故に為すべきことを見据えねばならない。

今の彼には、きっとそれが必要なのだ。

▼

会場に立ち、試合が始まるのを待つ。

《いよいよラスト！雄英1年の頂点がここで決まる!!》

プレゼントマイクのアナウンスに会場が沸き立つ。

片や炎と氷を操る超火力の強個性、片や己の技量のみで上り詰めた凡個性。

《決勝戦、轟　対　薄井!!今!!》

力と技、対極に位置するかのような2人。

個性が勝つのか、技術が勝るのか。

《ＳＴＡＲＴ!!!!!》

開始とともに氷結が来ると予想し、開始の合図に合わせ轟に跳びかかりながら、仕留めるつもりで回し蹴りを放つ。

しかし予想が外れた。

轟は氷結による速攻ではなく、左腕を右手で支え両手で回し蹴りを防御、そのまま右手で狼の足に触れ、氷結の個性を走らせる。

「範囲攻撃しかできないわけじゃねえ」

狼は即座に逆の足で轟を蹴りつけ、距離を取る。

そして距離を取れば、地面から氷結が迫る。

右に低く跳ぶことでそれを避け、そのまま轟を中心に反時計回りにかける。

轟は弧を描くように右腕を振り、狼を追う様に氷結を走らせる。

外側に逃れ跳躍し、氷塊の上に立つとそのまま高く跳躍する。

最初の蹴りは威力が足りなかったのだ。足の硬さは即座には増さぬし体重も増えぬ、ならば、速さを。

地面と水平に体を捻り、2回ほど回転を加えながら蹴りを叩き落とす。

轟は自身を覆う様に氷の壁を作り防御するが、それすらも打ち砕く。

「ウソだろ……今の砕くのかよ」

轟に蹴りは届かなかったが、隙はできた。

《蹴りで氷壁を砕きやがったあーっ!!どんな足してんだアイツ!?》

《体格に恵まれてないから、ああでもしないと威力出ないんだろ。あんな事してよく足が保つよ》

衝撃で痺れる足を無理やり動かし、轟に肉薄する。

咄嗟に振われた轟の右手首を掴み、体捌きを巧みに回り込み宙へ浮かせる様に投げ、腕を引きながら地に叩きつける。

叩きつけられた轟の体が一度バウンドするほどの威力、内臓へ激しい衝撃が走ったことだろう。

多くのプレイヤーが苦しめられた、一心とエマの当たり判定ブラックホールの掴み、投げ技である。

肺から強制的に空気が押し出される音の後、轟は仰向けに倒れたまま動かない。

残心を続けたまま、審判の判定を待つ。

主審のミッドナイトが手を挙げ、宣言する。

「轟くん気絶、勝者は――」

危

その場から後方に大きく跳躍し、距離を取る。

轟の左半身から、地面を這う様に激しく炎が立ち上り、上空に伸びていく。

咳き込みながら、フラフラとしながらも轟が立ち上がり、口を開く。

「わりい……控室で言ったこと、撤回する。やっぱ、お前に勝ちてえ……!だから、やるべきこと、ちゃんと見つけるよ。そのために、まず一歩踏み出す」

炎がさらに勢いを増す。
放たれる熱は肌を焼くように熱く、吸い込む空気は熱気を帯び、息苦しく感じる。こちらを見据え、不敵に笑う轟と目が合う。
「……来い」
「言われなくてもッ！」
轟が左の拳を振るうのに合わせ、炎が塊となって迫り来る。
迫る炎に直進し、横に避ける。さらに斜め前に跳び上がり、床から迫る氷結を避ける。
着地を狙った炎をギリギリで前に回避し、低い体勢から跳ね上がるように横蹴りを入れる。
轟は一瞬よろめくが即座に氷結を使い、こちらを引き剥がす。
細かく跳躍し、炎熱と氷結を避けながら、隙を見て蹴りを放つ。これを繰り返すが、決定的な一撃を入れられない。
体幹を削ろうにも一瞬しか近寄る隙がなければすぐに回復されてしまう、体重の軽さ故に普通の蹴りでは決定打とはなり得ない。
「左側使っても、一筋縄じゃいかねえよなッ」
再び接近するも、左腕を振るわれ炎が迫る。身を捻りながら跳躍してそれをなんとか回避、垂直に回転しながら轟に踵を落とす。
次に繋げにくいが、こちらの方が威力は上だ。
腕で防御されるが、苦悶を噛み殺す様子の顔が見える。ダメージは入った。蹴ったのとは逆の足で轟を踏み台に、後方へ逃れる。
再び接近する——が、こちらが一歩踏み出すのに合わせ、轟は左手を横に振り、炎を放つ。
視界を塞がれてからの氷結が、一番不味い。
火傷覚悟で無理やり炎を突破し、轟の居た位置に掌底を打つ。
だが、違和感を感じた。妙に硬く、砕けやすい——
「氷……ッ！」
氷で作られた身代わりに、攻撃を打っていた。
策にはめられた——
危

足元から氷結が走り、迫り上がる。跳ぶことで避けるが、氷に押し上げられ中空にて隙を晒してしまう。
轟が炎を左手に溜めているのが見えた。
「ありがとな……薄井」
そしてそれが解き放たれ、一瞬で氷が溶け、水になり、水蒸気へと変わる。
滞空している狼は、それに伴う爆風に耐えること叶わず、大きく吹き飛ばされた。
飛ばされつつも、体勢を整え軽やかに着地する。
しかし――
「薄井くん場外！よって――轟くんの勝ち!!」
狼が着地したのは観客席側。試合場は遥かに遠い。
主審のミッドナイトがそう宣言すると、会場は今まで以上の歓声に包まれた。
《以上で全ての競技が終了!!今年度雄英体育祭1年の部、優勝はA組！轟焦凍!!!》

▼

その後の表彰式ではミッドナイト進行のもと、オールマイトによるメダル授与が行われた。
爆豪と同率で3位の飯田は家の事情で早退となったそうだ。
爆豪は大人しくメダルを首にかけられていたが、その顔は苦虫をすり潰して煮込んで凝縮したものを一気飲みしたかのように酷く不愉快そうにしていた。表情筋がとても豊かなのだろう。
銀色のメダルをもらう際、オールマイトには「経験を積めばもっと強くなる」と言われた。やはりオールマイト程の実力者となると、実戦経験の不足は見えてしまうらしい。
轟は以前と比べ、つきものが落ちたような顔をしていたが、それでもまだ清算しなければならないものがあるらしい。自分が吹っ切れ

ただけではダメなようだ。
メダルの授与が終わり、体育祭は終わった。
帰りのＨＲで明日と明後日は休校、休み明けにプロからの指名が発表されるようだ。しっかり休んでおけと御達しを受けＨＲは終わり、解散となった。全員体育祭の後で疲れているのか、早々に教室には体育祭を振り返っていた狼以外の者がいなくなっていた。
ＵＳＪ襲撃事件に続き、２度目の実戦。殆ど無手だったとはいえ、いい経験になったことは間違いない。自己鍛錬だけでは得られぬ実戦の勘を、少し磨くことができた。
オールマイトの言う通り、今まではやはり実戦経験が足りなかったのだろう、どこか平和ボケしていたのだ。故に、片腕を失う失態を犯した。戦国の世を忍び駆け抜けた隻狼と比べれば、未だ己の牙は鈍に等しい。
……そろそろ帰ろう。
心中に息づくほどの類稀なる強者はいなかったが、仏に向き合い戦いを振り返れば、得るものもあるだろう。
「おーつかれー狼くん！まだ教室にいてよかったよ～」
走ってきたのだろうか、少し息を切らした葉隠が教室に戻ってきた。
「……どうかしたか、葉隠」
「ドーナツ!!」
袋を見せつけるように掲げ、満足げにそう言う葉隠。
「……どーなつ？」
「奢るって言ったからね、忘れたとは言わせないよ！」
そういえばそんなことを言われた気がしなくもないが、普通それは奢られる側の台詞だろう。そういう細かいことは彼女には関係ないのかもしれない。
「……あぁ」
「はい、あーん」
葉隠は袋から球状のドーナツをひとつ取り出し、芦戸と同じように口元へ運んでくる。芦戸のときもそうだったが、普通に渡してくれれ

ばそれでいいのに何故食べさせようとしてくるのだ。身長が低いから子供扱いされているのだろうか。

「あーん！」

手で受け取ろうかとも考えたが、葉隠からは何がなんでも食べさせようという凄みを感じる……

大人しく口を開け、与えられたドーナツを食む。

そこでガラッと音を立てながら教室の扉が開いた。

「お、まだ誰か居てよかった。忘れ物しちゃ、って……さ――――」

やって来た人物、耳郎はこちらを見るや否や顔を赤く染め、教室の扉を勢いよく閉めるとそのまま走り去っていった。

「ご、ごゆっくりぃ!!」

「待って！待って響香ちゃん!?違う、違うからあ!!」

それを追うように葉隠も走っていってしまう。

教室に残されたのは、もさもさと口を動かす狼とドーナツが入った袋。どうしたものかと考えるが、数瞬後には口の中の物に意識が取られる。

「旨い……！」

旨い。揚げてあるため油っこいのかと思ったが、まぶされた砂糖と油が口の中で混ざり、なんとも言えない中毒的な甘さを生み出している。外はカリッとしているが中身はフワフワとして柔く、食感にも飽きが来ない。おはぎの優しい甘さとはまた違った、暴力的な甘さ。

これが洋菓子。これが、ドーナツ……

残された、ドーナツの入った袋を見遣る。

「……」

葉隠は行ってしまったし、次の学校は2日後だ。

このまま置いておいて食物を粗末にしては、きっと神罰が下る。奢ると言っていたし、貰っていっても構わないだろう。

その後しばらく待っても葉隠は戻って来ず、ドーナツが入った袋を片手に帰路についた。

Ｎｏ．１７　ヒーローネーム

朝、教室に入ると皆がいつも以上にざわついていた。
聞き耳を立てると、登校中に雄英体育祭を見ていた人からたくさん声をかけられたりして街中で注目の的になっていたのだと判明した。
「薄井も凄かったんじゃね？２位だったし」
葉隠や芦戸、切島、蛙吹と話していた瀬呂がそう言う。
彼は小学生から顔を見るやドンマイコールされたらしい。ドンマイ。
「……いや、なかった」
「えぇ!?なんで!!?」
アタシですら声かけられたのに、と芦戸が驚く。
「髪型かしら。薄井ちゃん体育祭のときは結ってたけど、普段は下ろしてるもの」
口元に人差し指を当てて考えながら、蛙吹がつぶやく。
「あー、たしかに。狼くん印象ガラッと変わるもんね」
背後に回った葉隠に前髪を勝手にあげられる。視界がかなり開けた。
「薄井は髪上げてる方が似合ってると思うぜ、そっちのが漢らしい！」
切島は親指を立てサムズアップしながら言う、切島の逆立った髪型はそういう意図があるのだろうか。
「下げてる方が可愛くてイイと思うよーアタシは」
「前髪邪魔じゃないの？」
葉隠が手を離し、再び視界が狭まる。
「……いや――」
「へぇー、邪魔そうなもんだけどな」
瀬呂は自分の前髪を触りつつそう言う。彼の前髪は短めだ。
「――慣れた」
「「いや邪魔なんかい!!」」
芦戸と切島にツッコミを入れられる。
それと同時にチャイムが鳴った。皆いそいそと自分の席に着きは

じめ、チャイムが鳴り終わると同時に相澤先生が教室に入ってきた。
全員が会話をピタッと止め、前を向く。
先生の短い挨拶にクラスが返事を返す。
相澤先生は包帯が取れ、ミイラマンではなくなっていた。
「さ、今日のヒーロー情報学はちょっと特別だぞ」
特別、と言う単語に警戒心を抱く生徒が複数名。しかし次の言葉でそれは霧散した。
「〝コードネーム〟ヒーロー名の考案だ」
胸ふくらむヤツきたあああ!!とクラスが沸き立つが相澤先生がひと睨みすると一瞬でシンとなる。この流れにももう慣れたものだ。
相澤先生が説明を始める。
ヒーローネームの考案は、体育祭を見たプロからの指名に関係してくるようだ。だが指名が本格化するのは即戦力となる2、3年生から。今回の指名は将来性への興味であり、今後は一方的にキャンセルされることもある。つまり受けた指名がそのまま自身へのハードルになるのだ。
大人は勝手だ!と峰田が不満を漏らすのもわからなくはない。
「で、指名の集計結果がこうだ」
轟は4000強、爆豪は2000後半、飯田は300強——というように、基本的には順位に沿って指名数が多くなっている。
「え、薄井2位なのに微妙に少なくね?」
皆が抱いたであろう疑問を上鳴が代弁する。
薄井の指名数は2位という順位に比べ、指名数は2000にも届かない。
3位の爆豪よりも圧倒的に少ないのだ。
「まだ説明中。例年はもっとバラけるんだが……3人に偏った。薄井に関しては対人戦闘に特化した印象を持たれたんだろ、災害救助系は基本無かった。それにあの立ち回りで指名寄越す2流3流はいないよ」
相当な馬鹿じゃない限りね。と付け足し説明を続ける。
「これを踏まえ……指名の有無に関係なく、職場体験ってのに行って

もらう」
　職場体験でヒーロー活動をする故に、ヒーローネームが必要だったようだ。
「まぁ仮ではあるが、適当なもんは――」
「付けたら地獄を見ちゃうよ!!」
　と言いながら教室にミッドナイトがやってくる。
　この時の名前がそのまま認知され、プロになっているヒーローは多いらしい。
　つまりこの時にふざけた名前をつけて、そのまま不本意な名前でプロになったヒーローもいるから、慎重に考えろよ、と言われている。
　相澤先生が言うには、自分はその辺りのセンスがないので代わりに見てもらう、だそうだ。相澤先生のヒーローネーム「イレイザーヘッド」はなかなかセンスが光る名前だと思うのだが、誰かにつけてもらったのだろうか。
「将来自分がどうなるのか。名前をつけることでイメージが固まり、そこに近づいていく。それが〝名は体を表す〟ってことだ」
　それだけ言うと相澤先生はいつもの黄色い寝袋に入り、動かなくなる。
　フリップボードとペンが配られる。
　殆どがスラスラと書き進めるが、筆が進まない者も数人。
　狼は前者だ。彼の目指す姿は、己の記憶の中にある忍び。
　同一人物だが、同一人物ではない、記憶の中にあるもう一人の自分。
「じゃ、そろそろ出来た人から発表してね！」
　発表形式か。人前で発表できないヒーローネームなど言語道断、恥ずかしがらず名乗りを上げろということだろう。
　名乗りと言えば、馬に跨り十文字槍を振るった強者を思い出す。
　皆がそれぞれ思い思いのヒーローネームを発表し、ミッドナイトに手直しされたり、却下されたり、褒められたりしながら授業は進んでいく。
　頃合いを見計らい、教壇の前に立つ。
「……隻狼（せきろう）。そう、名乗ります」

隻狼（SEKIRO）と書いたフリップを立て、名乗る。
「隻腕の狼……！」
常闇がキラキラした目でボソッと呟く。
そういえば、体育祭の試合中に常闇に隻腕の狼と呼ばれた。となると常闇が名付け親のような立ち位置になるのか？
「隻腕なのと、名前の狼を合わせて隻狼ね。教師の心を抉りに来てること以外はいい名前だと思うわよ！」
自虐に思われてしまったか。
確かに名付けられるならまだしも、自ら名乗るとなると事情は変わってくるかもしれない。
「……戒めの意を込め、名乗りたいと存じます」
「そう……わかったわ、ならばよし!!」
その後も順調に発表は進んでいき、ダメ出しされていた爆豪以外は、全員仮だがヒーローネームが決まった。
その中でも気になったのは数人。
まず緑谷。緑谷は蔑称だった「デク」という名前をヒーローネームにしたようだ。麗日に頑張れって感じのデク、と言われたのが相当嬉しかったのだろうか。
そして飯田。思い詰めたような顔をしながら最後まで名前を書くのを躊躇っており、最終的には自分の名前にしていた。何かあったのだろうか。
最後に爆豪。戦闘においては類稀なセンスを発揮するが爆殺王、爆殺卿とネーミングセンスは小学生のようだった。切島が言っていた、爆発さん太郎の方が親しみやすくていい気がする。

▼

放課後、狼は先生から渡された２０００に近いヒーロー事務所の名前が纏められた紙束と睨めっこしていた。
決めようにも、わからぬ。
緑谷から散々ヒーロー話は聞かされていたので、有名どころであれ

ばなんとなくどのようなヒーローなのかわかるのだが、どれもいまいちピンと来ない。調べようにもスマートフォンは持っていない。

これは……緑谷案件だ。

「緑谷……」

「あ、薄井くん。どうかしたの？」

「……お前の力を借りたい」

指名先が纏められた紙束を緑谷に渡す。

頼るのも申し訳ないが、適材適所。変な事務所に行くよりか信頼できる友人に選んでもらう方がいいだろう。

「うん。ありがとう、見させてもらうね」

「あぁ」

緑谷の隣の席に勝手に座らせてもらい、紙束を捲るのを眺めて待つ。

ページを捲るごとに緑谷は表情をコロコロ変えているが、そんなに見ていて楽しいものなのだろうか。

緑谷が読み終わるのを待っている間に、後ろから芦戸と葉隠がやってきて髪をイジリ始めた。

「す、すごいよ薄井くん!!燃焼系ヒーロー「エンデヴァー」、ウィングヒーロー「ホークス」、ファイバーヒーロー「ベストジーニスト」、忍者ヒーロー「エッジショット」、ラビットヒーロー「ミルコ」、具足ヒーロー「ヨロイムシャ」他にもたくさん……トップヒーローが勢揃いだ……!!!」

「……どれが、いいと思う」

「正直どのヒーローを選んでも実りある職場体験になると思うけど……実力で言ったらエンデヴァーは外せないけど薄井くんのどこにでも行ける機動力を考えれば速すぎる男とも呼ばれるホークスも捨てがたいしベストジーニストに市民への振る舞い方とか学ぶのもいいと思うし薄井くんと同系統の路線を行く忍者ヒーローエッジショットの元で立ち振る舞い方とか学ぶのもいいと思うしミルコは蹴り技主体の近接戦闘を得意とするヒーローだから今後も蹴りが主体の近接戦闘をするならそれを学ぶのにミルコの右に出る者はいな

いしヨロイムシャの元でより堅牢な立ち回りを学ぶのもいいと思うしなんて贅沢な悩みなんだ……！」

「狼くん、緑谷くんのアレ聞き取れてるの？」

「あぁ……問題ない」

慣れと、忍びの耳にかかれば聞き取れないことはない。

慣れが占める割合は大きいが。

「芸だね、もはや」

その後、緑谷はオールマイトに呼ばれるまで１０分以上ずっとこの調子で真剣に考えてくれていた。今度、なにか礼をしなければならない。

「わわ、私が独特の姿勢で来たーッ!!……緑谷少年、いる？」

「オールマイト！あ、ご、ごめん薄井くん、つい熱中しちゃってて――って誰!?お、女の子!!?」

「……俺だ」

緑谷が紙束を読む間、抵抗するのも面倒なので葉隠と芦戸、途中参戦した蛙吹にされるがままにしていたら、こうなっていた。

後頭部はシニヨンの周りに器用に三つ編みが回り込むように結われており、前髪は中央だけ上げられ左右に垂れた髪が骨格を隠し、更にはマスクまでつけられていた。

「ほ、ホントだ、その声と眉間のシワは薄井くんだ……っと、ごめん、呼ばれてるから、もう行くね！」

「あぁ、助かった」

緑谷はいそいそと荷物をまとめ、オールマイトの後について行った。

問題は一つ解決したが、次の問題に向き合わねばならない。

「……おい」

「薄井！ピース、ピースして！顔の横でちっちゃくピース！」

スマホ片手に実際にポーズをとって見せる芦戸。

「君かわいいね～！モデルとかやってみない？」

左右をちょこまかと動きながら、よくわからない文言を言う葉隠。

「ケロケロ……」

どこか満足げな蛙吹。
この悪ふざけをどうにかしなければならない。
いや、悪ふざけは別にいいのだが、髪を結うところを見れなかった為、髪の解き方がわからないのだ。
このまま家に帰るわけにもいかないだろう。
「……髪を解け」
「1枚だけ、1枚だけだから!!こんな面白いこと拡散せずにいられないっ！」
「ほら狼くん、眉間にシワ寄せてないで笑顔だよ、笑顔！」
「ごめんなさい薄井ちゃん。妹が髪を切ってから結う機会が減っちゃったから、興が乗っちゃったわ」
……写真を撮らせて、さっさと終わらせた方がいいのかもしれない。
きっと、諦めも時には大事なのだ。
「……好きにしろ」
この後、1枚と言いつつ10枚ほど写真を撮られ、最後に全員写るように写真を撮られた後にようやく解放された。
体育祭よりも、疲れたかもしれない……。

Ｎｏ．１８　職場体験に行こう①

イジリにイジられた日から1週間、ついに職場体験当日。
新幹線が通る都市部の駅に、雄英高校１年Ａ組は集まっていた。
相澤先生による注意事項の最終確認が終わると、全員各々の職場体験先へと向かう中、緑谷は飯田に心配そうな顔をしながら話しかけていた。
「飯田くん……本当にどうしようもなくなったら、言ってね。友達だろ」
この前緑谷から聞いたところ、飯田の兄であるプロヒーローが「ヒーロー殺し」と呼ばれる敵（ヴィラン）と交戦し、その結果ヒーローとして再起不能になってしまったらしい。
「ああ」
飯田はそれだけ言うと、背を向けてさっさと歩いて行く。
目を見た瞬間に、飯田が何をしようとしているかわかった。
少なくともこれからヒーローについて学びに行く面持ちではない、おそらく兄の敵討ち、復讐だろう。
……復讐に意味が無いとは言えない。時には復讐を果たすことが必要だということも、記憶の中で体験している。
復讐を果たした人間が、とやかく言えることではない。
「薄井、そろそろ行かねば新幹線に遅れてしまう」
『イソゲーッ』
同じ事務所へ職場体験に行く常闇と黒影（ダークシャドウ）に声をかけられる。
Ｎｏ．３ヒーロー、速すぎる男「ホークス」。１８歳で事務所を設立し、その年の下半期には、事件解決数・社会貢献度・国民の支持率を元に順位が決められるヒーロービルボードチャートでトップ１０に入り込んだ人物。彼が体育祭指名に参加したのは今回が初らしい。
事務所は九州に構えられている為、新幹線での移動だ。
「ホークス……どのような人物なのだろうな」
新幹線の車内、隣の座席に座っている常闇に話しかけられる。
「……胡散臭い」

「うさっ……確かに、未だ底の見えない人物ではあるが……もう少し言い方があるだろう」

体験先の事務所を決めるにあたり、緑谷に各ヒーローの動画を見せてもらったことがある。そのときのホークスの印象は、とても胡散臭かったのだ。飄々とした態度の、ちょっと変わった今時の若者と言えばそれまでだが……何か違和感を感じたのだ。実際に会えば、さらに何かわかるかもしれない。

「……速い」

敵（ヴィラン）と交戦している場面も動画で見させてもらったが、全てが速かった。現場到着までの時間、制圧までの時間、そもそもの移動速度が段違いに速い。

仙峯寺の槍術士（ゲルググ）の高速移動を思い出す速さであった。

「うむ、まさに疾風迅雷。速さにおいて右に出る者はいないだろうな。……さっきから気になっていたんだが、荷物とは別に抱えているそれは、何だ？」

風呂敷に包まれた、膝に収まるサイズの何かを指差して、常闇がそう言う。1週間九州に滞在するとなれば、欠かせないものである。

「……ミニ鬼仏だ」

「ミニ、鬼仏……!?」

なんだそのカッコいい名前は、とでも言いたげな顔で常闇が目をキラッキラさせながら風呂敷を見つめている。

中身は、前に彫った本物よりも小さい大きさの鬼仏である。

風呂敷を開けて、中身を常闇に見せる。

「……対座し、己の内と向き合う為にある」

「……まるで修羅の如き面相、これを仏と銘打つとは」

「修羅ではない。……鬼仏だ」

語気を強め訂正する。

これは、修羅ではない。そうあってはならないのだ。

「す、すまない。しかし、見たこともない品だ、一体どこで？」

「……自ら、彫ったのだ」
「自作……!!その手があったか……」
常闇から大きな誤解をされているような気がしなくもないが……まぁ、いいだろう。交友関係が広がるのは悪いことではないのだから。
それにしても……何故、ホークスの元に行けと学校から推薦されたのか、理由が未だよくわからぬ。

▼

「ホークス……ですか」
職場体験の希望体験先の提出日、朝のＨＲ後に相澤先生から職員室に呼び出され、職場体験はホークス事務所へ行って欲しいと言われていた。
「あぁ。希望を出してもらった手前悪いんだが、頼めるか」
「……理由を、お聞かせ願えますか」
「すまんが俺もわからん。ホークスから指名が来るのは初だから、なるべく生徒を送ってパイプを作っておきたい、と校長から言われたが……それなら初日にでも伝えられるはずだ。今になって言ってきた理由がわからん」
一応、ラビットヒーロー「ミルコ」で希望を出していたが、そこまで拘りがあるわけではないし、ワガママを行って先生に手間をかけるのも申し訳ないか。
「……承知しました」

▲

相澤先生も納得していない様子だったが、常闇も同じような経緯でホークス事務所に呼ばれたのだろうか。
新幹線から下車し、見慣れぬ九州の街を歩きながら、そんなことを考える。

「着いたな。ここが、ホークス事務所……」
常闇が上を見上げてそう言う。
立派なビルだ。駅から程近く、立地もよい。２０代前半でこれを所有しているのだから、その人気と実力は本物なのだろう。
常闇に続き、中へ入る。入り口で受付を済ませ、エレベーターへ乗り上階へと向かう。
「ついにＮｏ．３ヒーローと対面か……少々緊張するな」
「……」
視界の端に、何かが過った気がした。
聴覚と触感に個性を発動させるが、特に違和感は感じられない。
個性を発動したまま、ヒーロー事務所でこんなことをする必要はないと思うが、ねんのため警戒態勢を維持する。
エレベーターを降り、常闇が扉をノックし、失礼しますと声をかけてから扉を開ける。
「雄英高校より参りました、ヒーロー科１年Ａ組の常闇踏影です」
「同じく……薄井と申します」
「やっと来たね、雄英生。ようこそ俺の事務所（ホークス）へ」
背中に大きな紅色の翼を持つ男がソファーに座ったまま、上半身だけこちらに向けてそう言った。この男が、ホークス……。
「早速だけどコスチュームに着替えてきてくれるかな。そろそろ午後のお仕事の時間だから」
ホークスがサイドキック――ヒーローのサポートをするヒーロー――に更衣室に案内するよう指示を出し、それに着いて行く。１５分後には昼休憩が終わり、その後に出動するようだ。
「到着してすぐに出動とはな。流石、速すぎる男ホークスと言ったところか」
「……そうだな」
忍び装束に着替え、刀を腰に差す。義手に忍具を仕込み、最後に髪を総髪に結う。
常闇は既に着替え終えていたようだ。漆黒のマントに身を包み、腕を組みながら壁に寄りかかっていた。

「……待たせたか」
「いや、構わない。では行こう、隻狼よ」
「あぁ……」
常闇と共に元の大部屋に戻る。
中にはホークスと、サイドキックが２人。
先程更衣室まで案内してくれた人物と、休憩から戻ってきたであろう人物。ホークスのような胡散臭さは感じない。
「戻ってきたね。んじゃまぁ……これから外でお仕事するわけだけど、職場体験だからって足並み揃えてたら被害が拡大、なんてこと許されないわけだ」
ホークスはそう言いながら窓枠に足をかけ、身を乗り出す。
「てなわけで、学生諸君は頑張って着いて来てね。お二人はいつも通りお願いします」
そして、そのまま飛び降りた。
「なっ……」
常闇は唖然としているが、あれがホークスの活動スタイルということだろう。空を飛べるのなら、高所から飛び降りた方が速い。
「それじゃ僕らも急ごうか――って君!?」
着いて来いというのなら、最速の男にどこまで追いつけるのか試してみるのも悪くない。
サイドキックが焦って制止の声を上げるが、ホークスと同じように窓から跳び出し、鉤縄を飛ばす。
一瞬こちらを見たホークスと目が合うが、一瞥くれるとすぐに前を向き、そのまま高速で飛んで行った。
地上を駆け抜け、時には鉤縄で空を跳びながら彼を追った。

その後もホークスの後を追い続けたが、終業時間まで追いつくことは叶わず、職場体験初日はただ後を追いかけるだけで終わってしまった。
サイドキックと共に後を追っていた常闇から聞くには、サイドキックはホークスの後始末係であり、彼が解決した事件や事故の事後処理

が主な業務。ホークスが速すぎて追いつけないうえに何でも1人で解決してしまう為、それが1番効率的な形らしい。
だが、それを語る常闇の表情は不服そのものであった。
そして2日目、3日目と、同じことの繰り返し。
常闇に加わりサイドキックから事件解決の事後処理を学んだりもしたがホークスから何か教わることは全くなかった。
そして3日目の夜、痺れを切らしたのか常闇はホークスに疑問をぶつけていた。何故自分は声をかけられたのかと。
それに対しホークスは至って普通に
「何でって、鳥仲間だから」
と答えた。
「……お巫山戯で?」
「いや、本音だよ。2割くらい。半分は君たちを襲った敵(ヴィラン)連合とかいうチンピラについて、1—Aの子から話を聞いときたくてね。てことで聞かせてくれる?まだ時間も早いし」
「……御意」
常闇がそう答える。
……殆ど気絶していた俺は関係ないだろうと、先に帰ろうとするがホークスに呼び止められた。
「あ、薄井くんの話も聞かせてよ。証言は多い方がいい」
「……承知」
「アッハハハ、君たち喋り方似てんね」
そうしてUSJ事件について、主に常闇が話し出す。
その表情は少々不満げで、どこか悔しそうなものだった。
そんな常闇に話しをさせるのは悪いが、自分は脳無という怪物に腕を捥がれたことくらいしか話すことがないのだ。
「——なるほどねぇ……んじゃ今日はもう休んでいいよ、ありがとね」
「……失礼します」
「あ、ちょい待ち。薄井くんちょっと残ってくれる?」
常闇と共に部屋を後にしようとするが、再び呼び止められる。
「では薄井、俺は先に行っているぞ」

「あぁ」
常闇と別れ、ソファで手招きしているホークスの方へと近づく。
ある程度近づいたところで鍵が閉まる音がした、ホークスが「剛翼」の個性で自らの羽根を操り、閉めたのだろう。
何故、そこまでする？
「まぁまぁ、座んなって。そこそこ良いソファーなんだからさ」
「いえ……お構いなく」
「そう？ツレないなぁ。そう警戒しなくていいよ、この部屋はちゃんと防音仕様だし、ひとつふたつ質問するだけだからさ」
「……」
「じゃあ単刀直入に聞くけど――」
ホークスの声色が変わり、部屋に緊張が走る。
ホークスは獲物を狩る鷹の如くこちらを見据え、声を発する。
無意識に、腰に差したままの刀の柄に手を伸ばしていた。
「キミ、人殺したことあるでしょ」

Ｎｏ．１９　職場体験に行こう②

「キミ、人殺したことあるでしょ」
ホークスは獲物を狩る鷹の如く鋭い眼光で、確信めいた口調でそう言ってのける。
質問と言っていたが、これでは尋問の間違いだ。
「……ありませぬ」
それに、かつての戦いの記憶を振り返りこそすれど、実際に人を殺めたことは無い。……脳無は死んで無いからノーカウントだ、そもそもあの黒い怪物は人かすら怪しい。
「……薄井狼くん、推定年齢２歳の頃に児童養護施設の前に捨てられているのを発見され、そのまま施設に引き取られる。４歳で高熱を出し５日ほど寝込んだ後に個性が発現。個性は常時発動の五感の強化、重ねて五感の一部を更に強化することもできるが、その他の五感が鈍くなる。体内に２種類の個性因子が見つかっているがもう一つは不明の為、こっちの個性届は出されていない。身長体重に好物、交友関係やその他諸々まで把握してるつもりだけど、まだ聞いてくかい」
「……必要ない」
施設の中でも一部の者しか知らないことまで把握されている。
個性因子のことまで把握されているのならば、公共機関に記録されていることは全部筒抜けと考えた方がいい。
遠回しに、お前のことは全部わかるから白状しろと、そう言われている。
「で、白状する気になった？」
「……ただの一人も、殺めておりませぬ」
「そっか～、じゃあ――無理やり聞くしかないかな」
ホークスが視界から消える。
即座に抜刀し、背後に刀を振るう。
キンッと高い金属音と共に腕に衝撃が伝わり、鍔迫り合いになる。
ホークスと視線が交差する。
「……それなりに速くしたつもりだけど、まだ足りないみたいだ」

お互いに後ろへ跳び、一度仕切り直す。
一本の長い羽根を手に持ち、構えるホークス。
ホークスの羽は硬く、鋭く、それでいてしなやかだ、日本刀とさほど変わらない。刃引きしてあるこちらの刀よりよっぽど凶悪な武器だ。
「さて、やろうか。薄井狼」
ホークスが高速で接近し、羽根を振るう。
「……何故、ここまでする」
それを刀で弾き、斬り返す。
「さてね。疑問より先に自分の心配した方がいいと思うけど」
後ろに飛ばれ避けられる。
避けられたと視認した数瞬後には間合いの内にホークスがいる。
一撃の重さはないが、あまりにも速い。
瞬きをすることすら憚られる。
迫る連撃を全て弾ききり、最後の上段からの振り下ろしを鉄傘で弾く。
傘を鉄扇へと変形させ刀と交差させるように放ち斬るが、これも避けられ、気づいた時には羽根の刃が迫っている。
紙一重でそれを前方に潜るように避け、納刀。
腰を沈め、振り向きざまに抜刀。
葦名流において疾く斬ることを一意に極めた二連撃の居合、奥義・葦名十文字。
回避こそされなかったが、背中の強靭な翼で防がれる。
「おっと、予想以上に重い。その痩躯のどこからそんな威力出てくるのさ」
口ではそう言うが、余裕綽々といった様子だ。
本来、葦名十文字は敵の防御を貫く。
だが、自分の十文字はホークスの翼を貫くには速さも精度も足りない。
再びホークスから高速の斬撃が迫る。
打ち込むだけでは、この男は倒せまい。

ならば、ひたすらに弾く。
斬り返し、さらに弾く。
退かれれば手裏剣と共に追い斬り、攻める。
敢えて隙を作り、攻撃を誘発させ、さらに弾く。
「まったく、気持ち悪い受け方だこと。攻めてるのはこっちだってのに、攻められてる気分だよッと！」

危

通常の斬撃よりも素早く羽根の切先が迫る。
突きに対して前に出るなど正気の沙汰ではない。
だが見切り、踏みつければ体幹に大きなダメージを与えられるのだ、前に出ないという選択肢は存在しない。
突きが当たる刹那を見切り、左足で羽根を踏みつける。
ついにホークスの体幹が崩れた。
ホークスの右肩を掴み、左足を軸に回転し右足のつま先を鳩尾に抉り込む。これで、ひとつ――

危

体が危機を脳へ訴える。
咄嗟に離れようとするが、足を取られ体勢が崩れる。
見遣ると足首は捕まれ、さらに紅い羽根が絡みついていた。
残った左足を刈られ、宙に身を晒したところに踵が落ちてくる。
逃れる術もなく、床と挟むように鳩尾に踵を抉り込まれた。
「ぐうぉっ……！」
肺の空気が全て押し出され、臓物がまろび出るような錯覚を覚える。
さりとて、そのまま痛みにのたうち回るわけにはいかない。
戦場で寝たままでいれば、待つのは死のみ。
痛みを堪え、横に転がりながら即座に立ち上がる。

骨は無事なようだ。まだ、戦える。
「なかなかやるじゃないか。学生相手だからって油断しすぎたかな、それとも君が予想より強かったのかな」
自らの鳩尾をさすりながらそう言うホークス。
ダメージがなかった訳ではないようだが、羽根を操り威力を軽減したのだろう。
「まぁどっちにしろ、俺のが速い」
そう言いながら、再び羽根を振るうホークス。
弾くが、斬撃が先程より速い。
さらに弾いた瞬間には他の角度から羽根が迫り来る。
右からの斬撃を弾いたかと思えば、裏から斬撃が迫る。それを弾けば前方の上空から、さらに右、次に左……。
次第に、弾き損ねる斬撃も増えてくる。
「ほらほら、動き悪くなってきたんじゃないの」
ホークスの連撃が止むのに合わせ、後ろに跳び手裏剣を2枚投擲する。
弾くだけではままならないのなら、こちらも攻めるしかない。
手裏剣に続け前方に距離を詰める為に寄鷹斬り。
手裏剣は手に持つ羽根に防がれ、寄鷹斬りは避けられる。
振り下ろされる羽根を逆袈裟に切り上げ弾き、後方に回りながら跳び、再び距離を取る。
寄鷹斬りは逆さにも回ることで、攻防一体の技となる。
迫り、襲い、飛び去る故に、寄鷹の名を冠するのだ。
だが、敵は最速の名を冠する鷹だ。
「遅い」
飛び去る隙を突かれ、接近される。
着地の瞬間を狩るつもりか。
回避、防御共に不可能。ならば迎え撃つしかない。
着地する直前に、体を横に捻り一閃。
ホークスが受け流した隙に左足を着地させ、それを軸に回転しさらに斬り、さらに体を捻り、右足で地を踏みしめる。

左肩越しにホークスの羽根が己を逆袈裟に斬らんとするのが見えた。
秘伝なれど、類稀なる強者を相手に出し惜しみは出来ぬ。
視線を切り、解放した回転の勢いで大きく下に薙ぐ。
空気を裂く程の剣圧で広範囲を斬りつけるそれは、狼を高く舞い上がらせる。さながら宙に散る桜を思わせる、舞いの如き剣技。
――秘伝・桜舞い――

紅い羽根が桜と共に宙に舞う。
真空波を伴った斬撃はホークスでさえも驚愕させ、見事彼の最高速度を引き出させた。
一瞬にも満たない間に空中で狼の背後を取る。
これが学生って冗談もいいとこだろ、と心の中で文句を言いながら、背中を強く蹴飛ばす。
狼は地面に衝突するが、またすぐさま立ち上がり刀を構える。
そろそろ頃合いかな。
刀を構える狼に対し、ホークスは羽根を手放し両手を上に上げる。
ファイティングポーズではなく、両掌を相手に向け、プラプラと手を振る。
「いやー参った参った、降参するよ」
ホークスの射殺すような視線が消え、雰囲気が元に戻る。
「……は？」
流石の狼も、わかりにくいがポカンとした表情をしている。
「ほら、周り見てよこれ。君の最後の大技で事務所はボロボロ」
床と壁は一直線状に削れ、ソファの角も綺麗に切り落とされている。幸い窓ガラスは無事なようだ。
「お高いソファも真っ二つ。学生相手にソファの一つも守れなきゃ、そりゃプロとして負けだよ」
「……弁償、せぬぞ」
「ははは、そんなこと言わないさ。経費で落とすから大丈夫」
少しホッとした顔を一瞬浮かべ、すぐに仏頂面に戻った狼が尋ね

る。まだ、刀は握ったままだ。
「……何故、仕掛けてきた」
「君が本当に人殺しかどうか確かめる為、もう一つは実力を知りたかったからかな」
狼の眉間の皺が深くなる。
この子は、どこかチグハグだ。
使う技は間違いなく人を殺める為のモノで、技量の高さはあらゆる死線を潜り抜けてきたかのよう、だが咄嗟の判断や反応が常にワンテンポ遅い。
技は使えるが実際に使ったことがなく、技量に経験がまるで追いついていない。心技体の、心だけが極端に育っていない。
そんな印象を受ける。
「疑って悪かったね。まぁ君がどこでその技を覚えたのかは気になるところだけど」
「……明かせぬ」
「じゃあ俺も本腰入れて調べちゃおうかな」
「……」
「まぁまぁ、そう怖い顔しないで。もしかして、お腹減ってイライラしてる？夕食くらいなら奢るよ、常闇くんも呼んで焼き鳥とかどう？……あ、今共食いって思ったりした？」
表情を崩し、ヘラヘラとした態度でホークスが言う。
「……お主は、何者だ」
「ん～、そうだな……あっ」
何か思いついたような顔を浮かべ
「明かせぬ……ってね。さ、時間取らせたね、もう行っていいよ」
手を払うように動かし、退室を促す。
狼は刀を納め、こちらに背を向けてドアへと歩いて行く。
「薄井くん。その力は、正しく使わなきゃダメだよ。さもないと怖～い大人が寄ってくる」
一瞬足を止め、そのまま狼は退室する。
こっち側になんて、来ない方がいいに決まっている。

それに――君がこっちで経験を積んだら、恐らく誰にも止められなくなる。それこそ、オールマイトくらいでないと止められないほどに。

「正しく在ってくれよ、薄井狼。そうでないと、君を殺さなきゃいけなくなる」

壊れかけたソファに腰をかけ、携帯を取り出す。

粗大ゴミの回収と床と壁の修理の手配、上司への報告。

彼のためにも、いい感じに言いくるめてお偉いさんの興味を潰してやらなきゃね。

Ｎｏ．２０　職場体験明け①

酔っ払いの怒号、喧嘩。それを見て笑う者、野次を飛ばす者。忙しなく働く大勢の女中の足音。

酒宴の喧騒が遠くからでも響いてくる。葦名城の屋根の上、何かを背負った影が密かに動いていた。

影は素早く屋根を伝い、音もなく地面に降りる。

「狼、もうよいぞ」

「はっ」

影がその場でしゃがむと、背から小さな人影が降り立った。

「すまない。皆よくしてくれるのだが、どうにも酒の席は慣れなくてな」

「いえ……御意のままに」

まだ幼く中性的な美貌を持ち、しかし強かな目を待つ少年。

片や腰に刀を差した、寡黙な壮年の男。

男は主の命に従い、今しがた宴から主を連れて逃げてきたところである。

「うーむ……そなた、酒は得意か？」

「任に差し障ります故、呑みませぬ」

「そうか…ならば、それが任であるのなら、どうじゃ？」

「それは……」

「フフッ、私が元服を迎えた折には、そなたに酌をして貰おうかのう」

「……はっ」

薄暗い夜道を歩きながら、言葉を交わす。

ふと、疾風が駆け抜けたとき、主が足を止めた。

「今日は、いやに風が強いな」

「お戻りになられますか」

「いいや、大丈夫じゃ。……む、あれは……弦一郎殿？こんな時間に何をしておられるのだろう」

谷に面した場所にあり、かつて桜の木があったと言われている城の裏手。通称、名残り墓。とある御仁の墓が二基建てられているが、誰

が名付け、何故そう名付けたのかはわからない。
そんな場所に葦名国の現当主、剣聖　葦名一心の孫にして葦名随一の弓の名手である葦名弦一郎その人が、刀を手に大きな渦雲を睨み、たった一人で佇んでいた。

――まだだ……巴の舞は、巴流はこんなものでは――

それは狼の耳にのみ聞こえた独り言。
ギッと歯を食いしばり、弦一郎は舞と見違えるかのような剣技で刀を振るう。そして舞の終わり、深く踏み込み回転しながら跳び上がり、刀で横一閃に薙ぎ払う。
「おぉ……なんと見事な」
剣の素人である狼の主の目にはそう映ったようだ。だが熟達の忍びである狼の目には、美しいがどこか不完全に映って見えた。
「――何奴だ、姿を見せよ」
影から己を見る存在に気付いた弦一郎は、刀を向けそう告げる。
「……御子と、その忍びか。覗き見とは、いい趣味をしている」
「す、すみませぬ、弦一郎殿。見事な剣舞だったもので、つい目が離せず」
狼は主の後方で片膝を着き、頭を下げて控える。
一国の当主の前、一介の忍びが対等であるはずはない。
「フッ……まぁいい。葦名の夜は冷える、早く戻るといい」
「はい。お気遣いありがとうございます、弦一郎殿。狼よ、そろそろ戻ろう」
「はっ」
立ち上がり、主の後に続こうとするも呼び止められる。
「……御子の忍びよ。主に従うだけが全てではない、時には忠言を呈するのが真の臣下だ。今少し、改めよ」
「はっ……御忠告、痛み入ります……」
弦一郎に深く頭を下げ、再び主の後に続きその場を後にした。
徐々に強くなる風音と、鳴り始めた遠雷を酒宴の騒がしさが打ち消

していたことに、今更気づいた。

▼

――――夢……いや、夢にしてはハッキリ覚えているし、出来すぎている。ならば、あれは……狼の、記憶か……？

いや、しかし、ＳＥＫＩＲＯであんな場面は無かったはずだ。……まさか、ゲームでは語られなかった、狼の過去とでも言うのか。一体、何がどうなっているのだ……

「……」

今は、一旦考えないようにしよう。

まだ職場体験は終わっていない、どうにかしてホークスから羽根を数枚引きちぎるのだ。

身支度をするため体を起こそうとするが、どうにも視界が定まらず、体もふらつく。

言うことを聞かない体に鞭を打ち、取り外していた義手に手を伸ばす。義手に触れたあたりで、視界が暗転した。

▼

それから目が覚めたのは3日後、職場体験最終日の朝だった。

幼少期のことを考えれば個性がなんらかの影響を体に及ぼしたとも考えられるが、仔細はわからぬ。

体の調子を確認するためにも体を動かそうとしたが、念のため休んでおけとホークスに同行する許可はされず、残ったサイドキックの1人と共に事務作業をして職場体験を終えた。

そしてその翌日、教室内ではクラスメイトが各々の職場体験での出来事を話し合っていたが、目に映る衝撃的な光景の前にその内容は右

から左へと流れていった。狼はさながら脳内に広がる宇宙から交信を受ける猫のような表情になっている。

「お前……」

「笑うな、ブッ殺すぞ……！」

いつものトゲトゲしく爆発したような髪型はどこへ行ったのか、見事に8：2に分けられていた。確か爆豪の職場体験先はベストジーニスト、彼はヒーロー活動の一環として凶暴な人間を矯正することにも力を入れていた筈だ。つまり、爆豪は髪型を矯正されてしまったようだ。性格までは矯正できなかったようだが。

「アッハッハッハッ!!」

「マジか！マジか爆豪!!」

狼より遅れてやってきた瀬呂と切島が爆豪を見つけるや否や腹を抱えて爆笑する。爆豪は相変わらず「ブッ殺すぞ」と怒りを露わにするが、あまりにも似合わない髪型に笑いを止められずさらに煽る2人。

そして爆豪の怒りが爆発すると共に髪も爆発して元のトゲトゲしい髪型に戻ってしまう。是非とも写真に収めておきたい珍事だった、携帯電話を持っていないのが悔やまれる。

「テメェはいつまで呆けてんだ！」

「……似合っていたぞ」

「喧嘩売ってんのかテメェはァ!!」

爆豪がこちらに迫って来ようというところで

「さぁそろそろ始業だ！席につきたまえ!!」

といつにも増して大きな飯田の声が響く。

爆豪は「チィッ！」と大きく舌打ちをして大人しく席に戻っていった。

▼

「ハイ私が来た」

いつもより軽い入りでヒーロー基礎学が始まる。

パターンが尽きたのだろうか、オールマイトの決め台詞も随分と安くなったものだ。

「職場体験直後ってことで、今回は遊びの要素を含めた救助訓練レースだ!!」

複雑に入り組んだ工業地帯をモチーフに作られた運動場γ、その中のどこかで救難信号を出したオールマイトの元に誰がいち早く辿り着くかの競走だという。

最初の組は緑谷、飯田、芦戸、瀬呂、尾白の5人。

一見、速さに秀でた個性の飯田が有利に思えるが、今回のように視界が悪く先が見えにくい空間では小回りが効きにくい直線的な速さはかえって邪魔になってしまう。

『ＳＴＡＲＴ!!』

とスピーカーから開始の合図が出される。

予想通り先ずは三次元的な動きに長けた瀬呂が先頭に躍り出た、このまま行けば1位は堅いだろう。だが、ここで予想外の人物が先頭へ躍り出る。

「おおおっ緑谷!?」

「何だその動きィ!?」

誰が叫んだか、何かするたびに骨折していた時とは違い、軽快な動きで屋根を跳ねるように、あるいは出っ張りを掴み自らを引っ張り上げるように空中を跳ねながら高速移動している。あの動きは、まるで……

「「あっ」」

何人かの声が重なった。

緑谷はパイプに着地するも足を滑らせ、そのまま真っ逆さまに落ちていったのだ。あのまま行けば1着は堅かっただろうに、惜しいものだ。

その後、巻き返そうとするも元々機動力に優れている4人が集まっていたため奮闘虚しく緑谷は最下位。1着は予想通り瀬呂であった。

Ｎｏ．２１　職場体験明け②

１組目のレースが終わり、講評を受けている間に２組目のグループがそれぞれ移動を始める。

狼は鉄塔の頂上に陣取り、レース開始の合図を待つ。２組目は蛙吹、麗日、常闇、上鳴、そして狼の５人。上鳴以外は全員機動力に優れたメンバーだ。高い脚力と強靭な長い舌、壁に張り付くことで足場を選ばない移動が可能な蛙吹。麗日は言わずもがな、吐き気というデメリットを考慮しつつ個性の使い所を見極めれば誰よりも速く飛んでいける。常闇には黒影（ダークシャドウ）がいるが今の天気は快晴、この面子では少し不利か。上鳴は……一所懸命に走るしかないだろう。

不意に運動場の内のスピーカーから『ＳＴＡＲＴ!!』とオールマイトの声が流れる。それと同時に事前に渡されていたデバイスからピピッという機械音が鳴り、画面に救難信号の位置が表示された。

鉄塔から飛び降り素早く信号の位置を確認すると鉤縄を飛ばし、鉄パイプを踏み台にまた鉤縄を飛ばす。障害物となる建物の上ではなく、あえてその下、パイプや鉄骨、鉄筋などが最も入り組んだ空間を駆ける。鉤縄を使うにはその方が都合が良いのだ。

わずかな隙間を通り抜け、細いパイプの上を走り、最短距離で目標地点まで向かう。モニターに映す為の撮影用ドローンは複雑な地形を高速移動する狼の後を追えず、上空から工業地帯を映すのみ。モニターを見る生徒たちは「あいつ何処いった?」状態だ。

スピードを落とすことなく、いつにも増して軽やかな動きで狼は駆け抜ける。以前ならば数多の障害物を前に臆し、建物の上を走っただろう。だが、今は違う。感覚が冴えている。何処を蹴り、掴み、鉤縄を飛ばせばいいのかがわかる。今まで以上に体が軽いのだ。

最後に鉤縄で上方に跳び上がり、片手片膝を着きながら目標地点に着地する。

「薄井少年!もう到着か、速いな!」

はいコレ、と「助けてくれてありがとう」と書かれたタスキをオールマイトから掛けられる。

「はっ……」
「職場体験はどうだったかな。何か得るものはあったかい？」
　職場体験でやったことといえば……ホークスの後を追いかけ、訳もわからず襲われ、高熱で倒れ、その後に夢（記憶）を見た。……幼少に個性を発現したときもそうだった。先程、感覚が冴えていたのも、やはり狼の記憶と個性の成長がセットになっているからだろうか。
　……オールマイトなら個性について詳しいだろうか。なんせナンバーワンヒーローだ、今まで様々な個性と相対してきたはずだ。
「……ひとつ、お聞きしたいことが」
「ん、なにかな？」
「……個性が、記憶を継承する。といった事を、聞いたことはありますか」
　オールマイトの表情が一瞬険しくなったような気がしたが、気のせいか……？
「……個性が記憶を――」
　オールマイトが口を開こうとしたところで、常闇と蛙吹がほぼ同時に到着する。僅差で常闇が2着だろうか。
「おっ、来たね！常闇少年、蛙吹少女！すまない薄井少年、話はまた今度でもいいかい？」
「…はい、お構いなく」
　個性については、まぁ別にいいだろう。急を要するわけではない。少しして、個性の使いすぎか顔色の悪い麗日が4着。面子がおかしい、俺だけ不利すぎる！と若干不満気な上鳴の順で到着した。くじ引きなので致し方ないだろう。全員が到着したことでオールマイトから簡単な講評を受け、期末テストに向けて準備を怠らないようにと伝えられた。
　次のレースが始まるのでさっさとモニターのある広間へと戻る。
　その途中で常闇が話しかけてきた。
「既に体調は万全、と言ったところか。薄井」
「あぁ……心配をかけた」
「病み上がりなのだから無茶しちゃダメよ、薄井ちゃん。熱で3日も

寝込むなんて普通じゃないわ」
「グループチャットで連絡来たときはビックリしたよ。しかもデクくん達がヒーロー殺しに襲われて入院した、って連絡の翌日にだもん」
「ヒーロー殺し……」
「緑谷と飯田と轟が職場体験中に襲われたんだってよ。んで、エンデヴァーが捕まえた、ってニュースでやってた」

飯田の兄を襲ったという、あのヒーロー殺しか。
……何故、甲府に職場体験に行った緑谷が襲われたのだ、わからん。
「……」
しかし、職場体験は学校からの話を断ってでもエンデヴァー事務所を選ぶべきだったろうか。そうすればヒーロー殺しとの戦闘に加勢できた筈だ。もしその場に自分がいれば、緑谷たちが怪我を負うこともなかったかもしれない。狼は眉間に皺を寄せ、低く唸る。
皆同じ気持ちがあるのだろう、その後は特に会話もなく観戦スペースに戻り「なんでお前らお通夜ムードなの?」とツッコまれた。

▼

授業は終わり教室へ戻ろうというとき、緑谷の姿だけが見当たらなかった。どこへ行ったのかと周囲を見回すと一人だけでそそくさと何処かへ向かっていた。授業はさっきのヒーロー基礎学で最後、少々早めに授業が終わったとはいえ、まだホームルームが残っている。遅れれば相澤先生から小言が飛んでくるというのに何処へ向かうのだろうか。などと考えているうちに緑谷は角を曲がり、姿が見えなくなってしまった。
一言声をかけておこうと思い後を追いかけるが、角を曲がっても姿が見えない。
「……仮眠室……」
ほんの少しの好奇心だった。
中に緑谷の他に誰かいるのか、いるなら誰で、何を話しているのか。

足音を殺して扉に近づき、耳に手を当て聞き耳を立てた。
この声は……オールマイト？

――――オール・フォー・ワン。他者から個性を奪い、己がものとし……そして、ソレを他者に与えることのできる個性だ。
これは超常黎明期、社会がまだ変化に対応しきれていない頃の話になる――――

オールマイトの話は、個性の出現により持つ者持たざる者の間に軋轢が生まれ、社会が大混乱に陥り文明が停滞した荒廃期があった。という小中学でも習うような内容だ。
しかし、ここからが違った。緑谷から聞いた覚えもある噂話だ。
荒廃期、社会から秩序が失われた混沌の時代に存在したとされる都市伝説の存在。人々から個性を奪い、あるいは与え、強大な力で日本に君臨した、悪の支配者。
個性を与えられた物は負荷に耐えられず廃人になることもあったがその一方、個性が変異し混ざり合うことがあったようだ。
そして彼、悪の支配者は無個性の弟に力をストックする個性を与えた。しかし弟には個性を与えるだけという無意味な個性を宿していたようだ。

――――力をストックする個性と、与える個性が混ざり合った！これがワン・フォー・オールのオリジンさ――――

……なんの話だ。ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン、アレクサンドル・デュマの三銃士だったか。一人はみんなの為に、みんなは一人の為に、という有名な言葉だ。綺麗事だが、それ故に人は惹かれるのだろうか。
話はさらに続き、その悪の支配者はオールマイトが討ち取ったハズだったが、生き延びて敵（ヴィラン）連合のブレーンとして再び暗躍しているのだという。

――――ワン・フォー・オールは言わばオール・フォー・ワンを倒す為受け継がれた力！君はいつか奴と、巨悪と対決しなければ

ならないかもしれん……酷な話になるが――

つまり……緑谷の個性は貰い物であり、それはオールマイトから受け継がれた。なるほど、貰い物であるために制御が出来ず、今まで毎回骨を折っていたのか。……おかしいな、この程度のことなら前世知識で知っていてもおかしくないだろう。日が経つごとに以前の記憶が失われているような気さえする。……考えてもわからないことだらけだ。

しかし、オールマイトは緑谷に一体何を教えているのだ、制御の方法くらい教えなければヒーローになる前に肉塊になっていてもおかしくなかっただろうに。

――そういえば、緑谷少年は薄井少年と仲がよかったね――

――はい、小学校の時から仲良くしてくれてて――

――ワン・フォー・オールについては、もちろん話してないよね――

――は、はい！あれ以来、誰にも話してません、ホントに――

――そうか、ならいいんだ。いやさ、キミ前例あるから――

……そろそろ話が終わりそうだ、バレないうちに早く戻ろう。しかし、オールマイトに個性について尋ねたのは失敗だったか。いらない警戒をさせてしまったかもしれない。

そして帰りのホームルーム。

相澤先生から「夏休み林間合宿やるぞ」とのお知らせがあった。これにはクラスは大盛り上がり。肝試しや花火、風呂やカレー作りなど、わいわいと各々の期待を声に出して言う。

「ただし」

相澤先生の一声でピタッと声がやみ、

「その前の期末テストで赤点取った奴は、学校で補習地獄だ」

再び切島や上鳴が「頑張ろーぜ!!」と自らを鼓舞する様に声を上げた。この肉体はスペックが高いおかげか、今まで勉学で特に苦労した

覚えはないがここはヒーロー科としてだけでなく勉学でもトップクラスの学校だ。慢心せず、しっかり備えねばならない。

「以上、解散。寄り道せず帰れよ」

ほんの少しの好奇心から知らなくていいことを知ってしまったが、何かが劇的に変わるわけでもない。結局のところ、やることは変わらないのだ。

為すべきことを、見つけるために。

Ｎｏ．２２　期末試験　①

時は流れ――期末テスト演習試験当日！

市街地を模した試験場にて、狼は普段よりも深く眉間に皺を寄せていた。爆豪はコレが試験ということを忘れているのだろうか。

戦って勝つことしか眼中にない爆豪、片や勝つことはできないと逃げしか考えない緑谷。

「ついてくんな！ぶっ倒した方がいいに決まってんだろうが!!」

「っ……薄井君も、さっきから本当に黙ってないで！何か作戦を…」

二人の口論は止まらず、緑谷はこちらに助けを求めてくるが、どうしたものか……。

こうなった原因は数十分前に遡る。

▼

前日の筆記試験を無事に乗り越えたＡ組の面々――特に上鳴と芦戸――は束の間の安心を打ち砕かれていた。

事前に試験内容は入試のときと同様の対ロボット戦という情報を仕入れていた彼らだが、突如現れた根津校長から試験内容を「教師との戦闘訓練」にする、との変更を言い渡されたのだ。不満の一つでも漏らしたいところだろうが、変更の理由が理由だ。ＵＳＪ襲撃事件、そしてヒーロー殺しと敵（ヴィラン）連合の繋がり、それらの事件から敵（ヴィラン）活性化のおそれがあると判断。それによる対戦闘の激化を見越してより実戦に近い試験を行うとのことだ。

そして試験内容の変更を言い渡された後、緑谷出久と爆豪勝己、そしてオールマイトと共にバスに乗り込んだ。

車内にはバスのエンジンの駆動音のみが響き、会話は聞こえない。元より口数の少ない狼と、緊張した面持ちの緑谷、そして敵視し嫌っている２人と組むことになり殊更機嫌の悪い爆豪。

あまりの空気の悪さに「しりとりとか、する…？」とオールマイトに気を遣わせる始末である。

そんな気まずい雰囲気のまま、バスは目的地に到着し停止した。
「さて、ここが我々の戦うステージだ」
バスから降りた一同はオールマイトから試験内容の説明を受ける。
制限時間は３０分。勝利条件は彼にハンドカフスを掛ける、もしくは誰か一人でも脱出ゲートを通りステージから脱出すること。実戦を想定した際、敵に勝てない場合は逃げて応援を呼んだ方が賢明という理由から逃走が許されている。
「けど、こんなルール逃げの一択じゃね!?って思っちゃいますよね」
そう言うとオールマイトは腰のベルトについたポーチから腕輪のようなものを取り出して見せる。
「そこで私達、サポート科にこんなの作ってもらいました！超圧縮おーもーりー!!」
某青狸のような口調でそう言うオールマイト。教師陣は合計で体重の約半分の重りを手足に装着するハンデを負いながら試験を行うのだという。オールマイトの体重は２００ｋｇを超えた筈だ、つまり少なくとも１００ｋｇ以上の重りをつけている。……なんというか、雄英は頭がいいはずだが、頭が悪い。
「戦闘を視野に入れさせる為か、ナメてんな」
と爆豪が言う。一流のプロヒーローとヒーローの卵、実力差は歴然。ハンデがなければ誰も戦おうとは思わないだろう。プロが相手、それもナンバーワンにどこまで通用するのかという好奇心はあるが、それはそれ。無視できる強敵は無視するに限る。
「ＨＡＨＡ！それはどうかな！」
それを聞き、不敵に笑うオールマイト。
「さぁ、説明はおしまい。君たち生徒はステージ中央で待機だ！」

▼

そして試験開始１０秒後にはあの有様であった。緑谷が作戦会議をしようと言うが「必要ねぇ、ぶっ倒す」の一点張り。見兼ねて声をかけようとしたが「テメェは黙ってろ」と睨まれ、言い返すのも面倒

なので黙っていた。
「お、オールマイトをなんだと思ってんのさ……いくらハンデがあってもオールマイトに勝つなんて……」
緑谷が次の言葉を発する前に爆豪の裏拳が緑谷の頬を打つ。
雄英入学以前は彼に有り得なかった負けが続き、ましてや長い間下に見ていた緑谷にさえ負けたのだ。本来あってはならない「敗北」の二文字。それが彼の自尊心を傷つけ、勝たねばならないという焦りを生んでいる。
「これ以上喋んな…ちょっと調子いいからって喋んな。ムカつくから」
爆豪は憎悪さえ篭っているような目でそう言い放つ。
「試験、合格する為に僕は言ってるんだよ！聞いてって、かっちゃん…！3人で協力しないと！」
「だァから！てめぇらの力なんざ合格に必要ねぇっつってんだよ!!」
「怒鳴らないでよ!!それでいつも会話にならないんじゃないか!!」
口論がヒートアップしていく。だがお互いの気持ちをぶつけるのは今ではないのだ。流石に付き合い切れない。自分だけでも隠れながらゲートに向かうべきだと判断し、鉤縄を飛ばそうとした時だ。常人より遥かに優れた感覚が、脳に訴えかけてきた。
「見られているぞ」と。
次の瞬間には風圧で体が吹き飛びそうになるが敢えて跳び上がり、空中で体勢を整え着地する。ビルが壊れ、アスファルトの道路が割れ、街灯が曲がり吹き飛ぶ程の風圧。否、パンチ。
「街への被害などクソくらえだ」
ようやく、姿が見えた。砂煙の中から、尋常ではない威圧感と共に、ゆるりと歩みを進めてくる。
「試験だなんだと考えてると、痛い目見るぞ」
筋骨隆々、青を基調としたコスチュームに、ツノのように逆立った2本の前髪。日本の、平和の象徴。
「私は敵(ヴィラン)だ、ヒーローよ」
その威圧感たるや、かの剣聖に並ぶだろう。

全身が警鐘を鳴らしている、今すぐ逃げろと。
これが、平和の象徴オールマイト。剣聖ならぬ、拳聖――
「真心込めて、かかってこいッ」
身を屈め、オールマイトが一気にこちらへ走り出す。
「正面戦闘はマズイ、逃げよう！」
「俺に指図すんな！」
緑谷と狼は踵を返し逃走を図るが、爆豪はそれを拒み爆破の応用、閃光弾でオールマイトを迎え撃つ。そのまま爆破の連打を撃ち込むが効いた様子はなく、簡単に地面に投げられてしまう。
「倒す気しか、ないようだな！そして…君らも君らだ、緑谷少年に薄井少年！」
「うわ!!」
「ッ！」
十数メートルは離れていただろうに、一瞬で前方に回り込まれた。つくづく規格外だ。
「チームを置いて逃げるのかい？」
緑谷は咄嗟に後ろに跳んで逃げ――追撃に来た爆豪と衝突。狼は義手を鳴らし、先日新しく仕込んだ忍具の爆竹をばら撒く。やっていることは爆豪と変わらないが、一瞬のひるみを作るには有効的なのだ。
そのまま刀を横に払いながら後ろに下がり、距離を取る。
「サングラスでもかけて来るべきだったかなッ！」
それを逃さぬよう、巨大な拳が飛んでくる。それを弾くも、二撃目の拳を弾き切れずに体幹を崩し、膝をついてしまう。
「ぐぅっ…！」
「もう一人プレゼントだ、少年たちよ！」
無防備なまま胸ぐらを掴まれ、体勢を整える最中の緑谷と爆豪の元へ投げ飛ばされ、二人に衝突し受け止められる。
「うわっ！大丈夫、薄井くん？」
「てめェら揃いも揃って突っ込んで来んじゃねぇ！」
「……すまぬ」

爆豪が1番に立ち上がり、再びオールマイトに立ち向かうがそれを緑谷が止める。狼も体勢を立て直し周囲を見渡すが、オールマイトの姿が見えない。

「だから！正面からぶつかって勝てる筈ないだろ!?」

爆豪の肩を掴み止める緑谷を振り解き、爆豪は言う。

「勝つんだよ…それが、ヒーローなんだから…！」

「じゃあ尚更ここでの戦闘は…」

「うっせぇ！喋ん…「とりあえず」

不自然に影が差し、頭上から声がした。

急いで上を見遣ると、強引に引き抜いたであろうガードレールをさらに強引に、紙を裂くように容易く二つに千切るオールマイトの姿が見える。個性ありきとはいえ、同じ人間とは思い難い光景だ。

「ガード、レール……ッ!?」

危

致命的な一撃であると、直感が告げる。

「逃げたい君らにはこいつをプレゼントだ！」

咄嗟にその場から飛び退き、振り返りつつ義手を鳴らす、が

「もう、いっちょ!!」

ガードレールを前に構えたオールマイトの突進に反応できず、ビルの壁にガードレールで拘束されてしまう。

背面と腹部に強烈な痛みが突き抜け、鉄の臭いと一緒に胃の中のものをぶち撒けた。

「薄井くん…かっちゃん…！」

自分と同じように、ガードレールで地面に拘束されている緑谷とオールマイトのボディブローで地面に転がる爆豪を見たのを最後に、軽い頭痛と共に意識が遠のく。

▼

夢を見た、あるいは個性に宿った狼の記憶か。
葦名城の横手。深き谷のそのまた先、白い大蛇がとぐろを巻く川、壁に彫られた菩薩像を横目に、武具を扱う猿の群れを超える。
一際大きい、寝そべった菩薩像の下にソレはいた。
身長差は3倍…？もっとあるかもしれない。体重差など考えるだけで馬鹿らしくなる。
白い体毛の、首に大太刀が刺さった、左目が潰れた巨大な大猿。
獅子猿と呼ばれるそれは、ゆったりとこちらに振り返り、縄張りに足を踏み入れた侵入者を排除せんと咆哮する。
獅子猿の懐に潜り込み、斬りつけ、時に弾き、避ける。
初見は為す術なく叩き潰されその巨大さに戦慄したものだが、今はどうだ。獅子猿のなんと小さきことか。
ナンバーワン（オールマイト）と相対した後では、獅子猿（コイツ）がいつもの倍は小さく感じる。オールマイトの速さを体感した後では、コイツの動きが遅く感じる。オールマイトに比べ、コイツの拳の重さはどうだ。易々と弾ける。
獅子猿が体幹を崩し、紅く光る印が頭部に現れる。右目に楔丸を突き立て、引き抜くが、未だ死なぬ。完全に息の根を止めるため背中に飛び乗り、首に刺さった大太刀を掴み、勢いよく体ごと傾ける。
大太刀は役目を終えたと言わんばかりに地に突き立てられ、首を断たれた胴体は力無く前に倒れる。その首は未だ断末魔を上げているかのように大口を開けたまま、胴の傍らに落ちた。

忍
殺
ＳＨＩＮＯＢＩ　ＥＸＥＣＵＴＩＯＮ

獅子猿の首を断ったその直後、視界が切り替わりすすき野原に立っ

ていた。雨粒が頬を打ち、雷鳴が響き渡る。そしてそれらが気にならない程の濃密な死の気配。向けられた殺気は肌を裂き、刀が振るわれる度に脊髄に氷柱を突き刺されたように背筋が凍る。

必死に刀を弾き、敢えて死地へと踏み出し、全霊を以てして忍殺を決める。既に満身創痍、薬水の瓢箪は底を突いたが、確かに一度殺した。しかし、刃を交えた強者たちは常々そうであった。

一度殺しても、死なぬのだ。

血が、たぎって来たわ！

行くぞ、隻狼ぉっ!!

▼

「〜〜〜っ!!……」

肉を斬られ、骨を断たれる。己に訪れた確かな死。

斬られた箇所に手を当てるが傷はなく、血も流れていない。

足元に生えていたすすきは破壊されたビルの瓦礫へと姿を変えており、雷雨だったはずの空は青く晴れ渡っている。

未だに冷や汗が止まらない。無理やり肺に空気を送り込み、大きく吐き出し、精神を落ち着かせる。ガードレールで壁に拘束されていたはずだが、背後の壁が壊され既に自由の身になっている。緑谷と爆豪、オールマイトの姿は見えず、気配も遠い。オールマイトを前にして人ひとり担いでの逃走は困難だ、苦肉の策として拘束だけ破壊したのだろう。一人ではガードレールから抜け出すことも不可能だったのだ、それだけでもありがたい。

体を起こし、弛んだ義手をカキリとはめ直す。忍具はいくつか御釈迦になり、義手も少々軋むが十分に動く。気絶していたにも関わらず刀を握っていた手はそれを離していない。腹部からは鈍い痛みが走り続けているが、問題ない。

「試験は……」

壁が崩れたビルの外に出て、音を聞く。

個性を使うまでもなく、少し離れたところから爆発音が聞こえた。
「まだ、続いているか」
ならば戦わねばなるまい。
駆け出し、跳び上がりながらひゅぱりと鉤縄を飛ばす。ビルの屋上を走り、跳び、強い気配の元へと最短距離で向かう。
オールマイトが見えた、組み伏せられた二人もだ。
ここまで来て迷うことはない。
ビルの縁に足をかけ、赤く光るしるし（オールマイト）に向かい、飛び降りる。
再びだ、さらに　参るぞ。

Ｎｏ．２３　期末試験　②

勝てなかった、今自分が持てる全てを使っても、やっぱり勝てるはずがなかった。

僕ひとりじゃ勝てなくても、かっちゃんと協力すれば、逃げ切れると思った。

でも届かなかった。かっちゃんが自分を犠牲に、僕を先に進ませてくれたのに。二人して捕まってしまい、かっちゃんは気絶してしまっている。オールマイトから逃れようと抵抗するも、それに意味があるようには思えなかった。

十数メートル先に見える脱出ゲートが、どこまでも遠く感じる。

試験時間も残りわずかだ。ここからどうすればいい、どうすれば逃げられる(勝てる)、どうすればかっちゃんを助けられる、どうすれば、どうすればどうすれば

「……頼みの綱だった最大火力はもう潰えた。今度こそ終わりだ」

オールマイトが拳を握る、圧倒的なパワーで天候すらをも変えてしまう拳をだ。手加減してくれているとはいえ、まともに喰らえば一巻の終わりだ。

「くたばれ！ヒーロー!!」

迫り来る拳に、思わず目を瞑った。

しかし、本来訪れるはずの強烈な痛みは未だ訪れず、代わりに一瞬の浮遊感を感じ、そのまま地面に尻を強かに打ち付けた。転んだ…？そんなわけない。なら、そのまま落とされた？何故…？

状況がうまく把握できないまま、心臓を鷲掴みにされたような感覚に、反射的に目を開く。

目の前に見えるのは、柿色の背中と、風に靡く亜麻色の首巻き。

欠けた腕を補う無骨な義手。先の戦闘で髪が乱れているが、その姿は間違いなく薄井狼(ともだち)だった。

「薄井……くん……？」

彼はこちらを横目で見遣り、それからオールマイトに向き直る。

いつもと同じ、少し垂れた、無愛想だがどこか憎めない、優しい目。

きっと気のせいだ。薄井くんから、ヒーロー殺しと同じものを感じるなんて。

▼

「終わりだ。くたばれ！ヒーロー！！」

すまない少年、だがこれは試験。Ｐｕｌｓ（更に向こう）Ｕｌｔｒａ（へ）出来なきゃそこまでだ。気合い入れて頑張れよ、補修！

拳を握り、構えた瞬間――背筋が凍った。

何年振りに感じたであろう、濃く冷え切った殺気。迎撃を放棄して、逃げるように回避したのも何年振りだ。

緑谷少年を捕らえていた手を放し、今出せる最高速で前方に回避し即座に振り返った。

あれは、薄井少年……なのか？先程とは別人のような気迫、ただ殺気を振り撒き猛る狂犬ではない。耐え忍び、虎視眈々と静かに獲物を狙う猟犬……名は体を表すというが、本当の狼のようだ。金の卵とはいえ学生が持っていいモンじゃないぞ…！

「薄井少年、君は一体……ッ」

少年が弓を引くように刀を構え、大きく腰を落とす。

あの構えは、体育祭で爆豪少年にも使った突き技か。あの速度なら重りをつけてても対応は

「思ったよりッ！速い！」

重りのせいで反応が遅れたが、重りを籠手のように使い突きを防ぎ、上に弾き飛ばす。オイオイ、体育祭は本気じゃなかったってことか!?何倍も速いじゃないか、それとも……

「眠れる獅子ならぬ、眠れる狼だったってことか、なっ！」

落下の勢いに回転を加えた少年の踵落としを拳で迎え撃つ。分が悪いと判断したのか、当たる直前に膝を抱え、拳を足場に少年は後方へと飛び退いた。緑谷少年と爆豪少年が協力したことしかり、生徒の成長は嬉しいものだ。緑谷少年の逃走を阻み、覚醒状態（仮）の薄井少年を相手取る。両方やらなきゃいけないのが先生のツラいとこだ

が……先生も、頑張らなきゃな！
「さぁ、私が行くぞ、ヒーロー共!!」
お互いに駆け出し、拳と剣が交差する。
何度も拳を放ち、その数だけ剣が拳を弾く。
動き出した緑谷少年の相手もしなければならない、一回軽く吹き飛ばしてやろう！
「Ｏｋｌａｈｏｍａ（オクラホマ）　ＳＭＡＳＨ!!」
体を捻り、回転するように放つＳＭＡＳＨ。風圧の伴ったそれは体重の軽い狼を吹き飛ばす――はずだった。
事前に危険を察知した狼は、オールマイトがＳＭＡＳＨを放つより先に敢えてオールマイトに向かい跳躍。そのままオールマイトを踏みつけ、さらに風圧を利用し上空に舞い上がる。ガチリと義手を鳴らし、落下の勢いのまま仕込み斧をオールマイトへと叩きつけ、拳と斧がぶつかる。
普通に考えれば、斧が拳を割り、砕くだろう。だが相手もただの拳ではない。天災に勝るとも劣らない拳だ。斧と握り拳という異色のジャンケン勝負は、拳が白星を収めた。
バックステップで距離を取り、再び義手を鳴らす。
ガギッと、嫌な音がした。敵から視線を外さないように義手を見遣ると、忍具を仕込む絡繰り筒の部分がイカれてしまっていた。残る忍具は、道具とも呼べぬ有様の砕けた斧の持ち手のみ。義手が外れかけるほどの衝撃を身に受け、更にその拳と真正面から打ち合えば多少歪みもしてしまうか。幸い義手は動く、製作会社とサポート科へのクレームを考えるのは後回しだ。
再びオールマイトに肉薄する。
一度敗れるまでは、目が追いついても体の反応が間に合わなかった。だが今はなんとか体が追いついてくれる、動体視力に反射速度が噛み合い始めている。集中しろ。こちらから打ち込む隙は無いが、十全に弾けている。拳を弾くことだけを考えろ、相手の体力と体幹ゲージは意識するな、動きが濁る。どう弾けば体幹に響くかだけを、どう崩すかだけを、どう体を動かすかだけを、どうすれば己が死なないか

を。

どう、敵を殺すかだけを。

長く長く感じた、ほんの十数秒の打ち合い。その末、遂にオールマイトが、地に膝をついた。

紅く光る印が、首と左の脇腹に見える。

対象の致命傷になりうる部位が、ハッキリと。

体が自然と動いた。体を捻り、鳴らぬ義手を鳴らし逆手に握るは、鋭利にささくれ立った仕込み斧だったもの。そ、れを…迷い、なく、脇腹に……

「――――――」

今、何をしようとした　刺せ。何を、考えていた　殺せ。俺は――

―

オールマイトの巨大な拳が迫る。刀を体と拳の間に割り込ませるが、焼け石に水だったろうか。

視界が真っ暗になり、地面が消えた。

▼

知らない天井だ。

意識が朦朧としている。試験はどうなった、緑谷や爆豪、オールマイトは……

痛みを訴える体を無視して体を起こす。どうやら雄英の校舎内のようだ。休憩室か何かのようで、ベッドが複数備えられており、隣のベッドではボロボロの爆豪が眠っていた。

忍装束（ヒーローコスチューム）を着たままだが、義手は付けておらず、刀も見当たらない。

ひとまず、合否はともかく試験は終わったようだ。それがわかると途端に体の力が抜け、体を起こしているのすら億劫になり再びベッドに横たわることにした。

横になりながら、オールマイトとの戦いを思い出そうとして、やめた。今は体を休めよう。思い起こすならば、きっと鬼仏に対座したときがいい。そのまま目を閉じ、体が求めるまま意識を手放した。

▼

期末テストの翌日、教室の一角は悲惨な空気に包まれていた。

演習試験をクリアできず不合格、赤点が確定した者たちだ。面構えが違う。

「皆…土産話、楽しみに…うう、してるっ…がら！」

目に涙を浮かべながら芦戸が言う。入学初日の個性把握テストのように合理的虚偽かもしれないと緑谷が励ますも、フラグ建築にしかならない。

「試験で赤点を取った者は学校に居残りで補習地獄」担任のこの言葉を聞き、必ずかの林間合宿に行かねばならぬと決意した。

彼らは学生である。故に楽しそうなことに対しては、人一倍に敏感であった。

そして試験を終えた結果がコレだ、現実は非情である。

絶望の最中、教室の扉が担任の相澤により勢いよく開かれる。

「予鈴が鳴ったら席につけ」

皆が席につき、教室は静まり返る。

「残念ながら赤点が出た。したがって…」

「林間合宿は全員行きます」

担任は有情であった。

教室の中に一気に活気が満ち始める。

林間合宿に行けない、というのは生徒に追い込みをかけるための合

理的虚偽。しかし、全部が全部虚偽ではないようで林間合宿での特訓に補習が追加されるようだ。

満ち始めた活気がスッと引いていくのを感じつつ、合宿のしおりの配布でＨＲは終了した。

「１週間の強化合宿か！」

「結構な大荷物になるね」

「場所は……海が近いな」

帰り支度を前の席の飯田と、既に支度を済ませた緑谷に手伝ってもらいながら会話に混じる。海はよくない、単純に波で動きにくいのもあるが、塩水はよく目に染みるのだ。

「水着とか持ってねーや、色々買わねぇとなぁ」

「暗視ゴーグルとかな！」

峰田は相変わらずだが、上鳴の言うように必要なものが何かと多そうだ。商店街ならば他より安く済むだろうかと考えていたところ、パンッと手を叩く音と一緒に声が上がる。

「あ、じゃあさ！明日休みだしテスト明けだし……ってことで、Ａ組みんなで買い物行こうよ！」

葉隠がそう提案するとクラスはわいのわいのと騒々しくなり、全員それに大賛成といった様子で盛り上がっている。

どうしたものかと考えていると、軽快な足取りの葉隠がやってきた。

「ね、ね！狼くんも一緒に行こうよ！」

朗らかな期待のこもった声と共に、透明な手が差し出される。

葉隠の手を取る

↓葉隠の手を取らない

「……すまぬ。義手の修理が間に合っておらん」

しかし、期末試験の対オールマイト戦にてお釈迦になった義手の修理が終わっていないのだ。今は絡繰仕掛けの無い見た目を補うだけの義手をつけているが、片腕しか使えない状態で行くのも迷惑になるだろう。

「――そっか、じゃあまた今度！絶対行こうね！」

「……ああ」

一瞬の悲しげな声色が、嫌に耳に残る。

選択を…間違っては、いないはずなのに。

Ｎｏ．２４　林間合宿①

先日、被害こそなかったがショッピングモールにて緑谷出久が敵（ヴィラン）と遭遇。その事件を鑑みて敵の動きを警戒した雄英は、林間合宿の行き先を急遽変更。場所は当時まで明かされず、着いてみてのお楽しみとなった。

という話をされたのが数日前である。

現在、雄英高校１年Ａ組の面々はバスに乗り込み林間合宿へと向かっている最中であり、休憩のためバスから降り外の空気を吸っていた。

無いと落ち着かないという理由で刀袋を背負ってからバスを降りた狼は、崖下に広がる森や遠くに見える山を眺めていた。広大な自然はかつての葦名を思い出させ、何となく懐かしい気持ちになるのだ。

「休憩だー」

「おしっこ、おしっこ……」

体を伸ばしたり、深呼吸したりしているが、何人かが違和感に気づく。

後続を走っていたＢ組のバスが見当たらないのだ。そして休憩に降りたはいいが周りに何の施設もなく、トイレすら見当たらない。そのことを疑問に思う声が上がるが担任からの説明はなく、独り言のように「何の目的もなく、では意味が薄いからな」とだけ呟く。

そして二つの人影がＡ組の前に現れ、声高らかに口上を述べる。

「煌めく眼（まなこ）でロックオン！」

「キュートにキャットにスティンガー！」

「「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!」」

「今回お世話になるプロヒーロー「プッシーキャッツ」の皆さんだ」

と相澤先生が簡潔に説明する。

ヒーローオタクの緑谷はもちろん知っているようで、いつもの如く興奮した様子で早口で詳細を説明してくれている。４人で一つのヒーロー集団であり、山岳救助を得意とするベテランヒーローらし

い。
　いつもの癖はさておき、プッシーキャッツの一人、マンダレイが現在地から数十キロは離れているであろう山を指差す。
「ここらへん一帯は私らの所有地なんだけどね、あんたらの宿泊施設はあの山のふもとね」
「遠っ!!」
「え…？じゃあ何でこんな半端なとこに……」
「いやいや……まさか」
「バス、戻ろうか…な？早く…」
　これから何が行われるのか。全員何となく察してきた様子だが、それを認めたくない面々は急いでバスに逃れようと。受け止め、覚悟を済ませた者たちは肩を回したり、屈伸したりなど既に準備を始めている。無言で刀を袋から取り出した狼も、後者の側である。
「ダメだ…おい……」
「バ、バスに戻れ！早く！」
　数名がバスに駆け出すが時すでに遅し。雄英高校は常に試練を与え続けるのだ。相澤先生が無情にも告げる。
「悪いね諸君。合宿はもう、始まってる」

危

　地面が隆起する。それは大津波のように生徒たちを押し流し、崖下へと連れ去る。崖上からマンダレイの声が響いた。
「私有地につき個性の使用は自由だよ！今から三時間、自分の足で施設までおいでませ！この…魔獣の森を抜けて!!」
　……というのを、下から聞こえてくる叫び声を背景に、狼はバスの上から聞いていた。
　勝手に体が動いてしまったのだから仕方ない。しかし、学生時代から逸話を残すプロヒーローは得てしてこう言うのだ「考えるより先に、体が勝手に動いていた」と。そんな話を聞いた覚えがある。

そんな言い訳を考えていたところ、相澤先生とバッチリ目が合った。身を隠していないので当然と言えば当然だが。

「……と、言うわけだ。薄井」

相澤先生が睨みを効かせて名前を呼ぶ。大人しく行ってこい、声に出さずともそう聞こえた。

「……体が勝手に」

「はよ行け」

崖下を指差した先生に言い訳を途中で遮られてしまう。言葉を続けようものなら論理的かつ合理的な言葉で言い負かされるだろう。

やはり見逃してはくれないようだ。

「はい……」

ヘアゴムで髪の毛を縛り、後ろで一つに纏める。刀を腰のベルトに差し、抜刀。そのまま駆け出し、崖下へと飛び降りた。

木に鉤縄を飛ばし、勢いをある程度殺してから着地する。

A組の皆は既にある程度進んでいるようだ、前方から叫び声と何かしらの戦闘音が聞こえる。合流できない距離では無いが、わざわざ足並みを揃える必要も無いだろう。

駆け出そうとしたその時、ボコッと地面が隆起し、何かが飛び出してきた。外見だけ言えば獣のようなそれは、明らかに尋常の生物ではない。身の丈の倍はある巨躯に、大きく開かれた口に樹木のような牙が生えたソレは、獣と呼ぶには、あまりにもこの世の動物と異なっていた。魔獣と呼ぶに相応しい形相だろう。

刀を上段に構え、こちらに狙いを定めた魔獣を見据える。魔獣が体勢を低くし、こちらに突進してくる刹那。地面を強く踏み込み、力強く刀を振り下ろす。葦名一文字、そう呼ばれるこの技は無骨に、正面から叩き斬ることを一意に専心する。その専心故に、強いのだ。

地面が軽くへこむ程の踏み込みから繰り出されたそれは、迫り来る魔獣の頭部を難なく粉砕した。反撃はなく、確かに仕留めた。

文字通り土に還ったそれが動かないことを確認し、先に進む。この程度の強さならば、いちいち相手取る必要もない。ただ駆け抜けるのみだ。

▼

ＰＭ２：５０

お天道様が頭上から傾き始めてしばらくした頃、狼は宿泊施設へと到着した。思いのほか時間がかかってしまったのは、目的地まであと半分といったところで急に魔獣の動きが変わったからだ。ただ襲いかかってくるだけだった魔獣が急に徒党を組み、連携しつつ進路を塞ぎ、死角からも攻撃してくるといった、明らかに知性ある行動をし始めたのだ。あの魔獣も個性によるものだろうが、確実に途中から自動操縦（オートマ）から手動操縦（マニュアル）に変えられた。もしくは初級から中級、あるいは上級に難易度が変えられた。義手忍具があれば幾分かマシだったろう、だが急に放り出された為に忍具がなかったのだ。

肉体は問題ないが、精神的に疲れた。葦名でも動物には散々痛めつけられたのだ、苦手意識が無いわけがない。猿と牛と鶏は苦手なのだ。

「君、やるじゃん！予想よりずーっと早い！」

施設の入り口にプッシーキャッツの１人がいた。土を操作し、魔獣を作り出していた張本人。途中から急に難易度を上げた下手人だ。

「プッシーキャッツの……」

「ピクシーボブね。途中で土魔獣ちょこっと強くしちゃってゴメンね、君だーいぶ余裕そうだったから」

「……」

「悪かったて！ほら、バスから荷物下ろして、汗も怒りも温泉で流してきな」

「…はい」

言いたいことがないわけでは無いが、彼女の言うこともっともだった。言葉に従い、一通り行動を済ませた後だ。野菜を運ぶ髪を縛ったエプロン姿の相澤先生という激レアな光景を見かけたりしつつも、時間を持て余していた。料理の手伝いに行くか、持ち運びミニ

鬼仏と対座するか……迷った末、部屋の隅に鬼仏を設置し、その前で座禅を組み、瞑想を始めた。

▼

それは大きく、燃えるような赤黒い毛と、一つの角を携えた怪物は鬼と形容するに相応しいだろう。骨張った肉体を裂くように炎が漏れ出しており、本来左腕があるはずの場所は半透明の歪な形の炎が、腕の代わりを成している。月明かりの中、嫌に目立つそれは、通常の炎とは異なって見えた。

こちらに気づいたのか、骨張った炎の鬼は咆哮を上げるとこちらへと駆け出してきた。

刀を構え、右腕の振り下ろしを弾く。次いで出された踏みつけも同じく弾き、斬り返す。振るわれる炎の左腕は弾かずに回避し、蹴りを弾き、斬り返す。一撃一撃が強力、二度も喰らえば致命傷は免れまい。だが動きは単調、油断しなければ負けることはない。オールマイトに比べれば、コイツを下すのは容易いだろう。

弾き、斬り返しを幾度も繰り返したところで、鬼が膝を突く。

額に刀を突き立て、一度目の忍殺。このような手合いは、二度三度殺してやらねば死に切らぬ。鬼は呻き声を上げ、痛みを誤魔化すかのように地面に額を叩きつけ、そして動きが止まる。

それは苦悩に満ちた者が頭を抱えるように、己の無力を嘆く者が膝を折るように、何かを祈るように、とても戦いの最中にするような行為ではない。刀を突き立てる、またと無い好機。

だが、斬りかかることができなかった。理由はわからない。己が身すら焼く炎を纏い周囲にそれを撒き散らす存在が、理性なき獣のようなそれが、まるで助けを求める人であるかのように見えてしまった。

それを見ると、何故か喉の奥が締まる。ただの怪物に情けを、憐れみを覚えてしまう。

呻き声が一際大きくなり、地面がへこむほどの頭突きが繰り出される。一瞬の硬直、その後に顔を上げたそれに、先ほど感じた人間味は無い。

それが上げた遠吠えに、ハッと意識を戻す。未だ殺し合いの途中なのだ。

振り下ろされる左腕と共に炎が地面を走り、こちらに迫る。横に大きく跳躍することでそれを回避し、鉤縄で肉薄する。

着地と同時に斬りつけ、先程よりも速い右腕の叩きつけを弾き、踏みつけを起点とした蹴りによる連撃を辛くも弾き切る。元の動きよりもキレが増し、多彩になった。能ある鷹は爪を隠すと言うが、目の当たりにすると先程までは遊ばれていたかのようで中々腹立たしい。

苛烈な攻撃を弾き、避ける、が精細さを得た動きを全て見切ることは難しい。幾度も弾き、斬り、避ける中で出来た傷を、薬水の瓢箪を呷ることで癒す。

繰り出される2連の薙ぎ払いを跳ぶことで対処し、ついでと言わんばかりに頭部に蹴りを入れ更に跳び上がる。崩れた体勢でこちらを見上げる鬼の額に、落下の勢いのまま再び刀を突き立て、刀を背負うように引き抜き、着地する。

これで、終わりだ。

大きく体勢を崩した鬼の角を掴み、勢いのまま刀を突き立てる。二度の忍殺でつけた傷跡を更に広げるように、刀で顔を斜めに切り裂いた。

鬼は跪き、天を仰ぎ、叫び声を上げる。

憤怒、憎悪、後悔――積もりに積もった怨嗟の念が、鬼の叫びと共に爆ぜる。

土煙が上がり、わずかに残った炎の燻りだけが弱く明かりを放つ。

今やその燻りすらも、消えかけている。

冷たく輝く月明かりが世を照らす。

せせらぎの音だけが周囲を包み、戦いが終わったのだと暗に感じさ

せられた。

忍
殺
ＳＨＩＮＯＢＩ　ＥＸＥＣＵＴＩＯＮ

立ち去ろうとしたその時

篝火に焚べた薪が爆ぜるような、音がした

曙に見間違うような、朱い光が世を照らす。
それは野に山と積まれた骸を露わにし、竜泉川を朱く染め上げる―

―

一条の朱い炎、それが闇夜を斬り裂き

葦名の地に、大神（鬼）が出た

左腕の炎は失せ、だがその代わりか、刀のように形作られた朱い炎

を右手に握っている。いっそのこと神々しさすら感じる光を放つソレは、恐ろしくも、とても優しいものに見えた。

数秒の睨み合いの後、鬼が左腕を振るい、爆ぜた炎が撒き散らされる。踵を返し駆け出すことでそれを避ける。だが

危

次の瞬間には、目の前に鬼がいた。

音もなく現れたソレは、気づけば目の前におらず。

袈裟に斬られた傷跡と、自身の胸から生える明るい炎の刀、そして足元に広がる血の水溜まりが結果を物語っていた。

最期に見えたのは、刀を引き抜き、片手でこちらに合掌をする鬼。

またひとつ流れ落ちた命は、川を再び赤暗く染める。

Ｎｏ．２５　林間合宿②

いつもより早い起床時間、山々の背後から現れた太陽が彼らを照らす。

土の香りを感じながら伸びをすれば、いつもと違う目覚めに高揚感と大地の優しさを感じる。

深呼吸をすれば、日差しから木々に守られたひんやりと心地のいい空気が肺を充し、どこか晴れやかな気持ちで1日を始められる。

なんだかいつもより穏やかに過ごせそうな、そんな朝――

「煌めく眼でロックオン!!」

「猫の手　手助けやって来る!!」

「どこからともなくやって来る…」

「キュートにキャットにスティンガー!!」

『ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!!』

そんな朝の訪れではなく、決めポーズと共にフルメンバーのプッシーキャッツが現れた。

「サーチ」の個性を持ったラグドールが個性を分析、最適な訓練を導き出し、土を巧みに操る「土流」の個性を持つピクシーボブが各々の訓練に見合った場を作り出し、マンダレイの「テレパス」の個性で一度に複数の人間へサポートをする。そこに虎が殴る蹴るの暴行を加えることで大勢の訓練を少人数でカバーできるというわけだ。なんと隙のない、完璧な構成であろうか。

名前順でどんどん指示が出されていくが、しかし苗字が「う」で始まるため早期に呼ばれるはずの狼だけがポツンと、その場に残されていた。

ハブられた、狼はそう考える。

「で、本当なの?ラグドール」

「うん、君の情報だけどね、全っ然っ!見えないにゃん!!あちきの個性「サーチ」は居場所も弱点も、見た人の情報丸わかり!……のはずなん

だけど……」

どうやらハブられたわけではないらしい。

しかし新たな問題があるようだ。相手にとっても、自分にとっても。

「……それが、見えない」

「そう！まるで煙がかかったようにボヤけてて……猫の手も借りたい状況！心当たりあったりするかにゃ？」

「……ありませぬ」

十中八九、隻狼関係。となると、この容姿や身体能力、戦闘能力は不思議パワーではなく個性由来……ということになるのだろうか。ならばもう少し身長が高くてもいいだろうに。

ああでも無いこうでも無いと相澤先生、マンダレイ、ラグドールがしばらく話し合いを続け、その結果。

個性を発動しつつの戦闘訓練を行うことなった。つまり初日とやることはほぼ変わらないのである。違いと言えば忍具が使えること、そして逃走が許されないことだろうか。

そろそろ訓練も終わり日が暮れ始めた頃、クラスメイトが夕食作りの準備に励むなか、狼は宿泊施設から少し離れた川辺で、岩に腰を下ろしてせせらぎの音に耳を傾けていた。

自然に囲まれたこの環境だからだろうか、川の音を聞いたときふと平田屋敷を思い出し、望郷の念に駆られたのだ。

葦名があの後どうなったのかは、わからない。

そもそもこの世界に葦名が存在したのかも。

不死断ちをしたのか。人返りを成したのか。竜胤を返す旅路に出たのかも、わからない。

「……」

川辺に生える葦の茎を引き抜き、葉をちぎり、クルクルと丸める。

山の背後に沈み行く夕日を一瞥し、息を吹き込んだ。

ピュ――イッ……

ピィ――――イ……

音の余韻が失せ、せせらぎの音しか聞こえなくなる。狼は拵えた葦の葉笛を川に投げ捨てると、足早に宿泊施設へと向かった。

▼

ガリッ…カリッ……と、木を削る音が静かな空間に響く。

少し肌寒さを感じるのは季節のせいか、隙間風のせいか。鬼の形相を浮かべた仏像に囲まれたその場所は、懐かしさと帰ってきたのだという安心を心に与えてくれた。

「……なぁ、お前さん」

聞き慣れたような、そうでないような声が聞こえてくる。声がする方に振り返れば、ノミで木を彫る橙の着物を着た男と、忍義手をつけた姿が朧げな男がいる。

「何だ」

「その時が来たら、斬ってくれ」

「…何の話だ」

「……他に、頼める相手もいない」

「……」

「頼んだぞ」

忍義手の男は悩むように考えた後無言で立ち去る。残された2人の間に会話はなく、木を彫る音だけが静かに響き続けた。

しばらくして、男はこちらをチラリと見ると、木を彫り続けたまま話しかけてきた。

「……忍というものは、得てして業を背負いやすい」

何を、と言おうとしたところで気づく。何か黒いモヤのようなものに包まれ声が出なければ身動きも取れない。関係ないと言わんばかりに男は言の葉を続ける。

「戦うほどその身に背負い、心に抱える。そして傷を負い、血を浴びるほど、業は積もり――――あまつさえ、殺めたものの業さえ引き受け

る」
　男はこちらに背を向けたまま続ける。
「だが、お前は忍ではない。鉄の掟もなければ、付き従う主もいやしない。わかるか、お前は――」
　徐々に視界が暗くなっていく最中、男がこちらを振り返り、その容貌と相見える。
「忍として生きる必要も、ない」
　それは、あまりにも見慣れた顔立ちのように見えた。

▼

　体を起こし、周囲を見渡す。まわりのクラスメイトは、まだ寝ている。
　足音と気配を殺しつつ身支度を整え、しばらく瞑想することにした。二度寝するには目が冴えてしまったし、鬼仏に対座するのはなんとなく気が引けたのだ。
　合宿は3日目、日が昇ると昨日と同様に訓練を行う。
　ただださえハードな訓練に加え、補習組は睡眠時間が短いということもあり今にも倒れそうな様子の生徒も多い。そんな中、相澤先生が喝を入れる。
「何をするにも原点を常に意識しとけ、向上ってのはそういうもんだ。何の為に汗かいて、何の為にこうしてグチグチ言われるか！常に頭に置いておけ」
　その言葉はクラス全員に響く。
　ヒーローを目指すからには、そう思い至った強い原因、理由が存在するはずだ。生半可な覚悟では、ヒーローになど成れない故に。
　だがしかし、どうだろうか。
　今までヒーローに憧れたことはあったろうか、名前も素性も知らぬ他人を助けたいと思ったことはあったろうか。
　己の原点とは、一体何であろう。

自分の、為すべき事とは、一体――

深く考え始めようとしたところで、横から巨大な牛を模した土魔獣に突き飛ばされた。牛に轢かれるのは慣れているが、自分の原点とやらは頭を悩ませども見つかることはなかった。

▼

その日の夜。

クラス対抗の肝試しが開催されることになっていた。

個性柄、狼は物音や匂いなど人の気配に聡いため、あまり楽しめるとは思わず辞退しようかとも考えていた。だが無情にも相澤先生に連行されて行く補習組の面々を見てからではなんとなく言い出しにくく、結局はペア決めのくじ引きに参加していた。

手にしたのは、8番のくじだ。

「8番…緑谷とか」

「あ、薄井くんも8番？よろしくね」

「あぁ」

と言っても8組目は一番最後、出立までしばらく時間がある。

特にすることもなく、肝試し中はわざと気づかないフリをした方がいいのかなどと考えつつ5組目のペアが森に入っていくのを見送っていた。

「…ねぇ、薄井くん」

「なんだ」

「いや、今日はなんだかずっとボーッとしてるから、珍しいなって」

「……そうか。すまない、気をつけよう」

「あっ！いや、そうじゃなくてさ！悩んでる風にも見えたから、何か僕でも力になれることがあればって思って」

「悩み、か……」

無いと言えば嘘になる。夢のことや、相澤先生の言葉。

後者はともかく、前者の事は話すべきことではない。自分は狼の写し身であり、その記憶のようなものを夢で見たなどと唐突に話したと

て気が触れたとしか思えない。後者にしても、緑谷には言いづらい。無個性故に夢を否定され続けた者に、自らの怪我すら省みずに人を助け、ヒーローたらんとする者に、なんとなくでヒーローを目指してるなどと。

なんと答えるべきか考えていると、ふと違和感を感じる。

「……焦げ臭い」

森の方角から何かが焦げる臭いと、嗅ぎ慣れない嫌な薬品のような臭い。個性を視力に集中して森の方を見遣る。

「え、焦げ臭い……？かっちゃんや轟くんが間違って個性を使うなんてことないだろうし、夕飯作りの薪の始末もしっかりやったはずだし……人より五感が優れてる薄井くんが言うんだから間違いは……」

「……森の奥、肝試しとは少し逸れた方角に小さいが黒煙。緑谷、マンダレイに報告を」

「う、うん！わかった」

消火活動はピクシーボブの土を操る個性で事足りるだろう。

となると黒煙の原因はなんなのか、まさか誰かが怖気て個性を暴発させたなんてことはありえまい。

そして、どうやら緑谷が報告に行ったことでみんなが異変に気づき始めたようだ。マンダレイがテレパスで森の中の生徒に避難指示を出す間にも焦げ臭さは強さを増していく。

個性を解いて、足音に気づく。

２人分の足音、ならば肝試しから戻った生徒かと思うが、次の瞬間には間違いに気付かされる。

「!?——な、何!?」

困惑の声を上げるピクシーボブに皆が振り返る。

ゴッ、と鈍い殴打音が鳴ると、血の匂いが鼻を突いた。

「な、何で……！万全を期したハズじゃあ……！」

峰田が震え声で叫ぶ。

「何で、何で敵（ヴィラン）がいるんだよォ!!!」

頭から血を流し、意識を失い倒れ伏すピクシーボブ。それを踏みつけ足蹴にする武装した２名の敵。全員がそれらに目を向けるなか、た

だ1人だけが違うモノに目を奪われていた。黒煙が登る方向、その原因となったモノに。

「……炎が――」

薄井狼ただ一人が、燃え盛る蒼い炎から目を離せないでいた。

Ｎｏ．２６

突如現れた2名の敵（ヴィラン）に、プロヒーローが既に一人戦闘不能に陥った。彼女を踏みつけるヴィランが何か宣っているが、彼の耳に届いているようには見えない。只々、彼は燃え盛る蒼い炎に目を奪われていた。

「薄井くん！聞こえていただろう、君も早く施設へ！」

避難の指示が出されていたのだろう。クラス委員長である飯田が呼びかけるも、彼はふらふらと歩き出し、森の方へ、ヴィランが目の前に居ようが関係なしに進んで行く。慌ててマンダレイと虎が彼を制しようとするも、するりと抜けられてしまう。

「ほう、逃げずに立ち向かうか！だが愚か、蛮勇は勇気にあらず。貴様もまた偽物だ!!」

剣をツギハギにして作られた大剣を持つヴィランがその凶刃を振るう。まともに食らえば即死は免れないその横薙ぎの一撃を、あえて前方へ飛び出し距離を潰すことで難なく避ける。さらにすれ違い様にヴィランが背負った刀をひったくり、後ろから蹴りつければ、相手は容易に体勢を崩した。

「んもぅ何やってんのよスピナー！」

刀を構え、追撃を加えようとするも、もう一方のヴィランが巨大な棒磁石で彼を潰さんと襲い掛かる。しかし

「させぬわ！我らに任せて貴様はさっさと施設に戻れ!!」

虎がヴィランを殴りつけることで彼への攻撃を阻止し、そのまま近距離での攻防へと持ち込む。彼の身体能力ならば、この隙に施設へと走り出し無事に到着してみせるだろう。だが、それは彼にその意志があればの話だ。フラフラと、しかし確りとした足取りで彼は森の奥へと歩を進める。

直感に任せしばらく進むも、こうも燃え広がっていては炎の出どころが掴めない。森の中では視界も悪く、頼れるのは聴覚のみ。

わずかに聞こえる戦闘音を頼りに駆けることにした。

音の下にたどり着いたとき、そこは炎ではなく氷に包まれていた。

ハズレだ。そう思うも束の間、殺気を感じ取り反射的に刀を構え、弾く。

「君も…肉、見せて」

攻撃してきたのは、拘束具に縛られた男。歯が刃物になり、自由自在に操れる個性といったところだろうか。個性を足代わりに、間合いの有利を取りつつ俊敏な移動をこなしている。器用なものだ。

「薄井!?なんでここに…」

「チッ、近接増えても意味ねェ！」

気絶しているB組の生徒を背負った轟と、爆豪。

そして、獲物を逃すまいと強烈な殺気を隠そうともしない敵。

邪魔をするのならば、斬るしかあるまい。

彼は2人より一歩前に出ると、小声で何か唱え始める。

想起するは仁王が一尊。地を踏み締め、阿攻に構えることで人ならぬ御霊の加護を己が身に降ろす。

「ッおい待て！1人で突っ込むな！」

彼は静止を無視し、敵へと駆け出した。

迫る歯刃を弾き、弾けぬ物は避け、時に受け流す。

敵は歯刃を竹馬のように扱い高所に陣取っており、敵に攻撃は当てられず防戦一方に見えるがしかし、優れた忍びの防御は同時に攻撃を兼ね備え、相手の体幹を削り取る。体勢を崩し致命的な隙を晒した者の末路は一つ。

動きの止まった歯刃に鉤縄を飛ばし、高く跳び上がる。心臓に狙いを定め、突き立てるその刹那、敵の目がギョロリと動き彼を捉える。

開けられたままの口から歯刃が伸びるのと、彼の刃先が敵に食い込むのはほぼ同時。僅かに逸らされた刃は心の臓を捉え損ね、空中に身を晒す彼に、眼前に迫る歯刃を避ける術はない。

視界の右半分が赤く染まる。刀を握る手から力が抜けるのを気力で抑え込み、半ば落ちるように刀を引き抜き着地する。

顔半分が熱い、視界の半分が奪われ残り半分の視界も安定しない。

呼吸で体と心を整えろ、息を吐き体勢を整えろ。呼吸が乱れていては、殺せるものも殺せない。

どうすれば奴を殺せる。体幹を崩しても高所にいられては先程と同じく反撃される。刃の届かぬ敵を如何に斬ろうか、如何に斬るべきか……

刀を構え、迫る攻撃を弾き、考えを巡らせる。

十数秒の攻防の後、何を思ったか彼は刀を鞘に納め、力無く目を伏せる。それは側から見れば諦めのように見えた。

だが彼には何故だか確信があった、今ならできると。

危

肉体が迫り来る死を訴える。

その場にいる誰もが彼の死を確信したその刹那、彼の姿が掻き消えた。静寂が訪れる。そして四方から彼に迫る歯刃が全て折れる。

否、折れたのではない。斬り落とされたのだ。

一体何が起こったのか。

一瞬たりとも目を離してはいないはずだ。

あの状況で助かるなど、あり得ない。脳がそう訴えるが、視界からの情報がそれを否定している。

彼と相対するヴィランでさえも、何が起こったのか理解できずにいる。

その一瞬の思考停止。

彼が次の行動に身を移すには充分すぎる時間であった。

納刀されたままの刀から放たれるは神速の居合。その一閃を浴びたヴィランは体幹を崩して落下し、致命的な隙を晒す。

迷いなく突き立てられた刃は、すんなりと心の臓を穿った。

彼が刀を引き抜くと、ヴィランから朱い鮮血が一気に噴き出し、ドクドクと流れ出る。大量の返り血を浴びた彼は、何ともないように刀の血を払った。

炎の明かりに照らされ、ぬらぬらと反射する返り血はまるで炎のようで。彼の身体が燃えているかのように錯覚させる。

「薄井、お前…ッ」

轟が、声を上げる。
突然現れた同級生が、自分達が苦戦していたヴィランを圧倒し、何もできず、止める間も無く何の戸惑いも無く殺した。今向けられている後ろ姿が、かつて戦ったヒーロー殺しと重なる。いや、違う。アレよりも遥かに恐ろしいものに見えた。ヒーロー殺しはあくまでも目的の為、手段として人を殺めていた。だが、今の彼はどうだ。なぜ、敵を殺めた？
声に反応した彼が、こちらを振り向く。
傷を負っているというのに。たった今、人を殺めたというのに、彼は。
「何で、笑ってやがる……テメェ……！」
おそらく初めて見るであろう薄い笑みはあまりに悍ましく、およそ彼らが知る薄井狼とは思えないものであった。
彼が体をこちらに向けると、背筋がひやりとした。咄嗟にいつでも個性を発動できるように構えるが、その時は来なかった。
側に立つ氷塊を見つめたまま、彼の動きが止まる。

なんだ、この姿は

氷塊に映る自身の姿を見た。
横隔膜がせり上がり心臓が早鐘を打ち始める。
俺は、何をしていた
真っ赤な水溜りに倒れる敵の姿が目に入る。どう治療したところで助かりはしない、完全に死んでいる。
お前がやった。氷に映る自分がそう言った、気がした。

再びゆっくりと、氷に映る自分に向き直る。
血に塗れ、土に汚れ、まるで幽鬼のようではないか。
お前がやった。薄らと笑みを浮かべた自分がそう言う。
その姿は、まるで――
「――修羅」

あぁ、確かに。俺は戦いを楽しんだ、力を振るう快楽に身を任せて殺した。防戦に徹すれば傷を負うこともなかったろうに。

今になって理性が仕事を始め、もっと斬り殺せと囁く声が小さくなる。

これからどうすべきだろうか。二人に見られた以上、今更無かったことにはできない。二人を殺せばいい。それはダメだろう。

また修羅が顔を覗かせる前にここで自刃すべきか？流石にショッキングすぎるだろうか。

考えに耽っていると、微かな冷気と共に危険信号を体が感じ取る。それを避ける気にはなれず、そのまま轟の放つ氷に拘束された。

「今のお前は、普通じゃねぇ……悪ぃが拘束させてもらう」

「……構わぬ」

その後、特に会話があるわけでもなく。暗闇で暴走したダークシャドウを沈めに来た緑谷達を見たのを最後に、何者かに触れられた感触と共に視界が暗転した。

No. 27

闇、ただ暗く……自分の手足すら見えない。体の輪郭が解け、闇に溶け、自分がそこに存在しているのかもわからなくなる。体に力も入らなければ、動かす気力も湧いてこない。

そんな時間がどれだけ続いただろうか。

急に肌寒さを感じ、顔を上げた。

ゆっくりと目を開くとそこは、あまりにも見慣れた景色。

宿敵と、そして父と死闘を繰り広げた国を一望できる城の天辺……見間違うことなく、確かにそこは葦名城、その天守閣であった。

その中央に座し俯くのは竜胤の御子、そして御子に手を伸ばす悍ましい気配を放つ男がいた。

お守りしなければ。腰の刀に手を伸ばそうとするも、夢で仏師殿に会った時のように、体が黒いモヤで包まれ拘束されている。

動け、動いてくれ！もう失えない、失いたくない…！

男の手が御子に触れた刹那。ぶわりと下から風が吹き上がり、御子を中心に火柱が立ち昇る。

炎で遮られ様子が伺えない中、その奥で黒い影がゆらりと蠢く。しばらくして火の勢いが収まると、胸を背後から貫かれた男と、そしてその下手人の姿が——歪な炎で形取られた左腕を持つ男の姿が見えた。

刀が引き抜かれ、男が倒れる。再び勢いを増す炎に視界が埋め尽くされ、全てが赤に染まり、そして黒に染まる。

コツコツと、足音と共に悍ましい気配がこちらに近づいてくるのを感じた。ガチャリと扉が開く音がする。近づいてくるのはドロドロとしていて、しかし燃え盛るような力強さを放つ存在。ただただ不気味な気配を放つ存在は、自分の目の前で立ち止まった。

「はじめまして、薄井狼くん。いや——竜胤の忍と呼んだ方がいいかな？」

顔をすっぽり覆ってしまう大きく無骨な被り物をした、スーツ姿の男は、優しげな声でそう言い放った。
「竜胤」その言葉を聞いて反射的に男に飛びかかろうとするも、付けられていた拘束具に阻まれる。その反応を見て男は楽しげに笑う。
「はは、忍者だというのに随分とわかりやすいじゃないか」
この男は、なんだ。何故、竜胤を知っている。気を失っている間に何があった。
「……」
「元々は君の個性を貰おうと思っただけだったんだ、見ての通り僕は目が悪くてね。だけど」
男の手が眼前に広げられ、ゆっくりと迫り来る。
本能的にマズいものだと感じとるが、身動きができず避けることはできない。顔が手で覆われ、掴まれる。
パァン！と何かが弾ける音と共に赤い光が目に飛び込んで来た。
「……この通りさ。今回は干渉する前に弾かれてしまったな」
男の手が、赤く燃えている。男は何ともないようにそれを払い、両手を広げ演説するかのように話し続ける。
「だが！思いもしないオマケが付いてきた。竜胤、他人の命を吸い取る黄泉返りの個性！……ただ、個性黎明期ならいざ知らず、現代社会でヒーローが敵を殺すことはほぼ無い…なら僕が奪っても宝の持ち腐れかって？いいや、そんなことはない」
ならどうするかって？と楽しそうに嗤いながら男は続けた
「僕が親元になり、適当なヒーローを竜胤で縛ってから、殺し続ける」
何を、言っているのだ。この男は……
「するとどうだ。そのヒーローを発端に親類縁者、交流の深いヒーローがまるで感染症に罹ったように簡単に死んでいく。試してみる価値があると思わないかい？」
あぁ、この男は…殺さなければ。
「おや…もう来たか。悪いね、薄井くん。もう少し君とお喋りしていたいんだけれど、来客だ。なぁに、またすぐに会えるさ」
男がそう言い終え、部屋から出て行ったところで外から大きな破壊

音が聞こえた。
とてつもなく大きな力と力のぶつかり合いは止まず、激しさを増していく。
その間もなんとか拘束を解けない物かと身を捩るもびくともしない。
音で状況を探ろうにもこう密閉された部屋では、外の細かい音は聞き取りにくい。
どうしたものかと考えを巡らせる最中、突如ゴボりと口から溢れ出た黒い泥に体が飲み込まれていく。
驚く間も無く景色が変わり、泥と拘束から解放された時には周囲に破壊し尽くされた街が広がっていた。
そして、オールマイトの叫びが耳に届くとき。
「薄井少年!!避けてくれェーーーッ!!!」
鋭い衝撃が、胸を貫いた。
細く、骸骨のように萎びたオールマイトの姿、自分の胸から突き出た黒く鋭い枝。
突然のことに理解が追いつかない。
しかし、あぁ。この、感覚は――――

▼

オールマイトとオール・フォー・ワン（ワン・フォー・オール）の戦いは熾烈を極めていた。拳がぶつかり合う度に衝撃波が大気を揺るがし、戦いの余波で既に街が半崩壊していた。
テレビ中継されているその戦いを見ながらも、人々はどこか他人事でいた。いくら敵（ヴィラン）が強くても、ヒーローがボコボコにされても、オールマイトがなんとかしてくれる。
それも偏に、彼が数十年に渡り、拳一つで数多の絶望を打ち砕き、平和の象徴として存在し続けたが故だろう。

その安心が、たった1人によって築かれた平和が、まさに今崩れ始めている。

避難しそびれ動けない女性を守るために、オールマイトは敵（ヴィラン）の攻撃を拳で受け止めた。

だがしかし、その姿はどうだ。頬はこけ、筋肉は萎み、まるで骸骨のようで、とても頼もしいだなんて言えない。

それでも、不敵に敵（ヴィラン）を睨む瞳は、未だ平和の象徴は折れていないと、そう示している。心が折れかけようとも、守るものがあるからこそ、守るものが多いからこそ、ヒーローは負けないのだ。そう宣い、拳を握る。

「そうか、そんなに守りたいなら僕からもひとつプレゼントしよう」

何もない空間から、黒い泥が溢れ出す。

「貴様、まさか…っ、やめろォォォォ!!!」

オールマイトは拳を構え、駆け出す。駆け出そうとするも、足がとてつもなく重い。限界を超え、それでもまた超え続けた。ここで超えられなくてどうする。

「生徒を殺されるのはどんな気分かな、後で教えてくれよ。オールマイト」

「薄井少年!!避けてくれェーーーッ!!」

黒い泥から薄井狼が、彼の生徒がその姿を現す。

「オールマイ、――」

言い切る前に、狼は左胸を貫かれた。嫌でもわかってしまう、心臓を貫かれた。助からない。胸から血を流す生徒を、見ていることしかできなかった。

「はは、守るものが減ってしまったじゃないか。――まいった、強情で聞かん坊なことを忘れてた」

それでも、それでも私は、平和の象徴は折れず、折れることを許さない。たとえ自らの手で下した敵（ヴィラン）が敬愛する師の孫であると告げられても、折れることができない。

背後に守るものがいた。負けるなと請われた。助けを求められた。仲間のヒーローに助けられた。

皆から勝利を願われた。
――だから、勝った。
残された全てを使い切り、勝利を収めた。
全ては、終わりを迎えた。
「オールマイトの交戦中もヒーローによる救助活動が続けられておりましたが、死傷者はかなりの数になると予想されます――」
ニュース番組のレポーターが現場の様子を全国へ届ける。画面の向こうでそれを見た人々はようやく安心を胸にし、白み始めた空と共に、悪夢から解放される。
「元凶となった敵（ヴィラン）は…今！オールマイトらによる厳戒態勢の中、移動牢にいれられよう、、と――えっ」

けれど、けれども。
悪夢は巡り、そして終わらないものだ。

「い、い！今、何者かが突如現れ　元凶の敵（ヴィラン）を背後から　馬鹿速く！速く逃げろ!!
映像が乱れる。赤色の何かで首を貫かれたＡＦＯ。下手人は瞬く間に姿を消し。
最後に映されたのは、赤く、静かに広がる、桜の花のような炎だった。

〇月×
×日
神奈川県横浜市神野区にて大規模な敵災害が発生。
ヴィラン名「ＡＦＯ」とプロヒーロー「オールマイト」が交戦。重傷を負いつつもオールマイトが勝利を収めた。
しかし、その後に炎熱系の個性を持つ謎のヴィランが突如襲来。
数時間に及ぶ戦闘の後、エンデヴァーを始めとするプロヒーローの尽力により制圧された。
しかし戦闘に参加したプロヒーローをはじめ多くの民間人にまで

甚大な被害を与え、神野区は壊滅。死体が山と積まれ、血の川が流れたとすら噂されている。

一連の事件は「神野の悪夢」と呼ばれ、オールマイト台頭以来、史上最悪のヴィラン犯罪として人々に記憶された。

上記を踏まえ、「薄井狼」を敵（ヴィラン）名「修羅」として敵（ヴィラン）認定。現在は対個性最高警備特殊拘置所、通称「タルタロス」にて収容中。

No. 28

あの邪悪は、殺さねばならない。
失われた体温が戻ってくるのと同時に、そう強く思った。
竜胤を手にしようと我らの道を阻む者とは幾度となく戦い、全て葬ってきた。為すべきことを為すために、必要とあらば全て殺してきた。
ならば此度も同じだ。竜胤を狙う者を討ち取る。
懐かしき桜の香りが鼻腔をくすぐる。
ゆっくりと息を吸い込み、目を開く。手の内には不思議と刀が握られていた。これで殺すに困らない。
柄を強く握り込めば、身体に力が漲った。
歯刃の敵との戦いで無意識に使った、己に宿るもう一つの個性。
個性を自覚したことで気づいた。阿攻、吽護、剛幹、月隠、夜叉戮に次ぐ、六つ目の力。
『隻狼の御霊降ろし』
全て合点がいった。自分のモノではない記憶、ハンデ有りとはいえオールマイトと打ち合った戦闘能力、誰に教わるでもなく独力で会得した技。この身に隻狼を降ろしていたのなら全て納得できる。
同時に、己の内に燻る炎もその一部なのだと。
これ以上殺せば、その業に呑まれ戻ることはできないだろう。と自分が言う。
竜胤を狙う賊を殺せ、殺めた者の業を引き受けるのもまた忍だ。と自分が言う。
葛藤——A組での思い出が蘇る。たった数ヶ月だが、悪いものではなかった。だが、人を殺めた後に笑みを浮かべていた自分を思い出し、それは霧散した。今は人殺しではなく、人を救う者が英雄と呼ばれる時代だ。
……あそこには戻れない。
ならば、何を迷う必要があろう。

気配を殺したそれは、短く息を吐くと脱兎の如く駆け抜けた。
ヒーロー含め、全員が油断していたのだろう。
オールマイトが辛勝を納め、ようやく悪夢のような時間が終わったのだ。
故に、潜む次の悪夢に気付けたのはわずか二人。オールマイトとエンデヴァーのみ。
その二人でさえ、拘束されたＡＦＯを警戒していたために反応が遅れる。
朱い刃はＡＦＯの首を貫いた。
瞬間、脳裏に夥しい数の怨嗟の声が鳴り響く。
そして、抵抗するそれを愉快そうに一つ一つ、笑いながら捻り潰していくＡＦＯの姿をも幻視する。
なるほど、あの男は正しく狂っていたのだろう。他人の個性を奪い、命を踏み躙り、未来を破壊する。それらに愉悦を感じ、奪い踏み躙った者の怨嗟を宿しながら正気でいた。これを狂気と言わずしてなんと言おうか。
幻視したＡＦＯの胸を刺し貫く。
お前は既に死んだのだ、もう大人しくしてくれ。
血振りをし、納刀したところで横合いから銃弾が飛んできた。ＡＦＯが消えた今、怨嗟の声の向く先が変わったのだろう。
身を屈めそれを避けると、葦名十文字で銃弾を放った怨嗟の声を斬り捨てる。
それを皮切りに、次々と怨嗟の声が襲いかかってきた。
個性を用いてこちらを殺さんとするそれらを、撫で切りにする。
殺した数が１０を超えたあたりから数えるのをやめ、ただひたすらに殺した。襲ってくるから殺した、撃ってくるから殺した、邪魔だから殺した、逃げるから殺した、命乞いをしたから殺した。殺したいから殺した。やがて殺す理由もわからなくなった頃、骸が山のように積まれ、流れた血が川のようになっていた。
それに目を取られていたところで、逆にこちらが焼き殺され、意識

は途絶えた。

▽

ハイツアライアンス、全寮制が導入された雄英高校で新たに生徒たちの家となる場所。その玄関口に1―Aの面々とその担任の相澤消太は集まっていた。そこに普段のA組のような明るさや騒がしさはなく、暗く重い雰囲気に包まれている。

「おはよう諸君。……まァ、聞きたいことはあるだろうが、その前に一つ。当面は合宿で取る予定だった仮免取得に向けて動いていく」

「その上で大事な話だ、いいか。轟、切島、緑谷、八百万、飯田。この5人はあの晩、薄井と爆豪の救出に赴いた」

クラスに動揺が走る。

「その様子だと行く素振りは全員把握していたみたいだな。色々棚上げした上で言わせてもらうよ。オールマイトの引退がなけりゃ、薄井、爆豪、耳郎、葉隠以外全員除籍処分にしてる」

オールマイトの引退によってしばらく混乱が続くうえに敵連合の出方が読めない以上、雄英が人を追い出すのは危険すぎる。故に除籍にはしないが、信頼を裏切ったことに変わりはない。正規の活躍をして失った信頼を取り戻してほしい。

そう言い切り、次にもう一つと続けようとしたところで声が上がる。

「っ先生!……その、狼くんは……どうなったんですか……」

「…今言うところだったよ」

相澤は目を伏せ、重々しく口を開く。

「行方不明、だそうだ」

なんで、と全員が思う。

信じたくはないが彼の死を信じざるを得ないと思っていた。胸を貫かれる彼の姿が、テレビの中継に確りと映っていたのだから。

なのに、行方不明。
「そんな…」
みんながざわめく。遺体すら見つからなかったのか。
相澤は心の中で舌打ちをしながら言う。
「……オールマイトさんが言うには、薄井は生きている、とのことだ」
重々しい雰囲気が、少しだけ明るくなる。
こんな生半可に希望を持たせるようなことを言うべきではない。
校長とオールマイトが言うには、生存は確認したが炎熱系個性の敵による二次災害の後に行方が分からなくなった。これを生徒に伝えてどうすると言うのか。苛立ち、眉間に皺が寄る。真実を話さない校長とオールマイト、何より生徒を守れなかった自分の不甲斐無さに腹が立つ。
「以上。中に入るぞ。前向いて行こう」

Ｎｏ．２９

目が覚めれば、４畳ほどの薄暗く無機質な部屋にいた。
ここは、どこなのだろう。記憶が酷く曖昧だ。確か…林間合宿に行っていたはずだ。それで、敵の襲撃があって……それで、どうなったのだったか。
ベッドから体を起こして、義手が無いことに気づく。身につけているオレンジ色の服以外なにも所持品が無い。右目がズキリと痛む。既に治療され眼帯が付けられているようだが、いつ負傷した？
部屋を見回すも簡素なトイレと水道、それと今座っているベッド。一番目につくのは監視カメラと一体化した銃器だ。試しに部屋の中を軽く歩いてみたが、常に射線をこちらに合わせてくる。
扉は重々しく、目線のあたりに小さな窓があるだけでドアノブすら存在しない。
察するに、ここは牢獄か何かだろう。
捕えられた理由はわからないが、大人しくしている他ない。
数日後、唐突に扉が開かれた。
黒い軍服のようなロングコートを着た男が「出ろ」と一言だけ発する。男の側には、ライフルを持ちヘルメットやプロテクターなどで全身を固めた者が2名。
大人しく立ち上がり、扉の外に足を踏み出す。
「ついて来い」
言葉に従い、男の後に続く。脱走しようにも背後から二つの銃口を向けられているため下手なことはできない。仮に事を起こそうにも、刀も無く両手を塞がれていては待つのは死だけだろう。
しばらく移動した後、分厚いアクリル板で区切られた部屋に通された。区切られたその向こう側、酷く痩せ細りまるで骸骨のような見た目の男が座っていた。弱々しい見た目に反し、雰囲気は強者のそれだ。
それに、どこか見覚えがある気がする。
「っ、薄井少年……」

「……オール、マイト？」
「あぁ、これが私の本来の姿さ。……今日は、君に聞きたいことがあってここに来た。だがその前に、君に謝らなければならない」
オールマイトは立ち上がり深く頭を下げた。
「あの夜、君を守れなくて本当にすまなかった…ッ!!」
突然の謝罪に戸惑う。何故オールマイトが自分に謝罪しているのだろう。
「あの夜…とは」
「…覚えて、いないのかい？」
「……はい」
オールマイトは額に手を当て、少し間を置いてから言葉を発する。
「本当に、何も覚えてないんだね…？」
「……何が、あったのですか。緑谷や葉隠…他の皆は無事なのですか。そもそも、ここは…」
「……順を追って話そう」
林間合宿3日目の夜、敵連合の襲撃により爆豪と自分が誘拐されたことを聞いた。怪我はあったものの、今は全員無事に過ごしているらしい。
そして爆豪と自分の救出作戦の際、敵連合の親玉と苛烈な戦闘を繰り広げ、その勝利の代償に今の姿になっているのだと。
「…だが戦いの最中、人質に取られた君を、私は目の前で……」
「は……？」
先程も疑問に思ったのだ。守れなかった、救えなかったと、さっきも聞いた。自分はこうして生きているというのに。
嫌な思考が過ぎる。
「……戦いが終わった後のことだ。君は、突然生き返った。そして、ここにいる」
「……」
「ヒーロー科のみんなは、無事だよ。何人か怪我をしてしまったが、今は元気にしているよ」
「……オールマイト、俺の額に、白い痣は……ありますか」

「……ある。その白い痣は、黄泉返りの個性の影響か…」
お互いに沈黙が続く中、スピーカーからの声がオールマイトに退出を促した。
「すまない。今君にしてやれることが、私には無い…だが必ず、必ずまた来るよ。胸を張って、私が来たと、君を迎えに来る」
それまで待っていてくれ。力強くそう言い残し、オールマイトは面会室を後にする。
外に出た彼を待っていたのは旧知の仲である警察官、塚内直正。
彼もまた、別室でオールマイトと狼の会話を聞いていた。
「オールマイト、彼は…」
「ヤツの個性で操られていた可能性は高い…と、思う」
「だとしたら何故ＡＦＯは彼を…まさか、不死の個性が本物か確かめるためか？」
「…かもしれない。ヤツとの面会は？」
「いや、手続きにしばらく時間がかかる。しばらく先になるだろうな」
「そうか……」
無機質な廊下を歩きながら、オールマイトは眉間に皺を寄せながら面会室で会った狼を思い出す。
最初に目を合わせた一瞬だけだったが、ゾッとし息を呑んだ。
纏う雰囲気が、まるで別人のようだった。それはすぐになりを潜めたが、長年ヒーローを続けてきた経験と直感が一瞬でも警鐘を鳴らした。
だが彼は、ヒーローを目指し学友達と切磋琢磨する学生だと否定する自分もいる。
「…やはり、死柄木が気がかりか」
「それも、そうだが……塚内くん、君は薄井少年を見て、何か感じなかったかい？」
「何か、と言うと？」
「…いや、忘れてくれ。改めて、まだまだ止まっていられないと思っただけさ」
オールマイトは緑谷出久を信じ、力を託した。

ならば、緑谷出久が信じる薄井狼を私も信じようと、彼はそう結論付けた。

夏の陽射しに空を見上げれば、それはどこまでも青く澄んでいた。再び彼が仲間と共にこの青の下の歩く姿を想い、監獄の暗い静寂を後にした。

その数ヶ月後。

春を迎えるよりも早く、その静寂は破られることになる。